



あこら横浜発
333号

全基 廃炉へ

— 再稼働反対 —

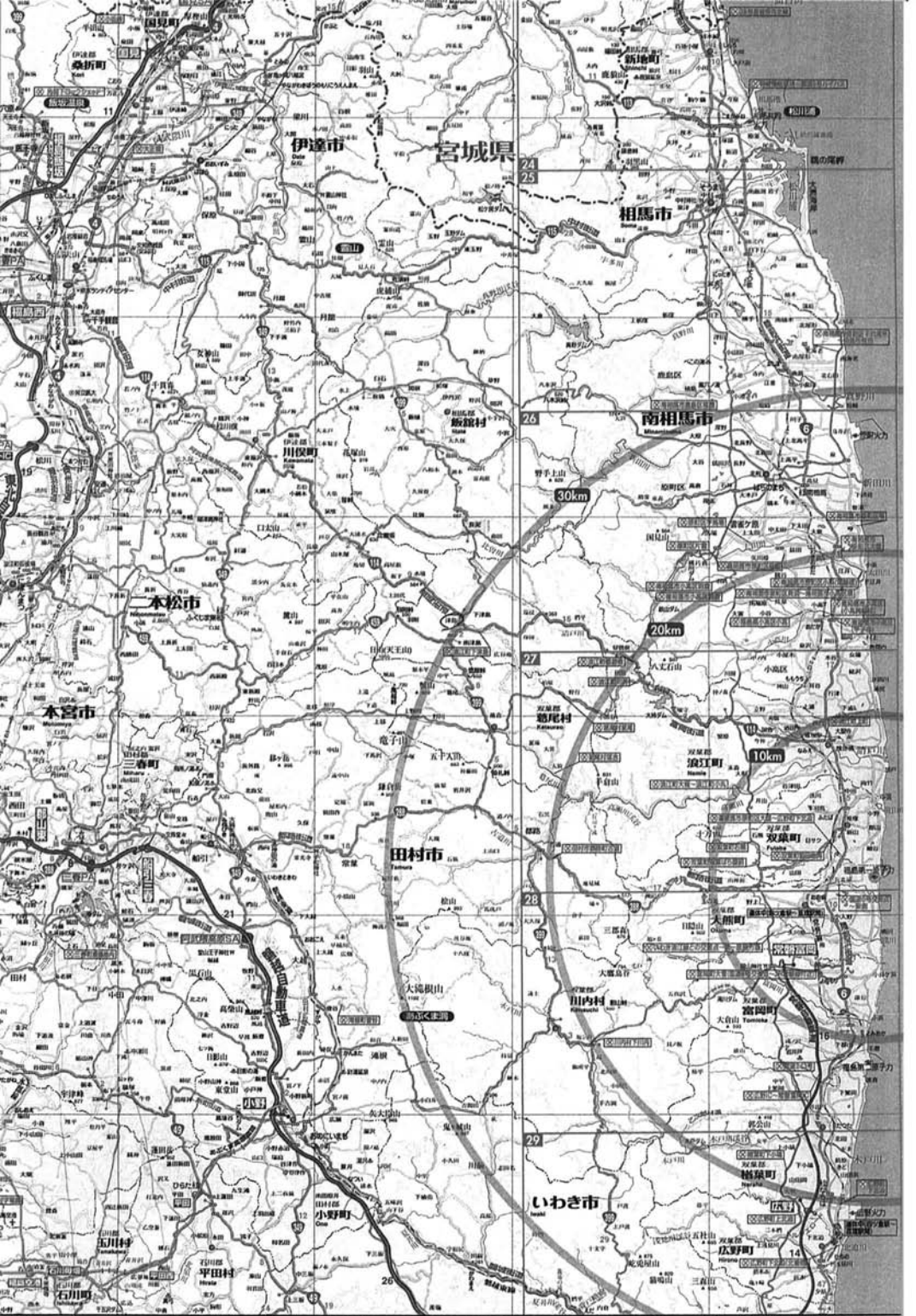




全基 廃炉へ 一再稼働反対

目 次

表紙	……………	撮影・新美みつ子	
巻頭言 あれから1年 記憶の共有のために……………	新美みつ子	2	
福島県・飯舘村、葛尾村……………	撮影・新美みつ子	4	
現地報告 イン・フクシマ……………	新美みつ子	7	
高橋正人さんからのお手紙 ― 飯舘村長泥の住民……………		18	
脱原発！ 原子力発祥の地から……………	東海村長 村上 達也	22	
自治体だからこそ変えられる！ 脱原発・エネルギー転換へ 世田谷区長 保坂 展人		30	
東北大震災と東海地震 ～福島原発と浜岡原発～……………	馬場 利子	38	
生まれること、そして死ぬこと……………	宮本久美子	45	
ふくしま集団疎開裁判……………		58	
『歩み直しの 道普請』……………	服部 素	62	
町田の母たちの活動 ― 3・11から1年を経て……………	林 加奈子	65	
「危険なものは、もう絶対に造らないで」……………	塚本 誠子	91	
東日本大震災・福島原発事故から1年を迎えて……………	矢部 慶喜	94	
ニュースの焦点 放射性物質はどのくらい放出された？ ……	抄訳 田澤 修一	110	
横浜の学校施設から高濃度放射性廃棄物……………	横浜市議 井上さくら	114	
原発を引きずり走るリニア……………	懸樋 哲夫	118	
またしても放射能禍……………	堀場 清子	134	
沖縄という海は、今日も荒れています……………	浦島 悦子	138	
今年は 大雪だった……………	押見 操子	148	
意思を通すには、お金が要る(2)……………	押見 操子	156	
あごらのあごら……………		168	



記憶の共有のために

新美 みつ子

あれから一年。私たちは、あの日の記憶を共有してきたのだろうか。日々、だれだれと、何を、

どのように掬いあげ、記憶を脳の底に定着させる営みをしてきたのだろうか。そして、これから、何を共有していくのだろうか。音もない、色もない、匂いもない「あれ」。「あれ」に根生いの地を奪われた人たちがいる。帰ることのできない「根生いの地」。

希望というものがあるのだろうか。誰に言われたわけではない。地べたを這うようにして、各地で放射能を測る市民がいる。あなたたちの被曝はわたしたちの被曝であること。数万人の人びとが、脱原発を胸にかかえ、道を歩き続けている。人を孤独にさせないこと。「あなた」がいるから私が在るという、当たり前なこと。

あの日。2011年3月11日。TVの臨時ニュースとして、突如、眼前に押し寄せた千年の時を遡る光景。帰らぬ夥しい人びと。福島海岸に屹立する東電第一原発からは、天に目掛けて濃い水蒸気が吹き上がる。薄黒い煙が混じり始める。17日、駐日アメリカ大使は80キロ圏内の在米アメリカ人に退避勧告を出した。いくつかの国も、そうした。同日、日本の枝野官房長官は、その態度を「自国民保護の観点からより保守的な判断」だと説明し、日本の20キロ圏内避難を見直さないと表明。さらに政府は言う。放射能の拡散を予測する「SPREDI」の試算結果の公表を遅らせたのは「国民はパニックになるから」と。

枝野らに問う。この国に住む者は「保護」に値しないのか。パニックに陥り、「右往左往する阿呆のかたまり」だとかいうのか。それならば、こう答えよう。愚民も愚民なりの方法で時には牙をむくだろう。国から棄民された者は、国に抗う。

あれから一年

2012年4月11日、浪江町は、国と福島県に対し、「国は、事故直後、放射性物質の拡散情報を把握しながら的確に提供せず、被害を拡大させ、震災関連死者数79名を出した」として、「刑事罰に値するのではないかと業務上過失致死傷で刑事告発することを検討」したという。

昨年の3月28日、原発敷地内からブルトニウムが検出された。メルトダウンを認めたのは、ようやく5月になってからだ。ルモンド紙は、2011年12月8日「福島原発の原因は地震」と報じた。

馬淵議員は、事故後の雨ざらしになった4号機の中に入った唯一の国会議員だ。「使用済み燃料プールというものを初めて見た。押しつぶされそうな恐怖を感じた」という。彼らが多用した「想定外」。言葉の軽さに、いつそう弾みをつけた。

原発は、ひとたび爆発したら、生態系を予測なく乱す。警告してきた科学者たちがいたし、今もいる。彼らは、徹底した兵糧ぜめにあいながら研究の自由を護った。続く者も出てこよう。

2011年、「原子力災害対応労働者の産業保健」と題して、産業医科大学国際シンポジウムは、五項目に「労働者・市民・企業・行政・専門家およびその学会・大学および研究機関・病院・NGO等、社会各層は、その各々が期待された役割を果たすなかで、最大限透明性を保ち協力するが、特定の利害に左右されず、癒着されてはならない」と宣言した。

『あごら』は「市民の広場」。私たちは、以前と同様に、立ち位置を確認しながら、深海に生きる魚族のように自ら光を放ち、期待された役割を爾々淡々と果たそう。根生いの地の声を蘇らせよう。記憶の共有のために。

それを、わたしたちは、希望と名づける。

(あごら横浜)



ここから先は「警戒区域」。東電福島原発から、半径20キロメートル地点。災害対策基本法により、「立入制限に違反する場合には、10万円以下の罰金又は拘留」



「沈黙の春」



飯館村標識



浪江町標識



三春町・仮設住宅地内の
集会所。葛尾村の住民が
避難している



京都から派遣された看護師
(右から2人目)



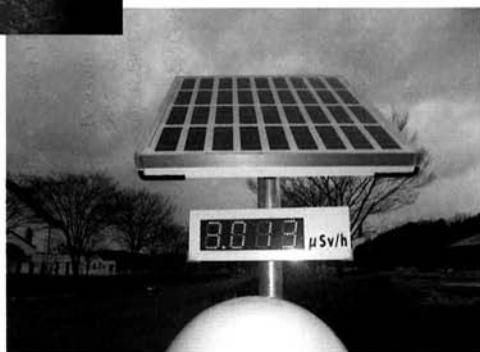
三春町・仮設住宅の談話室



福島市松川町の仮設住宅



放射線量を測る住民



飯舘村中学校校庭の線量計

現地報告

イン・フクシマ

新美みつ子

被災三県の女性への援助活動として、国が「電話相談事業」を開始した。大手新聞は原発被災者の声をほとんど報道しなくなりつつある。今だからこそ、聞いておくべきことがあるかもしれない。

2012年3月25日。イン・フクシマ。

案内と運転手を務めてくれたのは山形在住の農民、秋葉。「行くっちゃ」。

進路、三ヶタ国道114号に取る。山あいの田んぼ、畑、点在する民家を縫うように川俣町を通過。家もそのまま。車もそのまま。人気のない冷たさが山間を覆っている。牛舎も空っぽ。行きかう車は、警察車両だ。店の前に貼られた「CLOSED」の紙切れ。かすかな猥雑さもない。鴉さえどこに消え

たのか。レイチェル・カーソンは、こういう風景を「沈黙の春」と名付けたのだろうか。そう、ここは「計画的避難区域」。住民は、取る物もとりにあえず避難し、仮設完成まで各地を転々としたのだ。

県道を東に折れ、山の中を走る。このまま行けば20キロ圏内。崖下転落の防止用の白いガードレールのある下り急カーブを切った瞬間、人影が動く。人間だ。車を止める。

「東電の者だったたら、ごせつばらやげで、鎌で首かき切ってやるとこだ。」

ここは、長泥地区で、元住民だという。あの日、放射能は10・20・30キロと、コンパスで描いたように同心円的には拡散しなかった。

放射能は、双葉から浪江、葛尾、津島、長泥方向

をまるで直撃するように降りそそぎ、そして拡散していったのだ。

高橋正人さん。75歳、松川の仮設から、山林手入れのため、通っているのだという。春には桜が咲き、20キロ先の海を臨むこの山。旅人のための湧水も整備しておくのだ。妻は、長泥の自宅を片付けている。二人で、仮設から持参した握り飯を食べて、松川の仮設へ帰るという。

そうだ。もう福島だって春なのだ。じきに山は、爛漫の桜で霞むだろう。持参した『あごろ』（2003年7・8月合併の286号）「原発・その恐るべき実態」を、恐る恐る差し出す。

彼は、「8年前から、あんだらは言っていたんだ。なんで知らせなかったのか。」と、食い入るようにページをめくる。8年前、ここで、この雑誌は歓迎されたであろうか。

高橋さん、日焼した顔を、まっすぐに向けて問う。「あんだ、ざまあみろって、言えてべ。このざま

あだもの。」「言わない。絶対に。だって、誰に向かってそれを言うの。東電、政府、原発推進者に言ってみたところで、今、何も変わらない。その言葉、被害を受けた人びとに降ってくるだけ。金輪際、言わない。あの日からそう決めたから」。

警察隊の車両が止まり、何をしているかと穏やかな関西風の言葉で問う。『あごろ』の名刺を見せる。首から放射能線量計をぶら下げたその若い警官は「フエミニズムって書いてるなあ」。滋賀県警からの派遣。あのなあ、あんまりぶっそうなこといわんでな、と住民を一応なだめつつ、急カーブに車が止まっていると危険やから少し移動させなあかん、と私たちにも注意し、パトロールカーに戻る。高橋さん、夜、仮設に訪問してもいいと言う。

飯館村を出て葛尾村に入る。津島を下り、無人の葛尾村役場にたどり着く。

役場敷地内のモニタリングポストの計測値は「毎

時0・417マイクロシーベルト」。パトカーが寄ってくる。何しているのかと険悪な顔で聞く。警視庁からの派遣。秋葉、運転免許証の提示を求められ、身元照会をやられている。コソ泥に間違われたのかなあ。TVで見た白い雨合羽のようなもの、正式に



葛尾役場の線量計

は「タイベックスーツ」というらしい。今はだれも着用していない。

すぐ先の十字路近くにプレハブのパトロール小屋がある。県の「絆事業」の一環。空っぽになった村の防犯と警備のための監視小屋。



葛尾村パトロール小屋の皆さん

5、6名が交替で常駐。壁面には、全国から派遣された警察隊や訪問した俳優の渡辺謙の写真などが貼ってある。的確に答えてくださるのは消防団長。

葛尾村では、3月14日、21時に避難することを決定。22時30分に住民はとりあえず、少しの着替えなどを持ち福島東総合センター行きのバスに乗る。

住民は、あつという間に広がった噂を十分信じていた。東電関係者が逃げたとか、オフサイトセンタ―も逃げたとか、噂はおそらく住民にとって現実味があつたのだろう。たつた2、3日の避難と思つて

いたのがこんなことになって、今だに先が全く見えない。除染と言ったって山が8割。住宅の周り20mほどやったところで効果はない。隠さないで正確な情報を出してほしい。チュルノブイリだとか北朝鮮だとかあれは社会主義国の話で、まさか日本で、隠したり、嘘をついたりするとは思わなかった。国は住民を騙したんですよ。原発は安全だと言い切った

月日	血圧	脈拍	体重	その他
1/20	134/89	70	8	
1/23	129/93	83		
2/3	151/101	95	36.5kg	
2/10	135/90	86	36.5kg	
2/11	136/85	85		
2/20	133/97	83		
3/3	150/100	96		

葛尾村住民の血圧表。毎日記録をつけている

のに、こんな事故が起きた。被曝した土地に戻すのは日本だけです。このまんまでは、原発再稼働には絶対反対なんです、と言う。

メンバーには女性もいる。50代の彼女は、血圧が上がってきたという。前は、60の110だったのに、今は下100、上が140になった。生活だって、前は山から薪を採って切り出し、ストーブや風呂炊いて、水は山から引いてきて、電気代だって8千円くらいだったのに仮設でだよ、ガス代と水道代でだよ、1万6千円以上だ。4畳半二つで親子3人だよ、息詰まるべ。息苦しいもんだべ。

彼女は手芸が得意だなんだ、と仲間が教えてくれる。それでもねえ、と気丈そうな彼女が、はにかむ。先、見えねえあんだよ。

途中、パトロール中の警官ふたり寄る。北海道警からの派遣。遺体捜査にもかかわったとのこと。警官のために小屋の人が醬油を付けて焼いた餅を振る舞う。一時帰宅した人が線量計を借りに顔を出す。帰る

際には返す。役場の測定値はいつも低いが自分の家は高かったという。事故がなければ、マイクロシールド、ミリシーベルト、ベクレル、チュルノブイリなど、舌かみそうなカタカナ用語に縁がなかったかもしれない。原発の本を買うこともなかったかもしれない。彼女が言う。

「あれにな、色でもついていればな。色も匂いもないがらな。」

私たちが小屋を去る時、彼女は、「逃げるようにして帰るなあ」と、しっかりした目で何回もいう。3時間いた。長居し過ぎたかのような時間だったのに。

村で生まれ、育ち、そこで結婚し、今も生活している場所なのだ。ある作家は、そういう地を「根生いの地」と呼んだ。山の水と薪で台所を賄ってきた自負がある。手になじんだざらついた薪の、どっしりとした重み。おもむろに火をつけ朝が始まる。彼女なしに家庭は回らない。彼女からその自負を奪ったものがある。かまどの煙は時にはけぶり、彼女の

泣いた涙も隠してくれただろう。泣きたい時は湿った薪を用意しよう。そうやって、女たちは、自然に助けられて生きてきた。

「警戒区域」20キロ圏に到着。「立ち入り禁止」の看板。「だめだ。入れない」と、警備の警察に止められる。

「災害対策基本法」に基づく禁止なのだ。違反すると「10万円以下の罰金又は拘留に処する」。

「20キロ圏内に留まっている住民がいる」との噂を確認したかったが諦める。村人がいうには、百姓は米、味噌、醤油は何年分も蓄えているし、畑に行けば野菜もあるし、食物には困らねえべ、という。まだ、頬の赤い、若い警官二人。彼らへの被曝量、将来、どのような形で現れてくるのだろうか。

飯館村役場に着いたころはもう、薄暗くなっていた。秋葉が言う。「飯館村は、日本一美しい村を目

指し、かつ村長の英断で、農繁期の一番忙しい時期にドイツに女性を研修・出張させた」と。女性のいない農繁期を男たちはどう迎えたのだろうか。

役場近辺の中学校のモニタリングポストは0・8
毎時マイクロシーベルトを表示。桜吹雪のような湿った粉雪が薄闇の明りに舞い、建物に陰影を刻む。
特別養護老人ホームだ。人影が動く。避難せず、

そこを終の住処とする人々がひっそりと息している。
介護者たちがいる。彼らも限界的疲労を抱えながら
帰宅するのだろう、駐車場から次々と発車していく。

高橋さんの住む松川仮設に向かう。だが、秋葉の車にはナビがない。秋葉いわく、ナビはいらない。
太陽と月は東西を教えてくれるし、田舎では闇夜に
明るい固まりがあれば集落だという。ナビに頼ると
人間としての勘を失う、俺の信念なのだと譲らない。
飲み物を買おう。明るい方向を探せばいいのか。
セブンイレブンがある。車を降りて、縮こまった首を

漆黒の夜空に伸ばす。黄金色に輝く大きな月。それを不揃いに銕むように、ふたつの星。

ふいに横を振り向けばJR「松川駅」。まつかわ・まつかわ、聞いたことがある。松川事件だ。そうか、ここが、あの松川か。

*松川事件 1949年、GHQ占領下の時代。福島県松川町を通過中、東北本線上り列車が突如脱線した。一審では死刑を含む20名全員有罪。最高裁で、冤罪として全員無罪判決確定。

秋葉があそこだという。こんな田舎に、取って付けたような蛍光灯が闇夜に集中している。確かに、プレハブの平屋が何棟も規則的に並んでいる。一班から五班まであり、194名が暮らしている。

高橋さんの玄関を叩く。4畳半だろうか、風呂、トイレ、洗濯機の置かれた台所。それに面して二部屋ある。炬燵と机がある4畳半で食事し、隣の6畳が寝室。2DK。一人暮らしだと1DK。

高橋さんは、役場からの広報など几帳面に綴じて

いる。妻へ、「あの広報持ってきて」と頼む物言いは、長泥の山中で会った時とは別人のごとく穏やかだ。

高橋さんは、昭和11年生まれ。プロパンガスを営んできた。村は無人で、ガスも使う人はいないため、仮設相手に、なんとか仕事を細々続けている。「原発再稼働には絶対反対だ」という。線量計はスパーに頼んで、通販で3万円で購入した。



仮設住宅の居間

妻は、先日、一人暮らしの高齢者が亡くなった話をする。朝、弁当を届けた時は元気で、夜の弁当も受け取った。翌日の朝、弁当を届けた時、出てこなかったで様子をみたら亡くなっていたのだという。よくあることで、みんな、気分が晴れないし、先が見えない中で暮らしているからね、と。

『あごろ』の原稿を依頼すると、実は大手新聞社からも原稿を依頼されていると、その手紙を見せてくれる。帰京して、ほどなく高橋さんからお便りが届く。妻の文章も同封されている。

3月26日。午前、内閣府の事業である被災3県の「女性のための電話相談事業」の担当者から説明を受ける。まだ若いのに日本のフェミニズムの歴史に通じ、立板に水のごとく納得のいく説明。入札で事業者の選定。相談員は研修を受け、訓練されたフェミニストカウンセラーたちであることなど、わかりやすい。過去の男からの相談例。「私の妻は、どこに逃げた

のでしょうか」に対して「あなたの知らないああいう所でしよう」と言えはいいいやん。

こういう事業こそ、『あごろ』が、一貫して主張してきたことではないか。それを、国が実行したようなものではないか。

1975年、メキシコで開催された第一回「国際婦人年世界会議」。「あごろ」代表の斎藤千代が英語で発表した。

わたしの初めての海外行きは、この会議だった。そして斎藤千代の後を追いかけるように、『あごろ』に関わるようになった。ベティフリーダンとドミテイーラの迫力ある論争は、一歩も引かない女たちの実力を示した。日本でも、たくさん女性の女性グループができ「国際婦人年連絡会議」が市川房江を記念する婦選会館で毎年、開催された。嵐山に国立女性会館ができた。DV防止法も制定された。彼女の話を聞くうち、安堵のような感情が、わたしの中に沸き

あがつてくる。私たちの蒔いた種がやっと芽吹いたかのような。

午後、葛尾の仮設がある三春に向かう。ダムの傍だという。風が冷たい。談話室を訪ねる。女性6、7人がお喋りしている。Aさんは74歳。農業の傍ら牛も飼っていた。牛、八頭、離して避難してきたが、心配になって5月初め、村さ戻ったら、なんと牛が並んで歩ってた。言葉かけだらよ、みんな、寄ってきでよ、あづばって来たよ。牛は喋れねども、みな、わがつているんだ。Aさんの眼が潤んでいる。

裏のよ、山さいって、葉っぱの上さ、器械おげば、ピッピッ鳴るべ。玄関先で2・2、裏山で4だべ。ここの仮設で0・4だよ。爆発前だば、0・0なんぼだべ。役場は、山背負ってねべがら、低いし、あれは、毎日、除染してるがら、低ぐ出るんだべえ。煙草栽培の人、みんな、山背負ってる。除染するつたて、山みんな、禿にしねば。山背降りでは、葉っ

ばも降ってくるし、なんと除染だば無理だ。

他の人たちも口ぐちに言う。一度でもええがら偉い人来てみれ。仮設は狭い。家さいればよ、朝おぎれば山見で気分もええのに、ここだば、気晴れね。沢の水でいい水だった。喰うものだってみんなつぐつていだべ。野菜なんて買ったごどね。味噌だつて作ってた。店さ行つても、何がなんぼがだが、わがなねがった。焼きそば250円もして。みんなお金だ。

仮設は狭すぎて、隣の物音もする。若い人には、それがストレスだという。いったんは、息子の住む三重県津市に逃げたが、都会だとみんな同じ家が並んで、言葉も通じないし、いつまでも迷惑かけてはいけないうと、仮設にきた人もいる。息子が原発関連者だという人は、息子に「とにかく、逃げる。荷物は津波に流されたと思って諦める。」と何回も言われ、手ぶらで避難した。村の家には、まだ手もつけていない新品の衣類あるという。「んだ、んだ、東電さ勤めでいだ人はみんな知ってたべえ、逃げだ

べ。だども、下請の下請けは使い捨てだよ」。

秋葉、「いいね。女性の人はこうやって喋れるから。男はどうも」と加わる。女性たちは、「いや、今日は女性が多いけど、普段、男もきて喋っている」と返す。秋葉、女性たちから信頼される。「あんだも田んぼやってたら、わがるべ。草はえでけば、田んぼ可哀想で可哀想で。稲植えられねえども、草だば刈ってやる」とやりとりしている。牛も飼えない、目の前の田んぼも耕せない。偉い人、一度でもいいからここに来て現実を見てほしい、という言葉を何度聞いたことが。

午後3時、巡回看護師が「遅くなってごめんなあ」と玄関の戸を開けて入ってきた。一人暮らしの高齢者訪問に時間がかかり、ここに来るのが遅くなったという。血圧を測り、健康相談に乗る。柔らかな京都弁。京都から派遣され、今日初めての顔合わせだという。ビジネスホテルに泊まってる仕事だ。

「それはやね、逆流性胃炎といって、食べてすぐ寝たらだめなんです。じゃあ、この絵みて。人間の胃はこうなっているんです」。

彼女は畳の上にかがんで、一人ひとりに注意事項を書いた用紙を渡す。ある村人は血圧が高かった。「ただしは、きままに薬飲んでる」と答えたら、居合わせた住民一同一斉に「だあーめ。きままに飲んだらダメだべ。ちゃんと飲め」。

看護師からは、「お薬は医師の指示通り飲みましょう」と書かれた用紙を渡された。「京都はね。女性も男性も本心をいわないの。ずっと昔から、権力争いが多いから、どっちについてもいいように、本心隠すのよ」と、彼女は健康相談の合間に雑談も交える。

「それで、お水は大事。いいですか。体重×30ccのお水です。」看護師は京都の親の介護があるため、1か月ほどで帰るといふ。

きままに薬を飲んでいるという女性が帰ろうとすると、「看護師さんが来てるがら、ほがの人ささも声

かげで。いつつも、きままに生きでるがら。だめだ。」と声がかかる。

「きままだ。俳句と書道やつてるだけだべ。みんな、わだしの苦労知らねだげだ。ちゃんと、畑もやつてる」「やつてね」。よく喋る。



三春町に建設された仮設住宅

60代の女性が、ここは、杉の丸太棒の上に家が乗っているだけで、いつまで持つか分からないという。向こうの仮設はコンクリートで基礎を打ち、頑丈だよ。先が見えない暮らしだよ。この先、どうなるのか、不安だらけだという。

「サヨナラ」でもない、「又、来るから」でもない。どういう別れの挨拶がいいのか分からない。「逃げるのか」と言われた方が楽かもしれない。

車を走らせる。確かにコンクリートの基礎の仮設があった。外壁も内壁も杉の板張り。いい香がするが住人に聞くと、「関係ない、とにかく狭い」という。毎朝、山を拝み、広びろとした田んぼや畑に囲まれた穏やかな暮らしがいいという。ここは先の見えない、不安だらけの圧迫感があるだけなのだ。同じことを、また聞いた。もう、夕闇が迫ってきた。わたしは「あごら」へ帰る。着いた先の東京の夜は、眩しいほどの電気の明るさに満ちていた。

今私は避難所を転々として、ようやく
出来上がった仮設住宅に入っております。
飯館村から約四十キロ離れた所が
松川町金沢地区の工業団地の一角です。
私は飯館村でプロパン販売業をやてり
ました。販売先は村の南の方で、比叡
部落約四十戸、長泥部落約六十戸、藪平
部落約三十戸。それに浪江町湊島の白達
部落と手土郎部落に二十戸のお得意様
に毎月サスの配給と集金をしてあります
が、あの原発事故以来次々と避難者が出
て来りました。子供達は先に避難して来たか
親達は家畜（和牛）を飼ってありますから

さぐ避難する事も出来ず又放射能の
情報もあまり入らず来ないので部落民は平常
の生活をしていた。五月中旬頃に豊協を通
て和牛を金部販売してから五月末に避難し
ました。七月末になって松り町の方に仮設住宅が
出来たので八月初めに入居して現在に至って
あります。仮設住宅は部屋が狭くて、
きゆうくつで金部すまっています。

先日長泥は、かいこて見ました。

寂れ何んのかわりもなく白山を見れば青々
としてきれいな。前と何の変わりもないの
一百も早くかりりたい。頭かかんかんで
早く早くかりりて来ださる

突然の非常事故 安全神話を 精進みだしていた私
こんな大きな事故になるなんて 思っても ありませんでした
とはかき高い放射能で 避難所に、それからアパートに、今は
飯沼佐江に住んでいます 自らが有りながら…… 自に呆れ多いは
いつなのか。

今度 避難区域の見直しで 字^本単位で事を進める様
だが、今日 長坂行政区域の区会に行くと 長坂地区は帰還
困難区域になるのではないかと いう話も聞きましたか
これから方向を早く示してほしいと思っております

発電所からの放射能等が飛び散らなくなるように、そして
自らが平和な生活が できるように、と 願っております

S・M

高橋さんから、その後の長泥の状態と、今の気持ちが続けられたお手紙が届きました。(一部省略しています)

先日、しばらくぶりで長泥に帰ってみました。
山も川も変わりなく、きれいでした。家も変わ
りなく私を待ってくれました。



放射線量は
4・5ぐらい
に下がってい
ました。

村では放射
線量の高い長
泥地区から試
験的除染が始
まっていまし
た。原発に入
るような白い
ナイロンの作

業を着ていました。大きな機械、バックホーとか
ダンプカーやいろいろの機械が動いていました。

8月か9月頃までかかるとか……。

線量計は、ダイマートから買いました。

村役場は除染をして、そこで計った線量を発表し
ていますが、線量の高い比叡、長泥、蔵平の線量を
発表しないのです。

同じ村ですから、線量の高い所の放射線量を発表
してもらいたいと思っております。

8年前ごろですか、特に原発を危険なものとは思
っていませんでした。だが、今になって見て、こ
んなにこんなに、恐ろしい、恐ろしいものだと思っ
ていませんでした。目に見えるものなら、丸太棒で
たたき出してやれるのに、見えないものの恐ろしさ。
毎日毎日、仮設住宅にいて、いつ長泥に帰る日が
来るのかわからない。大飯原発などの再稼働には絶対、
反対です。長泥に、必ず帰ります……。

(高橋 正人)

脱原発！ 原子力発祥の地から

東海村長 村上達也

はじめに——エリートが減ぼす国家

本当に情けない国だ。否、情けない指導者どもだ。戦前の日本と、ちつとも変わっていない。福島原発事故後の政府の対応を見ていて、そう思う。根拠なき過信と自惚れで、世界最悪の原子力事故を起こしておきながら、一年経った今になっても誰も責任を取らず、何一つ改革もできていない。私ら戦後世代は戦前の日本を克服しようとしてきたのに、これは何てことだ。

政府や電力等、原子力界の要人をご覧なさい。洞ヶ峠^{ほらがとうげ}を決め込み居座って、騒ぎの収まるのを待ち、復活を企んでいる。全く呆れたエリートたちだ。日本民衆を奈落の底に突き落とし、責任をとらず、戦後のうのと生きながらえた陸軍大学校卒の軍人と、寸分も変わらない。何が藤原正彦氏という「国家の品格」か、「武士道」か。先の戦争責任も、私らはアメリカ軍に任せて、今の「がんばろう日本」のかけ声よろしく「戦後復興」に邁進し、自らの手によっての責任追求を放棄してしまった。

彼ら要人、エリートに比べ、原発事故で故郷を追われ悲運な避難生活を強いられ、将来が見えずに翻弄され続けている一五万人余の福島の人たちは、何と忍耐強くおとなしいのだろう。

ある関西の人が私に言った。「東北の人たちは、何とおとなしく、我慢強いのか。関西だったらああは、ゆかん」と。津波はともかく、原発事故はまさしく「国策」と称し推進してきた明確な国家の責任、人災である。坂上田村麻呂の蝦夷征伐のとき、男どもが皆殺しに遭った東国人の女は、鬼となって復讐を誓ったそうだが、「今こそ『東北の鬼』となって『矢報え』と、私は言いたい。

JCO臨界事故の経験は、活かされなかった

茨城県東海村は、一九九九年九月三〇日に日本初の原子力災害であるJCO臨界事故に見舞われた。私は村長一期目の、ちょうど二年経過したときだった。世界を震撼させ、日本原子力界が大きく動揺した事故だった。二名が死亡し、住民を含め六六七名の被曝者を出した。当時も、私は衆参両院の委員会はじめ各方面に招かれ、臨界事故について語る機会があった。その際、語ったのはバケツやヒシャク、マニュアル改竄の話を以てひとりJCOに責任をかぶせるのではなく、事故を生み出した社会的背景についてであった。

四つのキーワードを選び出して説明した。即ち「国策」「安全神話」「想定外」「仮想事故」の四つである。何だ。地震、津波以外は福島原発事故と同じではないかと気づかれたことでしょう。その通り、この間、十一年余の期間があったが、何も変わっては、いなかったということ。実はこの間、原子力安全・保安院ができ、原子力安全委員会が科技厅から内閣府に移ったり、原子炉等規制法の改定、原子力災害特別法が制定されたが、その後の対応をみていると、本気

になって巨大科学技術をコントロールする社会システムを構築しようとしている風にはみえなかった。結果から見るとJCO臨界事故に蓋をし、「国策」原子力推進のための目くらまし策に過ぎなかったと思える。

土台、「国策」という言葉は日常使われる言葉だろうか。平和国家を標榜する日本において、原子力政策以外で使われているか。歴史上で想起できるのは昭和一六年の「帝国国策遂行要領」である。これは米英に闘いを挑むことを決定したときのもの。その後の日本社会は言論を封殺しての非科学的な神がかり国家となつて破滅への道まっしぐらであつた。「神国日本」「神州不滅」の精神論が跋扈し、自国の能力を客観視できず即ち「想定外」とし、或いは「妄想」しても対処する能力を欠き、竹槍戦法で「一億総玉碎」を国民に強い、塗炭の苦しみを与えて敗戦となつた。何とJCO臨界事故、続いて福島原発事故を惹起した原子力の世界と酷似しているではないか。

この国は原発を保有する資格なし

原発マネーに依存しているとみられている原発立地市町村の、その首長の中で唯一人の脱原発提唱者として、私は珍しがられているが、「そうか、日本人はマネーを基準に価値判断する種族なのか」と悲しくなる。確かに、東海村には原子力関連施設が集中立地しており、それとの関係をネグレクトするのは難しい「他の立地自治体の首長さん同様」悩ましい話だ。

しかし私は他の首長さんと違い、JCO臨界事故を経験し、その後の国や原子力界、いわゆる

「原子力ムラ」の只中にどっぷり浸かっていた。渦中では先に述べた戦前の軍事警察国家のような疎ましさも感じていた。そこへ福島原発事故が勃発し、事故への対処、住民への対応、事故後の改革姿勢等々をみてきた。それは他者のことでなく、自分たちの身に引き換えてみてきた。その結論が「この国は原発を保有する資格なし。能力もなし」であった。

初期の事故対応を見て啞然とした。これまでの自惚れ、理由なき自信が災いしたのか、打つべき手なく、一号、三号、二号そして四号と、次々事故が短期間に拡大、それに対して戦力の逐次投入といっている後手後手の対応、これには呆れた。何よりも住民保護が全くなっていなかった。この点は、アメリカ、ドイツ、フランスの採った対応と比べれば明らかで、これらの国との想像力、仮想力の差が歴然としていた。事故の真只中にあっても、政・官・業・学の原子力ムラの住民はムラの中の自己保身と原子力政策を維持することに汲々としていた。学者、専門家の権威がこれほど堕ちたことは敗戦後でもなかったのではないか。御用学者、女衞^{メーデー}などと聞くのも憚れる言葉も目にし、耳にするに及んだ。

その後、次々と旧弊が暴露され、分かっていたのは「核分裂利用」という本来的に危険な科学技術を扱うにも関わらず、「過酷事故への物的・人的準備はなく、住民保護のための放射能防護基準もない」ということであった。野田首相は厚顔にも国連の場で「世界最高技術の原発を」と言ったが、日本の技術は、はつきり二流ではないか。自ら開発したのではなくアメリカからのバック輸入した技術だ。中国の新幹線事故を笑うのはやめよう。原発事故を起こしておいて言えたものではない。

このような国が、四枚のプレートが交差する世界有数の地震大国に、五四基もの原発を抱え、

狭い地域に七―一三基も集中立地させて平然としていたことは正気の沙汰ではない。更に一四基も増設しようと計画していたのだ。また東海第二と浜岡両原発は人口過密地帯、突出した地震多発地帯にあり、極めて異常。「原子炉立地審査指針」にも反している。ちなみに東海原発の三〇キロメートル圏内には一〇〇万人が住んでいる（福島第一は、一四万人）。

双葉町長は（原発から）受け取ったものは何か。交付金よりも被曝、汚染、避難等、数字に現せないほど大きなものを失ってしまった」と言っている。原発による繁栄は、先祖から受け継いだ長い歴史の中で考えれば、たった三〇年余の「一炊の夢」に過ぎない、原発から得た金と故里や未来は、等価交換できるか、と私も言ってきた。

原発推進権力は無キズで居座ったまま

野田政権と電力会社はしやにむに停止原発の再稼働に突き進んでいる。安全・保安院のストレステスト一次評価を受け、首相を含む四閣僚の「政治判断」で以て大飯原発三、四号炉の再稼働を目論んでいる。また安全・保安院は運転三〇年超の伊方二号炉の一〇年延長を認めた。更に驚いたことに、福島県が廃炉宣言している福島第二、一号炉の運転一〇年延長をも三月一九日に認可した。そしてかねて辞意を表明していた班目原子力安全委員長は、同じ三月一九日それを撤回した。信用失墜もなんのその、まるで戦犯が戦争を指揮している構図だ。

一方、各電力会社は「運転期間四〇年とする」との原子炉規正法改正の政府方針はなんのその、

四〇年、三〇年経過の老朽炉にも地震・津波対策、電源対策等に大額の金を惜しみなく投じている。それが出来るのも総括原価方式が依然生きているから、つまり投資額は電気料金の値上げで回収すればよいからである。一般の会社は、設備投資額を己の収益、つまり利益で回収しなければならぬが、電力会社は消費者に転嫁すれば済む。こんな世界がある、驚いたことだ。東電解体は勿論のこと、発送配電分離は話題にもなっていない。そして枝野経産大臣が「原発依存を限りなく減らす」という減原発依存政策は選定基準も道筋も何にも提示されていない。誰がやるか何処がやるのかも明らかになっていない。ことほど左様に原発推進勢力も推進体制も、不動、健在でいる。虎視眈々と復活を狙っている、恐ろしい世界だ。

脱原発の流れは滔々たる流れに

しかし、このことが国民の怒りに油を注ぎ、脱原発、反原発の動きは、全国各地に燎原の火の如く広まっている。この動きもそのうち鎮静化すると見ている政府や電力、電気業界は大きな過ちを犯している。福島原発事故の本質、歴史的な意味を読み間違えているということだ。

世界的影響を見ても、ドイツ、イタリア、スイスで収まる話ではない。韓国、中国、インドそして原子力依存度の高いフランス、ベルギーにまで及んでいる。原発大国フランスでも新規立地は考えられないというし、ドイツの電機大手シーメンスは原発事業から撤退を決めたと聞く。土台、原発技術は過去のもの、技術的にも産業的にも魅力がないということだろう。破滅

的事故を起こした日本こそ、過去の栄光にしがみつくとなく、止める時である。

ところが国内はどうだ、浜岡原発のある静岡県では市町村長二十一人が再稼働を否認しており、その内十一人は「廃炉にせよ」と言っている(3/13「東京新聞」)。保守王国にして大手原発メーカーの牙城である茨城県にあっても、3/23日現在、東海二号炉の再稼働中止と廃炉を求める請願を十一の市町村議会が採択し、周辺五首長が脱原発を表明している。これまでは考えられないことだ。その他の原発立地地域においても似たことが起こっている。全国世論調査会の調査では脱原発支持は八割に及んでいる(3/10、11)。

注目すべきことは、広範な民衆の憤怒と脱原発運動の盛り上がりがあることだ。同じ脱原発、原発といっても、従来の信念的、専門家的人たちのそれとは違い、今まで大衆活動に無縁だった人たちが中心となつている。原発事故の怖さ、放射能の怖さを皮膚感覚で知った人たちが、新しいメディアを通して立ち上がった。それは女性であり、特に若い女性、なかなか子どもを抱えた女性たちである。このタイプの大衆運動は、多分日本歴史の上で初めてのことで、画期的ではないか。

フクシマは日本各地に多くのジャンヌダルクを生み出した。その力が頑迷、保守的といわれた地方議会さえも動かしている。権力エリート中心の原子力界に対し、国民の最も民衆的次元で異議申し立てが起きているのだ。この力を政府や原子力界は見誤ってはいけなない。彼らの知性が問われているのだ。

おわりに

今ここに、私も、東京の人たちも、こうして無事でいられるのは、全くの偶然による僥倖なのだ。すでにご存知でしょうが、関東地方で唯一の原発、東京から一一〇キロメートルにある東海第二原発も、津波の高さが七〇センチ高かったら、また、防潮壁の完成が二日遅れたら、全電源喪失し、あわや福島の中の舞になるところであった。一〇〇万人の人の避難があったなら、東京はどうなったであろうか。

それにしても、福島第一発電所の四号炉の燃料プールにあった一五〇〇本余のメルトダウンが防げたのは、これこそ天佑であった。工事の不手際で炉心上に溜めておいた水が流れ込んだからだった。もし工事が順調に運んでいたら、四日前に炉心上の水はなかった。そして最も恐るべき裸の世界でのメルトダウンが起こり、半径二五〇キロ圏は避難を強いられ、半径一七〇キロメートル圏は数十年間、居住禁止区域になったということである。

想像するだに、身の毛のよだつこの二件とも、偶然に事なきを得たから、今、私たちはこうしていられる。ことほど左様に原発は神の摂理に反する非人間的ものと知るべきである。にもかかわらず金と権力に餓えた亡者どもは「原発の再稼働」「全原発維持」を急いでいる。この企てを断固阻止せねばならない。それこそ日本国家の品格に関わることもあるから。

そして、ある原発立地首長の発言のように「全国の原発が福島第一と同様の事故を起こすとは到底考えられない。日本の原発が全て福島第一のようになると報道するから、全国で脱原子力の発想が生まれてしまう」と思うようであれば、更にひどい原発事故が必ず起こるであろうということを言っておきたい。

自治体だからこそ変えられる！

脱原発・エネルギー転換へ

世田谷区長 保坂展人

今年の冬の寒さが厳しく、春の訪れが遅く感じました。そのせいか、桜の蕾を揺さぶる猛烈な「春の嵐」にも見舞われました。四月で、私が区長に就任してから、やがて一年になろうとしています。

昨年四月六日の出馬表明、そして二四日の当選と翌日の初登庁というドラマを生んだのは、区民であり有権者の力です。はたしてその期待に応えられたのかを自問自答しながら、今回の活動報告をつづります。

開票速報で当選を決めた直後に選挙事務所にNHKの全国中継が入り、「選挙中、脱原発を訴えた保坂さんですが、地方自治体から何が出来ますか」とアナウンサーから問われました。「福島第一原発事故で証明されたのは、住民を守るのは基礎自治体以外にないということでした。原発依存からの脱却の道を自治体から示していきます」という趣旨で答えました。

当時、私は原発事故直後の南相馬市に出向き桜井勝延市長と話していただけに、「原発に近い南相馬市には国からも東京電力からも情報は何も入ってこなかった。それでも、市民の安全についての責任をはたすのは自治体しかない」という話を聞いた直後でした。

私は、原発という危険因子に対して、たとえ距離があっても、大きな影響を受ける自治体には発言力があると考えていました。その時、念頭にあったのはまだ動いていた浜岡原発でした。「世田谷区から脱原発」と言った時に、「エネルギー政策は国の仕事だ。出来っこない」という冷やかな声にもぶつかりました。およそ、基礎自治体と原発政策とは、立地自治体でもない限り、直接の関係はないというのが、当時の「常識」だったのでしょうか。

ところが、一年経過してみても、そんなうがった声は、ほとんど消えました。正反対に「基礎自治体こそが、国のエネルギー政策を変えられる唯一のリァリティを持っている」というほどに認識は変化してきました。

区内――施設にPPSを導入

一月から二月にかけて、世田谷区役所の――施設で「脱東電でPPSに切り換え」というニュースが大きく報じられました。あらゆる新聞、テレビが取り上げ、この件では記者会見も含めて二〇件前後の取材を受けました。いくつかの海外メディアもやってきました。

さらに、三月半ばに「東京電力の大口値上げ問題」では、その一方的な宣告の手法に異議ありと発言したところ、これも大きな反響を呼んで、東京電力は値上げの手法を大幅に変更せざるをえなくなりました。

自治体発の発言や選択は、時としてきわめて大きな力を持つ時代に入った証でしょうか。

明治以来、電力会社がたちあがった当時から、電力とは「国策」であり、国家的な見地から設計する産業の土台であるという時代が続きました。一度として、使用者・消費者が電力の供給や料金設定や徴収について制度設計の側で影響力を駆使したことはないと言ってもいいと思います。徹頭徹尾、国家と産業構造の川上に位置する「供給サイド」から立った議論しかありませんでした。

家庭用の小口を除く、大口契約の電力市場は「自由化」され、その結果、PPS（特定規模電気事業者）が生まれました。世田谷区が一一一か所の施設の電力供給を最初から東京電力と決めず、こうした民間のPPSの参入を呼び込むために競争入札を実施すると発表したのが、一月下旬のことでした。

すでに、PPSは横浜市や名古屋市などで相当の規模で使われていましたし、経済産業省をはじめとした霞ヶ関でもPPSは常識でした。発表してみると予想外の反響でした。

「世田谷区、脱東電へ」というニュースとなり、新聞・テレビも大きく扱いました。区役所の電話は鳴りっぱなしで、「PPSとはどんなものなのか。契約をどうしたら出来るのか」「安定性に問題はないのかなど他自治体や企業等からの問い合わせが相次ぎました。そして、契約を希望する件数が急上昇したのです。

こうして、一か月ほどで電力需要の三％台程度のシェアのPPSは「売り手市場」に転じてしまい、わずかな供給力はたちまち限界に近づきました。東京電力より相当安かった価格も上昇しました。

二月二十八日の競争入札の実施日には、かろうじて二社が応札し、一社が落札しました。「P S入札を終えた」ことも、ふたたび大きなニュースになりました。

電力自由化を経産相に要望する

今回の一件で、東京電力ではない「PPS」から電力供給を受けることが可能だという事実
は、大きく広がり認識されました。これまでは、業務用の大口契約は、形の上でこそ「自由化」
されていましたが、PPSは存在さえ知らない人が多く、だからこそ三%台のシェアにとどま
っていて、事実上の電力会社の「地域独占」が続いていたのです。そこに風穴があいたのです。
世田谷区民からは、「区の判断に拍手を送りたい。ところで自分の自宅もそのように変えたい
が出来ないのか」の声もありました。残念ながら、現在の電気事業法で「自由化」されている
のは、五〇キロワット以上の、主に業務用の大口契約の範囲に止まっていて、一般家庭の小売
り市場は電力会社の独占が続いています。

そこで枝野幸男経済産業大臣に連絡を取り、二月十六日に申し入れをおこないました。

「電力自由化を家庭まで拡大してほしい。そして、自然エネルギーを更に拡大・普及される
ための支援システムも含んだ電力供給システムに転換してほしい」という内容でした。

枝野大臣は「前向きに受け止めたい」と意欲をもって電力供給システム改革にスピーディー
に取り組むことを表明しました。このような申し入れをするのは極めて稀です。なぜなら、川

上で占有されてきた「電力供給システム」のあり方を、使用者・消費者の視点で川下から制度要求するという性格の考え方だからです。

七〇年代の公害問題が拡大していく中、農薬にまみれた野菜の健康への悪影響が大きな社会問題となりました。「無農薬」「有機農法」の野菜を一般のスーパーよりも高い値段で消費者に届ける産直運動は、やがて協同購入を進めてきた生活協同組合と結びついて、大きく広がりました。現在もまた、東京電力の電気料金よりも高くなったとしても、自然エネルギーか自然エネルギーの割合の高い電力を使用したいという使用者・消費者がいることは歴然としている。「一般家庭用の自由化」がはたされれば、選択的購入が可能となるし、グループを組んで「電力の共同購入」をするという形もあるでしょう。

まさに、「電力供給システム」を変えるために、思い切った先行的実験やリアリティを持った制度設計が出来るのは住民自身であり、自治体の現場だと感じています。

「東京電力・大口値上げのカラクリ」

三月十二日、世田谷区役所に東京電力が訪ねてきました。区では一一一か所の施設でPPSに切り換えることを決めていましたが、二〇〇を超える施設の中で東京電力との契約を継続する一〇〇施設余りの電気料金の値上げについての話でした。

「世田谷区は四月一日から値上げしますか。あるいは契約満了日からの値上げとするかどうか」

という問い合わせが東電からありました。担当者は確かに理解しがたかったようですが、説明を聞いて「四月一日ではなく、契約日からの値上げという選択肢がある」ことを理解しました。担当者は「契約日から希望すると思うが、改めて回答したい」と答えています。

数日後、私の所に報告があり、一連の経過を聞きました。報告の中に、「東電としてはあくまでも四月一日の値上げ実施」「残余の契約期間が有効であるという考え方もあることから契約満了の日まで値上げを順延することも出来る」「この提案は『東電による値上げ交渉が難航している消費者に対して提示している案であり、原則は四月一日の値上げ実施だ』とあったことが目に止まったのです。年間千五百万円の差が出るのです。

今回の企業や自治体を対象とした値上げは十七%と大幅であり、リーマンショックや東日本大震災と円高不況をくぐり抜けてきた企業にとつても甚大な打撃を与えます。「個別協議」という名のもとに、これだけ重要な告知事項が社会的に明らかにされていないのはフェアではないと感じました。

そこで、十六日に行なわれた二三区の区長でつくる特別区区長会で「東電値上げ反対」の意見書をまとめる場で「四月一日に一斉に値上げではなく、契約期間を優先させよと言えば、世田谷区の場合は千五百万円も負担軽減になります」と、一連の経過をすべてお話ししました。ただちに、区役所に戻ると東京電力を呼んで事情を聞くことにしました。

私は今回の「値上げ」に関して基本的なことを確認していききました。二月に東京電力から区役所に文書が届いていたのを出して、「これは、問答無用の一方的な値上げ通知ではないか」

と問うと「そうではなく、あくまでも契約期間の途中だけれど新料金への御理解を頂きたいというお願いです。不承諾の場合はコールセンターに連絡を頂くことになっています」ということでした。たしかに、よく見るとそう書いてある。

「今の話を聞くと、四月一日値上げに協力するか、あくまでも契約期間守るように意思表示するのかを訊ねるという趣旨のようだが、区役所で文書を見てそう理解したか」と担当者を見渡すと皆、「値上げ通知としか思わなかった」と言う。値上げはいつも一方的に行なわれてきたので、これも通告書なのだろうと「錯覚」していたということか。

「当方は二月に届いた文書の意味内容をつかむことができず、一方的通告と取り違えていた。返事がない場合はどうするつもりでいたか」

「了承いただいたものと受け止めます」

「不親切ではないか」

「いろいろ行き届かない点もあり、全契約者に対して改めて連絡をして意志確認をするようにしています」

「月末まで間にあうのか」

「何とか努力します」

「世田谷区としては四月一日からの一斉ではなく、あくまでも契約期間通りにやってほしい」と通告した後、東京電力に対して「民間事業者を含めて徹底した情報提供をしてほしい。今日確認したことを素早くホームページに掲載してほしい」と申し入れました。

その後、ブログ「保坂展人のどこどこ日記」に詳細に経過と問題点を書き込んでいきました。これを見て、東京新聞が二〇日に一面と特報面で報道。マスコミも一斉に動き出して、二一日には枝野経産大臣が東京電力を呼んで独善的な手法を批判し、東京電力もその日のうちに謝罪して、先日私が求めた値上げと契約日の関係についてホームページに掲載しました。

こうしたやりとりを通して、使用者・消費者に一番近い自治体が動くことで問題提起し、改善を求め、実現するという過程が改めて見えてきました。

原発事故後、区長に就任してから、昨年五月に空間の放射線量の測定に乗り出し、またプールや学校や保育園の砂場の測定に取り組みました。また、学校や保育園の給食の「産地表示」を始めて、この春から輪番制で放射性物質の測定に入りました。

区内で周辺に比べて以上に高い放射線量が記録された現場を確認した十月には、事実を記者会見で伝えて「原因物質はラジウム」という事実が判明した段階ですぐに発表しました。食品の暫定基準値を子どもの健康に配慮して厳格に引き下げよという要請も、細川・小宮山両厚生労働大臣に対してしました。時間はかかりましたが、要望は実現していきました。

こうした現場にいて、まず住民にとって切実な問題に取り組むのは基礎自治体しかないという認識を強くしています。さらに自治体の現場に問われるのは「具体性」です。目の前に住民がいるのに抽象的に論じていても始まりません。

また、自治体の首長として情報発信をすることも大事ですが、区議会ですっかり論議して、多くの議員の皆さんと問題意識を共有することも大事です。

(元気印通信八八号より)

東北大震災と東海地震―福島原発と浜岡原発―

静岡放射能汚染測定室代表 馬場利子

二〇一一年三月一日、東日本大地震による津波の映像を観た私は、反射的に「福島原発は大丈夫だろうか?」と、微かな戦慄を感じました。その夜、福島市在住の知人に電話をしましたが、自宅の電話は繋がらず、不在なのか、震災のために不通になっているのか、分からないまま、翌日、福島原発1号炉の爆発を目にすることがになりました。

おぼろげだった原発震災への不安が現実になってしまった衝撃で放心状態のなか、「なぜ、東海地震ではなかったのだろうか?」「どうして、浜岡ではなく、福島で起こったのだろうか?」というつぶやきが、繰り返し心に湧き上がり、日本中が放射能に覆われていくことが、いやでも理解できました。

知らなかった「原発の実態」

なぜなら、私は、二〇〇二年四月二五日に提訴した「東海地震の起こる前に、浜岡原発の運転停止を求める仮処分裁判」の事務局長として、「マグニチュード8以上の東海地震が起きた

時に起こる原発事故」について、あらゆる可能性を書面に作成し、裁判所に提出していましたが、福島原発で起こっている過酷事故のシナリオを克明に描いていたからです。

1号炉が爆発した日、春休みで静岡に帰ってきていた大学生の息子たちは、自ら決めて常備していたヨウ素剤を飲み始め、私たち家族は、全員、十三日から息子たちの下宿先の北陸に避難して過ごしました。胸が焼けつくような無念で、私の思考は止まってしまい、ただ、息子たちに詫げる言葉しかない私に、長男は、こう言い放ちました。

「利子さん、どうしてもそんなに考えが甘いのか？　こうなったのも、原発を止められなかった貴方たちにも責任はあるんだよ。泣いている場合じゃないでしょ？　今ならみんな、貴女の話をお聴くでしょ？　これから起こる事を知っているなら、大きな声で言わなきゃダメだよ。今、浜岡を止めなかったらいつ止められるの？　今直ぐ、浜岡を止めてよー」

このおどけた真実の言葉に、家族は失笑し、日本を笑い飛ばす議論となつて、私は動き始めることができました。ひとり静岡に戻り、一か月、浜岡原発を止めるために、考えつく限り、無我夢中で、やれることをしました。総理大臣、静岡県知事、中部電力社長への要望書を書き、賛同者を募ると、一週間で五万人以上の人がネットで署名を寄せて下さり、その署名は、日本だけでなく、十四か国から、膨大なメールと、意見、取材の申し込みがありました。『世界一危険な原発』——そう言われてきた浜岡原発です。

現実に原発震災が起こったのは福島でしたが、福島原発事故は、決して〈想定外〉などではありません。

耐震性という面で、「地震が来れば配電網は崩れて電源は喪失し、原子炉の冷却は不能となり、核暴走が起ること」も、「原子炉建屋は崩れて放射能がまき散らされること」も、これまでの原発裁判で、住民たちが指摘してきたことばかりです。

その論点を、国も、電力会社も、「どんな地震にも耐えられる設計である。電源喪失は多重防御設計をしてあるから起こりえない。国の基準に則って建てられているから、地震が来ても事故で絶対に壊れない」と反論してきたのです。

「どんな地震にも耐えられる」と言い続けた国に、「想定外」など無いはずです！

想定した事以外が起こったら、今度は、「そもそも人間が設計する物に〈絶対〉などという事はない」と言い出す開き直りは、安全審査など出来るはずがない事を露呈しました。次つぎに発覚する事故処理のデータ隠しや国の虚偽発表、福島原発が深刻な放射能汚染を引き起こし続ける状況の中で、浜岡原発は、菅総理(当時)によって運転停止命令が出され、止まりました。振り返ると、その間に放射能の雲は静岡を覆い、「新茶を汚していくこと」も、「子どもたちが吸う空気が汚れ、『外出を控えた方が良い』と仲間に伝えること」も、思いつかないほど、私は平常心を失っていました。チェルノブイリ原発事故(一九八六年)後、原発の危険性を知った私は、国内の原発事故に備えて、ガイガーカウンターも個人で所有していましたし、パソコンを開けば、気象情報で風の流れも知ることができたはずですが、その時の私には、逃られない放射能の雲一つを指して、「危険ですー逃げてくださいー」と言えるだけの確実なデータを集める気力は、ありませんでした。ただ、危険を知らせるのではなく、若い人びとの怖

れや、不安を、少しでも軽くできる情報を発信できないかと、必死で希望を探して行きついたのが、放射能汚染測定を再開することでした。「測定をすること」で、「すべての食べ物が、強く汚染しているのではない」と、わかってもらえると考えたのです。

一九八八年、我が子がまだ幼児だった時に開設した市民測定室の測定器は、休ませたままでしたが、手元にありました。当時、なぜ私が市民測定室を始めたのかと言えば、「遠い国で起こった原発事故によって食べ物が汚染され、放射能は確実に世界を巡り、海や空気、生態系に大きな汚染を広げ、結局は人に戻ってくることを、はつきりと知った私は、「幼いわが子たちを放射能から守りたい」と思ったためでした。その当時も、国が決めた基準値は、数値を他国に合わせただけで、国独自で医学的な検証をすることもしていませんでした。放射能による健康被害について、市民一人ひとりが独自に判断するしかないのは、今も、かつての日本も、同じです。

「国の基準値以下だから安全」などという根拠はどこにもなく、現実の汚染値を知って、そこからどう暮らすか判断するために、一次データを共有する活動をしてきたのですが、チエルノブイリ原発事故当時は、汚染食品は外国産ものに限られていました。「汚染した物を買わず、国内の農産物を買うことで、放射能の害を少なくすること」は、「安全な農産物を求め、自給率を高めたい」と願う私たちの願いに、何の矛盾も無い活動でした。

しかし、今回は、国内の原発事故です。福島原発事故に対して、食べ物の放射能を測定すれ

ば、当然、汚染した地域の農産物の放射能を検出することになります。有機農業を長く続けている生産者が、福島や茨城、千葉でも多く営農をしていますから、そうした農産物を買わない選択をせざるを得ないのではないかという不安は、国内産の農業、林業、漁業に対して、どう向き合っているのか、迷わなかったわけではありません。

しかし、起こってしまった放射能汚染に対して、子どもたちの健康を守り、明日からの暮らしや社会を考えるためには、現実を知ることからしか何も始められません。「どんな状況になっても事実を知り、考えるためには市民自らデータを持つこと」は、安全を一部の人にゆだねてしまわないために、必要なことだと考えました。こうして、測定の再開を多くの人に呼びかけ、崩れた測定器の補修をし、二〇一一年六月十一日、測定を再開しました。

私たちの測定室では、測定したすべてのデータを公開することを活動の目的にしています。会員の中には、生産者や協同組合、加工業者、販売店なども参加していますので、多種多様な測定依頼品があります。特に静岡県特産の緑茶は、県や国が基準値以上の汚染茶を見つけ、出荷停止にしたこともあり、現在までで最も多く測定しました。緑茶57検体を測定し、そのすべてにセシウム134と137を検出しています。しかし、茶葉は重量も軽く、実際に飲用にする場合は、ひとり3〜5gの茶葉でお茶を入れますから、私たちは、汚染が出た茶葉を飲用として比較するため、茶葉と飲用茶の両方を測定しています。現在まで、(基準値以上の汚染があった茶葉)も、飲用にすると、すべてのお茶が不検出(検出限界1Bq/kg以下)となっています。

こんな例もあります。

駿河湾特産の生シラスの測定依頼を受け、生では微量の汚染が出ることが予測できたので、同じ船で同時にあがったシラスと、それを釜揚げにしたシラスを寄付してもらい、比較測定を実施。生シラスのセシウム134は3 Bq/kg、セシウム137は4 Bq/kg、合計7 Bq/kgでしたが、釜揚げシラスにすると検出限界1 Bqでセシウム134、137、ともに不検出でした。茹でることで汚染は軽減できるということを測定で確認できた事例です。

また、主食である米も、全国各地から寄せられ、測定をしています。

私たちが測定した米に限って言えば、静岡県以西の地域で収穫された米に、汚染は見られていません。福島県内の米の場合、玄米で測定してセシウムを検出した場合、その米を精米して白米で測定すると、検出限界以下（不検出）となる程度の汚染米から、白米にしてもセシウムを検出するレベルの米まで、地域によって、大きな違いが観察されています。

母乳や乳児用粉ミルクなど、育児に欠かせないものだけでなく、私たちは、現実をなるべく正確に知るための検出限界を、1 Bq/kg（1kg当たりの重量が軽いものは検出限界が上がりますが）となるように、1検体当たり8時間以上かけて、測定をしています。そして、測定品ごとに、報告書には、検出限界値を表記しています。それは、『不検出』という表示は、『セシウムが存在していないことと誤認されること』を防ぐためです。

測定したデータは、会員通信で共有するほか、HPでも公開しています。

<http://sokuteisitu.plumheld9905.jp/>

私たちの活動は、スタッフ全員が無償ボランティアで運営していますので、どんなに多くの測定をしても、スタッフ個人の収入が増えることはありませんが、力を出し合うスタッフ自身が、まだまだわからない「放射能の振舞い」を推測したり、観察することに意義を見出して測定作業に参加しています。

スタッフ全員、チェルノブイリ原発事故当時、若い母親であった世代の女性です。

娘や息子の世代が子育てに入る時期に、福島原発の事故に遭遇した私たちは、「放射能の汚染を見つけ出すために測定をする」のではなく、「少しでも安心して暮らせる情報を提供していきけるよう」焦らず、諦めず、活動を続けていくつもりです。

測定再開一年になる六月からは、新しい測定器を一台購入し、子どもたちが育つ環境の土を測定し、地域ごとに『子育て安心マップ』を制作する計画です。子どもたちが遊ぶ幼稚園、保育園、公園、山や川の土壌を測定し、地図に表記します。

関心のある方はお問い合わせください。全国、どこの街でもマップ作りは可能です。チェルノブイリでは、国が行なっている地域の放射能測定地図づくりを、日本では、国や市がやらないならば、「市民がやれば良い」と、私たちは考えています。

放射能と付き合いだして二三年。子どもたちに背中を押されて、私たちは未来へのアプローチの仕方を、試行錯誤しながら歩いています。浜岡原発と福島原発、そして、日本中の原発が、永久に眠りにつくその日が、一日も早いことを祈りながら……。

（静岡在住）

生まれること、そして死ぬこと

宮本久美子

孫の誕生

この一年の我が家の一大ニュースと言えば、やはり娘夫婦に女の子が生まれたことです。

娘にとっては初めての出産で、それは大変でした。でもいろいろな出産体験を聞くと、それぞれ母親にとっては命がけの大変な経験ですので、「ああそうか、みんな大変だったんだ」と思うのですが、私たち夫婦にとっては初孫であっただけに、どうしたものかと、右往左往する状態でした。

埼玉県に住んでいる娘ですが、一昨年十二月から、里帰り出産のために我が家に帰省し、昨年二月末、弘前市内の病院で女の子を無事出産しました。陣痛が始まったという一報で、埼玉から娘の夫が、朝一番の新幹線で駆けつけ、壮絶な陣痛の苦痛、そして出産までの苦しみにも冷静に付き合い、娘の腰を摩り続けて励まし、支えてくれました。

さて、出産後は、私たち夫婦も二四時間育児態勢に入りました。夫はこだわりの布オムツ派ですので、毎日、赤ちゃんの世話、沐浴、授乳、オムツの洗濯……、と必死の応援を続けました。

3・11東日本大震災

生後二〇日目、「もうすぐ一か月だね」という時、3・11大震災が発生しました。

弘前は、震度4くらいで、揺れ自体は、そう激しくはなかったのですが、地震直後から停電となり、暖房もなく明かりもない生活が一日半くらい続き、たいへん厳しい生活を体験しました。赤ちゃんに風邪を引かせてはなりませんので、唯一のエネルギーであるガスコンロでお湯を沸かし、ペットボトルに詰めました。そのペットボトルをタオルでくるんだものを、何本も、コタツの中に入れ、家族みんな（大人三人と赤ちゃん）が半身を潜らせて暖をとりました。

夜の照明はローソクと懐中電灯で、夜中のオムツ換えは、懐中電灯で照らしながらでした。幸い家族みな、風邪を引くこともなく過ごすことができました。弘前では地震の被害はほとんどなく停電もまもなく回復し、困ったことと言えば、震災で新幹線がストップし、娘の夫が弘前に来るルートが絶たれ、飛行機を使わなければならなかったことくらいでした。

その後ニュースにより、私たちは、3・11大震災による甚大な被害の状況を知り、愕然としました。ニュース映像を見て、家、学校、地域、町を、そして何より家族を失った人びとが、いかに多くいるかということを知り、ただ、ただ、言葉を失う状態でした。そして同時に、東京電力福島原発の恐ろしい放射能流出の実情と、周辺に住んでいる人びとの悲惨な状況をも知りました。

それにつけても、知り得たデータをすべて明らかにしないで、かえって住民を不安や絶望に

陥れている政府や東電の姿勢、体質には、怒りを感じました。

被災地へのボランティア

「私にも何かできるなら……」という思いで私や夫、そして弘前の友人たちが、六月、七月、八月、仙台市の被災地を四度訪れ、炊き出しなどのボランティアをしました。（詳しくは「あごろ」330号をご覧ください）

夫の母親の死

糖尿病を永く思う母でしたが、明るくて、いつも父（八八歳）と仲良く暮らしていました。

七月頃、癌が見つかりましたが、高齢（八五歳）と、永きに亘っての糖尿病のため、もはや治療ができない状態であると、医者に言われました。私たちは、どちらかが、ほぼ毎週末、実家のある埼玉県に通い、母を見舞う生活を繰り返しました。看病の甲斐なく、ついに九月末、母は亡くなりました。

いつも離れて住む私たち夫婦と、孫たちのことを心配してくれる、やさしく明るい母でした。苦しみながら、少しずつ死に近づく母を見ていく中で、私たちも自然と冷静に、母の死を受け容れることができました。埼玉の田舎の酒屋に嫁ぎ、家業の手伝いと、同居する親族の世話、

三人の子育てに迫られて、このように年老いて死期を迎えるのだ、みんなに平等に死は訪れるんだと、人の一生の流れを納得させられたように感じました。

この一年を振り返って

この一年は家族の誕生と死を通して、家族のつながり、支えあい励ましあう存在としての家族を、しみじみと感じる一年間だったと思います。

昨年六月、大津波の被害を受けて風景が一変してしまった仙台市荒浜地区を訪れた時、その惨状に言葉を失いました。それから一年が経ち、復興はまだ遠く、瓦礫の処理すら進まない現状です。

一番大切な家族を失った傷は、決して癒えないでしょうが、せめて生活し続け、維持していくための仕事の場、勉強の場、医療の場を保障してもらいたいと強く思うこの頃です。

二月二十六日、日本キリスト教団弘前教会で講演

日本キリスト教団弘前教会で、「東日本大震災の被災地でのボランティアの体験を話してくれないか」というお話がありました。どんな場でも、大震災ボランティアの話や、放射能被害の話ができるのはありがたいことです。

次つぎと被災地の写真を映写してもらいながら、その写真に合わせて、私が、被災地の様子、ボランティアの経験などを話していきました。集会に参加してくださった皆さんは大変熱心に集中して、写真を見、話を聞いてくれました。特に、未だに三四万人の人たちが大震災や原発事故のために、家族を失い、ふるさとを追われ、家族がばらばらになった状態の改善はなく、未来の見えない不安や状態のまま暮らしているということを強く伝えました。

その後、参加者からは、ボランティアを始めるきっかけについての質問や、福島産の農作物の安全性についてなどの質問がありました。一時間くらいの短い集会でしたが、参加者のとても真面目で熱心な様子にびっくりしました。

3月11日、「さよなら原発・核燃3・11県民集会」青森文化会館で

東日本大震災と、東京電力福島原発の事故から一年を迎えた三月十一日、青森市でも、原発と核燃に反対する集会が開かれました。

弘前から車をとばし、午後一時過ぎに青森文化会館に到着しました。会館周辺は、参加者が、徒歩で、バスで、次つぎと駆けつけ、ごった返していました。

文化会館の一番大きいホールが会場です。しだいに参加者がホールに入り、ほぼ満席の状態でした。参加者は、最終的に一七三〇人にも達しました。

さあ、いよいよ開催です。ステージの上には大型スクリーンが設置されていて、福島市で

同時に開催されている反原発集会の様子が映し出されました。中継の都合でビデオメッセージでしたが、加藤登紀子さんの歌を聞くことができました。

パネルトークでは、ルポライターの鎌田 慧さんが、「原子力施設を、数千年先の子孫にまで押し付けることは断じて許されないー今日を出発点にして、命懸けで頑張ろうー」と力強く訴えました。また、俳優の山本太郎さんが、「全国各地の集会から参加を呼びかけるなか、なぜ今日、青森を訪れたかというと、核のごみを押しつけられている青森が、今、一番危険だから……、核燃は、日本中が青森に押しつけた問題。みんなで解決していくしかない」と、参加者に強くアピールしました。さらに、県内外の反原発・核燃の人たちの発言が続きました。大震災が発生した午後二時四六分には全員で黙祷を行いました。午後三時からは、会館から新町通り、県庁までデモ行進し、反原発・核燃の思いを青森市民にアピールしました。福島原発事故から一年が経ちましたが、未だに多くの人びとが不自由な避難生活を強いられ、生活の安定は得られず、家族がばらばらになり、将来の不安にさいなまれています。一日も早く、本当の復興が成し遂げられ、二度とこのような悲劇を繰り返さないために、私たちは、もっと大きく、原発・核燃を止めるために歩み出さなければなりません。

またも失敗、高レベルガラス固化体製造

使用済み核燃料を再処理すると、危険な高レベル廃液が出ます。放射線量が極めて高く、

人が近づくことはできません。液体では保管も管理も難しいので、溶融炉でガラスと高レベル廃液を溶かし混ぜ、ステンレス容器に流し込み固めます。これが、ガラス固化体です。廃液同様、放射線量は高く、危険です。

フランスやイギリスから返還される高レベル廃棄物も、ガラス固化体です。この返還高レベル廃棄物は、「一時貯蔵」です。「一時貯蔵」でも、三〇年から五〇年の間、六ヶ所再処理工場内の貯蔵施設に置かれます。青森県は最終処分地ではありません。九五年にフランスから六ヶ所に搬入されてから十七年です。遅くても、三三年後には県外に搬出されることになります。六ヶ所で再処理されて出る高レベル廃棄物も同様です。

青森県以外の地中深い安定した岩盤に、何万年も埋めて永久処分するのです。

「何万年間も、安定している場所がある」と、政府や日本原燃は考えているのです。巨大なプレートが動き、3・11の大地震が起き、「南海トラフ地震」が想定される日本列島に、安定した、安全な永久処分地などありません。

六ヶ所再処理工場の試運転は、〇七年十一月に、最終段階のガラス固化体作りに入りました。しかし、高レベル放射性廃液に含まれる白金族（レアメタル）が、溶融炉の底にたまり、ノズルからステンレス容器にガラス溶液が流れなくなるトラブルを起こしました。このため、〇八年十二月以来、中断していました。

日本原燃は、六ヶ所再処理工場の試運転を一月に再開し、四月にはMOX燃料工場の工事を

再開しました。福島原発事故の政府調査・検証委員会の報告も、「原子力委員会の原子力大綱の改定作業が終了しない段階で、既成事実を作ろう」との原燃の思惑が見えます。

ガラス固化試験は、事前確認試験と安全運転・性能確認の二段階に分かれ、最大一四〇本程度のガラス固化体を製造する計画です。

一月十日に、原燃は溶融炉の熱上げをし、事前確認試験を始めました。ガラス固化用の溶融炉は、A系炉とB系炉の二つあります。これまで試運転に使用し、トラブルが続いたのはA系炉でした。今回はB系炉から始めました。

一月二四日夜、模擬廃液にガラスを混ぜたビーズを溶融炉に投入。ここまでは原燃の計画通りでした。二五日に日付が変わるころ、一本目の途中から、溶けたガラスの流下速度が低下し始めたのです。二本目を作る際には、上から、直棒を、流下ノズルに向かって出し入れをして、速度回復作業を行いました。だが、三本目には直棒がノズルを突き抜けることができなくなり、作業は停止しました。

放射能を一切含まない模擬ガラスで詰まってしまったのです。原燃は、二六日～二八日にも回復作業を行ないましたが失敗しました。

後日原燃は、流下速度の低下は溶融炉の内壁の耐火レンガが剥がれ落ちたことが原因と発表しました。耐火レンガのはがれるトラブルは、A系炉でも起きていて、原燃は解決できていません。

原燃は、「〇八年十二月から三年間にトラブル解決方法は見つかった」として今回の最終試験を始めましたが、入り口でストップしてしまいました。つまり、原燃の六ヶ所再処理工場には、高レベル廃棄物を作る技術がないということです。それでも原燃は、五月下旬以降に試験再開を準備しています。危険な再処理は止めるべきです。

下北半島の各施設の再稼働

福島原発事故の原因究明もされないまま、下北半島の核施設の再稼働や、工事再開が行われています。

三月十六日、RFS（リサイクル燃料貯蔵）が、使用済み核燃料中間貯蔵施設の工事を再開しました。

RFSは、東京電力100%出資の子会社であり、現地駐在員は東電社員で、東電そのものです。再開したのは1棟目の貯蔵建屋で、最大貯蔵3千トンです。最終的には、もう1棟建設します。建屋2棟で計5千トン貯蔵し、最長五〇年間、保管する計画です。

むつ市が、工事再開を東電や国に要求し続けてきました。むつ市役所の建物は、撤退したダイエーのショッピングセンターを東電の寄付金で購入したものです。東電の意向で、むつ市は、「匿名の方からの寄付」と出所を明らかにしていません。誰でもわかることですが。

六ヶ所村は核燃を、東通村は東北電力東通原発の再稼働と東京電力東通原発の工事再開を、大間町は大間原発の工事再開を要求しました。

立地市町村は、福島原発事故の被害の深刻さを考えることなく、交付金や、電力会社からの寄付金、工事関係で地元に着ちる目先の金だけを望んでいるのです。

立地自治体は「原発がないと町がやっていけない」と必ず言います。青森県が三月二七日に発表した〇九年度の市町村民所得を見ると、六ヶ所村がダントツの一、四一七万円です。二位が東通村で二六六万円、三位は八戸市で二五五万円です。下北半島の反対側にある津軽半島の町村は、一番多いところで一七七万円、最少は一四四万円で、県内最少でもあります。でも、津軽半島から原発誘致の声はありません。

全国では、原発のない町や村のほうが、圧倒的に多いのです。東北地方では、多くの市町村が津波で被災しました。原発があるのは、宮城県の女川町と、福島県の双葉町、大熊町、楢葉町、富岡町だけです。

しかし、飯館村のように交付金をもらっていない村が、放射能汚染で、全住民避難の大きな被害を受けています。東北、関東の広域が、放射能で汚染されました。

福島原発事故後の原発積極誘致や再稼働要求は、「電力と同じ加害者側に立つ」ということです。受け入れた市町村長や議員たちは、死んでも責任を負うべきです。核燃を推進した北村青森県知事も、古川六ヶ所村長も、亡くなりましたが、核燃の危険は増すばかりです。

チェルノブイリや福島原発の事故では、数百キロも離れたところまで放射能で汚染されまし

た。下北半島に集中立地する核施設での事故でも、同じことが起きます。逃げられないのは、下北の人たちだけではないのです。

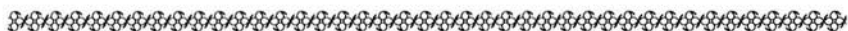
4・9反核燃の日、集会

四月七日、青森市で「4・9反核燃の日集会」が開かれました。一九八五年の四月九日、青森県議会全員協議会で、核燃料サイクルを受け入れました。六ヶ所村に低レベル核廃棄物最終処分場、ウラン濃縮工場、再処理工場、高レベル中間貯蔵施設が集中立地することになったのです。今では、MOX燃料工場までが着工されました。

私たちは、翌年から核燃白紙撤回を掲げて「4・9反核燃の日」集会を開いてきました。二七回目の集会です。午前は、全国市民集会が青森駅近くの市民ホールで開かれました。



「4・9反核燃の日集会」市民に原発ストップ！を訴えました



五月には泊原発3号機が止まり、全国五四基すべての原発が止まります。原発がなくても停電が起きないことが明らかになります。

「さようなら原発一〇〇〇万人署名」を成功させ、環境に優しい再生可能エネルギーへの転換を求めて全力で闘うことを確認しました。

午後からは、青森県庁隣の青い森公園で、労働組合の人たちと合流しました。全国各地の労働者約一〇〇人が集まりました。福島の人たちは未だ、不安と苦しみの中で暮らしている。この現実を直視しよう。日本に原発はもういらない!」とのアピールがありました。その後、市内デモで、市民に原発ストップ!を訴えました。

翌八日は、寒さの厳しい六ヶ所村に三〇〇名が集まりました。ピシリと閉ざされた正門



六ヶ所村再処理工場前での抗議集会

前から再処理工場に向けて、「試運転再開を止めるー」「再処理工場を止めるまで闘うぞー」と、シブプレヒコールをあげ、二日間の反核燃の日集会を終えました。

東日本大震災と福島原発事故は、とてつもない被害を残しました。人災である福島原発事故は、許すことができません。

燃料サイクル計画は、高速増殖炉「もんじゅ」の失敗とトラブル続きの六ヶ所村再処理工場で、完全に破綻しています。六ヶ所村の核燃施設を止めましょう。再処理を止めれば日本の原子力政策は、根底からひっくり返ります。

今こそ、一人ひとりの声を大きくし、人間らしいくらしと両立できない原発に「STOP!」と、はっきり主張しましょう！

(青森県弘前市在住)

*「エネルギーシュおばさん通信」を1987年から発行。2012年3月に163号を発行。
不定期 年5〜6回。年間購読料2000円。

郵便振替 02560・0・2243 加入者名 「おばさん通信」編集会
購読ご希望の方はご連絡ください。

ふくしま集団疎開裁判

ふくしまの子どもを21世紀のクリーンなアウシユビッツから守れ！

こんにちは、疎開裁判の弁護団の柳原です。

2012年3月11日を迎えた、個人の感想とお願いです。

先ごろ、昨年5月15日放送のETV特集「ネットワークでつくる放射能汚染地図」福島原発事故から2か月」を初めて観ました。

当時、この番組が大きな話題になったとき、余りに生々しすぎて観ることができませんでした。しかし、それから10か月、この番組に登場した浪江町から赤宇木の集会所に避難していた約10人の人たちのうち既に3人が亡くなり、1人は喉と顔がパンパンに腫れ酸素吸入しているという話を聞き、番組を観ました。

番組スタッフが原発から20キロ圏内を走行中、手にした測定器の針が300マイクロシーベルト／時を超え、観ていて気も狂わんばかりの放射能の値を示していたとき、それよりもっと気が狂いそうに思えたことは、この恐るべき異常事態にもかかわらず、目の前に広がるのは事

故前と何ら変らないように思える日常の光景だったことです。美しい福島的光景——私たちは今までのように自分の五感に頼る限り、命を落とすしかない前代未聞の事態にはおり込まれたのです。亡くなった3人の人たちもその犠牲者でした。

3・11以後、ここは一変しました。しかし、3・11以前と何も変わっていないのです、自分の五感に頼る限り。ここはクリーンなアウシュビッツなのです。

生き延びるためには、自分の五感に頼るだけの生き方と決別するしかなかったのです。そして、子どもたちに生き延びてもらうために、五感に頼るだけの生き方と決別し、実行する必要があるのです。それが集団疎開です。

いま、疎開裁判は二審の仙台高等裁判所に係属中です。

一審では、「チエルノブイリ事故による健康被害との具体的な対比」から、ふくしまの未来を予測し、警告しました。とりわけ来日したベラルーシのバンダシェフスキー教授の研究成果に基づき、チエルノブイリで子どもたちに大量に発生した甲状腺線のがん、心臓病がふくしまでも発生することを予測し、警告しました。しかし、私たちの予想を越え、半年を経ずして、その予測・警告がふくしまで現実のものになりました。

既に、高校生が3名、心筋梗塞で亡くなったと聞きました。

甲状腺線検査の結果、南相馬市など4市町村の子どもたちの約30%にしこりや嚢胞が見つかり、

札幌に自主避難した郡山市の子どもにも甲状腺検査でしこりが見つかりました。もはや「チェルノブイリからの警告」ではなく、「ふくしま自身からの警告」が始まっています。

それが二審の裁判の中心問題です。

しかし、この間、疎開裁判で、子どもたちがいかに危険な環境で教育を受け続けているかを外部被ばくと内部被ばくの両面から徹底的に明らかにしてきたにも関わらず、政府と自治体はこの事実を目を背け続けてきました。

なぜ、ここまでシラを切れるのか、それは常人から見ても理解不可能な、疎開裁判の最大の謎でした。

もし福島原発事故が火山噴火のような自然災害だったら、あるいは東京大空襲のような戦争被害だったら、とくに集団疎開は実現していた筈です。なぜ、最も深刻な福島の集団疎開だけが今なお実現しないのか。

それは、集団疎開の義務を負う政府が福島原発事故という人災を引き起こした加害者自身だからです。

政府が3・11以来福島原発事故に対し取ってきた政策は、三大政策「情報を隠すこと」「事故を小さく見せること」「様々な基準値を上げること」です。つまり加害者として徹底した責任追及されるのを予防することに全精力が注がれたのです。

そんな連中が、自分たちへの責任追及の突破口になるかもしれないと恐れる集団疎開の問題を真摯に取り組むことは不可能です。

このままいったら、ふくしまの子どもたちは、復興という名のもとにふくしまに閉じ込められ、加害者たちの手によって21世紀のクリーンな猛毒の犠牲者にされます。

では、子どもたちを救う裁判をあきらめる？ とんでもありません。

チヨムスキーが指摘した通り、もともと、子どもたちを救うのは、主権者である我われ市民に課せられた根本的な責務だからです。

では、どうやって？ 世界史の経験に照らせば、それは民主主義と人権宣言の原点に帰るしかありません。今回、その具体化が世界市民法廷です。

世界市民法廷は、世界中の市民一人ひとりが陪審員となって、子どもたちの避難について裁きを下す場です。

世界市民法廷に寄せられた市民の裁きが多ければ多いほど、それが世の中を動かし、子どもたちを救います。

どうか、世界中の市民が、いま、原発事故の加害者たちの手によって21世紀のクリーンな猛毒の犠牲者にされようとしているふくしまの子どもたちを救うという市民の根本的な責務を果すため、「私たち自身の手で裁きを下す」という世界市民法廷のアクションに参加下さるよう、お願いします。

『歩み直しの道普請』

服部 素

東日本大震災から、一年が過ぎました。

東北から遠い京都にありながら、魂の痛みがつづきます。最愛の人、大切な人を、失わざるを得なかった人びとの痛苦……、記憶のよすがである一枚の写真すら奪い去った《津波》の映像が、「悲愴」のリフレインのように流れます。

これは、何の問いかけなのか？「現代文明」は、大きい歩み直しを迫られている。それは確かだと思えます。ただそれが、ソドムのような都市を見舞ったのなら、納得もいくでしょうが、よりによって東北のような、積悪から最も遠いと思われる地を襲ったのは何故か？ 自然界にそんな思惑は、ある筈がない。この災禍をわが事と思い、「この方たちが身代わりを引き受けて下さった」という思いで、常に隣り合うわが歩みを省みつつ、過ごしたいと思えます。

「万物の霊長」と自分たちを位置づけて「現代」社会は歩みを重ねていますが、このあたりで、近現代史のスケールを大きく遡って、人類の歩み出した頃からの辿りかえしをしてみたい……そんな思いから、「旧約聖書」を手にとりました。津波から、義人ノアの洪水物語を連想し、創世記を読みはじめたのですが、洪水後の、ノアの物語——セム、ハム、ヤベテ三人の息子への対し方をめぐって、早くも行き惑ってしまいました。その処置が、黒人問題、奴隷制にまで及

んでいる「西欧社会」のピラミッド構造の世界が、それこそ津波のように、私に迫ってきました。そんなことでたゆたっている間に、蔵書整理をしていて、かつて愛読した本に出逢いました。「鳥のように川のように——森の哲人アユトンとの旅」長倉洋海著——長倉さんはフリーランスのフォトジャーナリストで、アフガンやアフリカなどから、忘れ難い影像を送りつづけて下さった方です。京都での集会で、お話を聞くことができ、この本も、その時にもとめたものです。本の帯の辺見庸の言葉——アユトンの体には美しき森の記憶がある。長倉洋海がそれを「詩」として「知」として、見事に結像させた。二人の旅は、いわば、人の記憶の宝さがし。……静かに、深く得心した——まさにその通り。人類を頂点に置く三角構造などではなく、共に地球の住人として、魚・鳥・樹々・山・川……みんな私たちの親族。「人間の社会は右肩上り」と考える人もいるが、伝統社会の進化過程は、螺旋状に行きて帰りつつ進む。「先住民族の文化は地球の毛細血管。それがあって初めて、地球の豊かさがある」に納得しつつ、その毛細血管が姿を消して、果てしない欲望の虜となった消費文化・拝金思想・科学至上……の現在を憂います。「私たちは、他の兄弟や生物たちを大切に扱わなければ、プレゼントとして授かったこの地球の旅を続けられなくなります。進化のきつかけを失うことになるのです。」

珠玉のような言葉に充ちていて、ご紹介すればきりのないことなのでこの辺りで止めますが、この本に私が「出逢えた」のには、ポーラ・アンダーウッドの「二万年の旅路——ネイティヴ・アメリカンの口承史」(星川淳訳)(翔泳社)が伏在していたと思います。一万年以上も前、朝鮮半島のつけ根あたりから出発したモンゴロイドの一族が、ベーリング「陸橋」をわたり、北米大

陸を南下、やがて五大湖のほとりに永住したネイティブアメリカン、イロコイ族の口承史ですが、このモンゴロイド族は、その後もわかれて南下した……という歴史を、はるかに、遠い夢のように、ふるさとのように蔵してきた——という背景があつての出逢いと思います。

立命館大学の国際平和ミュージアムの二階に、「平和をもとめて」というテーマの部屋があります。三つの部屋を通して、廊下側の壁に沿って、長い長い年表が掲げられています。部屋の展示に氣をとられて、あまり気づかずに通り返る人が多いのですが、地球の誕生以来の四六億年を人間の一年（十二か月）と考えたと、二月中旬に、「海中に生命が誕生」（四〇億年前）。……十二月初旬「恐竜時代はじまる」（三億年前）……といった調子で、「地球」意識が持てるのは殆ど十二月以降。そして類人猿から猿人が分かれるのが十二月三十一日、午後十時四〇分。現在のホモ・サピエンスが現れるのは午後十一時三七分——というのですから、地球の中では、新参者。その人間の、度を外れた行為が地球を破壊に導くようなことがあつては一大事です。核汚染・核爆発など、人間の過失によつて地球が宇宙のメンバーでなくなる——というようなことは、絶対にあつてはならないと思います。

人間の歴史を、そういう眼で辿りかえし、万物の霊長でもなければ、差別構造のピラミッドでもない、みんなちがつてみんないい、その快感を抱きつづけられるように、軌道修正をしていきたいものです。子どもから学び、自然から学び、歴史から学び、——あの学びは、東北の人たちの身を挺した苦難が、私たちの歪みをただしたきつかけだった——と言えるような体験に実らせねば……—と思います。

（京都在住）

町田の母たちの活動——3・11から一年を経て

子どもと未来をつなぐ会 林加奈子

3・11、東日本大震災

二〇一一年三月十一日、東日本大震災と福島第一原発事故。日本は悲しみの中に落ち、この日から、私の生活すべでも、大きく変わってしまった。

三月十一日の地震の直後、大慌てで、二人の子どもを幼稚園と小学校に迎えに行つた。

停電で信号も止まり、道端でしゃがみ込む人を横目に、ただただ子どもの安否が心配で、ガタ震える手でハンドルを握り、車を走らせた。

十六年前の阪神大震災を思い出していた。当時、神戸に住んでいた私は、あの日の悪夢を決して忘れない。

ぺしゃんこになった家々。ありえない形に変形した高速道路。数かずのご遺体。繋がれたまま放置された犬や猫。そんなことがグルグル頭によぎり、一秒でも早く子どもを抱きしめたい、と強く思った。

幼稚園にたどり着くと、園庭の真ん中に子どもたちが集められ、先生方が、なだめて下さっ

ていた。

子どもの安全を確認し、やっと落ち着いたのもつかの間、大きな余震が繰り返し起こり、しばらく園庭にしゃがみこんだまま、揺れが収まるのを待つしか無かった。まさか、その時に東北で大津波が押し寄せ、福島で原発が大変な事になっているなんて想像すらできず、ただただ地震の揺れの恐怖に身を縮めていたのだった。

町田では、一晩、停電で情報がつかめず、翌朝、やっとテレビが点く事によって、恐ろしい現実をようやく知ることになった。東北が津波に襲われていた。人が波にさらわれていく様子がテレビに映っている。小さい子どもが泣き叫ぶ。呆然と立ち尽くす女性が映っている。

今まであったはずの生活すべてが流されていく。記者が叫ぶ。何回も何回も、地獄のような映像がテレビに流れていく。これは本当に現実なのか。子どもを失くした親。親を失くした子どもたち。想像しようにも辛すぎて想像できないほどの悲しさ。胸はざわつき、気がつくとも悲しみと絶望の中で二日間、無気力脱力感になり、布団の中でじっと過ごしていた。

西へ避難そして 夫婦の亀裂

三月十四日、テレビから原発の事故のニュースが流れているのを見て、直感的に、「これは大変な事が起こっている。早く避難しないとー」と思った。私が十五か十六歳くらいの頃に、

チエルノブイリのニュースを見た記憶が蘇ったのだ。あの時は、「世界中が大変なことになった」と、まだ子どもだった私も漠然と感じていた。まさに今回、福島で同じようなことが起こっているのだ。「一刻も早く東京を離れなければ」と夫に相談した。しかし夫は「福島では大変な思いで冷却作業している人がいるのに、東京にいる僕たちがパニックになつてゐる場合じゃない。東京まで放射能は来ないよ。」と笑つて、聞く耳を持たない。しかし、私は反論した。「違う。違う。これは福島だけで起こっている問題ではない。東京でも放射能は降つてくる。今、判断を誤つて子どもたちを被曝させるわけにはいかない。だから私は大阪に帰ります」

東京に留まることを薦める夫と、半ば喧嘩状態で、私は子どもを連れて家を出た。ただただ子どもを守りたい一心で。

夫は呆れ返っていた。

原発の事故で、夫婦の間で亀裂が生じたケースは、私たちだけではなかった。やはり友だちも、同じように夫婦で意見が割れて、避難するかどうか悩んでいた。ふと、私は思った。女は十月十日おなかの中で子どもを育てる生き物。妊娠中も授乳中も子どものために、多少具合が悪くても、薬を飲まずに我慢するし、好きなお酒だつて諦める。子どもを守るといふ本能が、男よりも強い生き物なのだ。その勘に従い避難しよう。

避難する前に、友達と相談もした。何かあるかわからない。何も起こらないかもしれない。でも、後で後悔するよりも、「あの時は焦つたね」なんて笑い話になつてもよいから、とにかく

く避難しよう。そう仲間と相談し、西に行けるものは、西に行った。

避難先の大阪の実家で、インターネットやTwitterで情報を集める日々が始まった。

毎日、毎日、穴があくほど新聞を読んでも、ニュースを見ても、原発事故に対するまともな報道はされていない。「ただちに影響はない」などと、子ども騙しの安全キャンペーンに苛立ちを感じ、後手後手に回る政府の対応に、不安は大きくなる一方だった。御用学者は、「飛行機に乗っても自然放射能を浴びるのだから、多少浴びても大丈夫だ」と言う。昔、客室乗務員の友達が妊娠した時、「陸勤務に変わるのだ」と教えてくれた。「妊娠したら飛行機には乗らないこと」になっているのだ。なのに、今は、妊婦も赤子も、危険なエリアに取り残されている。「避難する、しない」は、各自の考えだろうが、「避難するか否か決める為の情報」は正しく出すべきだ、と思った。

チエルノブイリの研究者や、原発に批判的な学者の意見とは全く正反對の政府発表に、きな臭さを感じ始めた。嘘だ、嘘だ、嘘だ!! 政府は隠している。本当のことが知りたい。ただの主婦の私でさえも嘘だと分かるほどの、幼稚な説明。

〈世界一安全で安心な国、日本。〉そう信じて、誇りをもって生きてきた。なのに、こんな国だったとは……。経済ばかりを優先し、命を守らない政府だったとは……。

私の震災への恐怖と絶望は、政府に対する怒りに変わっていった。

放射能との戦い

四月八日。新学期が始まるので、不安を抱えながらも東京へ戻ってきた。

ここから放射能との戦いが始まる毎日が始まったのだ。まずは毎日の生活の中で、どう放射能を防げば良いのか、できるだけの防御をしたい。雨に濡れないように、風の強い日はマスクをする。野菜は西から取り寄せ、水もミネラルウォーターに切り替えた。しかし、どこまで汚染されているのか分からなく、漠然とした不安に、いつも苛まれていた。子どもに出す食事に、微量の毒が混ざっているかもしれないのだ。子どもの命をつなぐ毎食の食事に、「毒が入っているか」と思いつつ出す悲しさは、どう表現したら良いのだろうか。本当に辛かった。

今までは自然に親しむ育児を心がけて、親子で野外活動や泥遊び、自然遊びを楽しんできていたのに、事故後、「土に触ったら、手をすぐに洗って。雨に濡れないで。」そう、今までとは正反対のことを子どもに注意することが悲しかった。去年と同じように桜は咲き、草は芽吹き、一年で一番美しい春なのに、見えない放射能が降り注いでいる。春の美しさが余計に悲しく、切なく感じた。世界は、すべて変わってしまったのだ。

母親ネットワークⅡ〈子どもと未来をつなぐ会〉立ち上げ

今までとは全く違う環境での子育てにとまどい、先が見えなく暗くなるなか、同じように悩

む仲間との出会いがあった。

同じ学校、幼稚園の、母どうしの繋がりで知り合った十数名の仲間と、ファミレスでお茶をしながら、災害後の思いを口々に語り合った。皆、同じように悩み、これからどうして防衛していこうか考えていた。そうした仲間との繋がりに、本当に救われ、助けられる思いだった。一人きりではとても立ち向かえなかったけれど、仲間がいて相談できることで、前を向くことができた。そして〈子どもと未来をつなぐ会〉を立ち上げ、放射能に対する勉強会や、心から語れるような座談会を企画し、母たちが孤立せずに放射能に立ち向かえるための活動を始めた。

同じような時期に、各地で母親たちの会が立ち上がったのも、同じような理由だったのだろう。母親のネットワークは、次第に横にも縦にも伸びていき、今は全国ネットワークにまで広がりを見せている。

そんな中でも、同じ立場の母親たちの間でも、温度差は確実に生じていた。

息子と同じクラスの母は、こう言った。

「政府が大丈夫だって言っているのだから、大丈夫なんじゃないの」

「心配しても仕方がないじゃない。いつかは皆、死ぬんだから」

「もう怖いから考えるのは、やめた」

「電気を使っていたのは私たちだから仕方ないんじゃない」

「政治と宗教と放射能を語るのは、タブーだから」

「東北が大変だから、東京で放射能のことは言えない」

私は、彼女たちのこの考え方に、「放射能自体よりも怖いもの」を感じたのだった。

チエルノブイリを超えるほどの事故が起きているのに、まだ現実を知ろうとしないことへの怖さ。主体的に考えることをやめた怖さ。国が絶対だと信じて疑わない怖さ……。

「放射能のことを怖いと語ること」が、まるでタブーのように、近しい人にさえ語ることを、皆がためらっていたのだった。お互いに心の中を探り合い、余計なことに触れないように、本心は心の中に隠していた。放射能の影響は、身体だけではなく、人間関係にまで影響を与えているのだ。

私は戦争を体験していないので、戦時中を知らない。しかし「こんな感じだったのでは？」と、想像してしまった。

「日本が負けるわけがない」と信じ、B29を竹槍で落とす訓練をしていた人びと。

今まさに、その渦中なのでは？「戦争は終わってなかったのでは？」「今は戦時中なのだ」我が子に赤紙を付きつけられた母親の気持ちになった。

政府の薄っぺらな「絆」というキャンペーンに、子どもを殺されてたまるか!!

私は、母親たちでさえ原発や放射能に対し温度差があることを知り、「このままでは、絶対に社会は変わらない」と痛感した。政府の嘘を、経済主義の今の世の中の是非を、事故が起こ



息子の鼻血

我が子に異変が！

って初めて知ったこと、考えたこと。これらを多くの人と共有し、より良い未来を子どもたちに手渡すために、「今、大人が真剣に考え取り組むことが責任だ」と感じた。

「子どもを守りたい」——ただこの一点で集まった仲間と共に、活動は始まったのだった。

四月、五月、六月、息子に異変が現れ始めた。九年間一度も鼻血を出したことの無い我が子が、一週間に一〜二回、合計九回も鼻血を出したのだった。夜中に突然鮮血で布団を染めたのだった。「いよいよ本当に始まったのか」——覚悟はしていたものの、実際に起こると、恐ろし

くなり、友だちに相談した。するとなんと、数人の友達の子どもも、同じような鼻血が出ていたのだった。なかには爪がポロッと取れてしまった三歳児もいた。

6月のちょうどその頃、被曝医師の肥田舜太郎先生の講演会に出かけて行き、直接、ご本人に息子の症状を伝えてお話を伺った。

先生は、「鼻血は低線量被曝の症状と似ている。可能性はありますね。」と、仰られた。

そう言われ、不思議と私は安堵したのだった。もしこの時、他の医者に、「放射能なんて関係ありませんよ」などと笑って言われていたら、余計に不安になっていたのかもしれない。なぜなら、低線量被曝に詳しい医者なんて、ほとんど存在しないのだ。

唯一、日本で低線量被曝の臨床を六四年間ずっと続けてこられた肥田先生に出会い、本当のことを教えてくださった肥田先生に感謝した。そして、皮肉にも息子の身体が、「放射能の影響が実際にある」という事実を教えてくれたのだった。

放射能のデトックスに良いとされる、酵素や梅干し、玄米、味噌汁などの食材を採るように、心がけ、息子の症状も次第に治まってきたが、今後どうなるかは分からない。

その後、低線量被曝の健康調査を会で実施し、下痢、嘔吐、鼻血、血便、持病の悪化、アトピーの悪化、免疫不全、爪の剥がれなど、一五〇名近くの症例を集めることができた。

十二月には、民医連の医師団二〇名と、関東各地の市民九〇名との意見交換会を行い、健康に関する質疑応答や今後の健康調査について話し合いをもった。「現状を把握し、記録を取ることが大切だ」と確認した。——そうすることによって、何らかの大きな病気を発症した際にも、早期発見し治療できるだろう。

被災地へボランティア（宮城県石巻市、女川町）

夏休みに入り、子どもの保養のために、子どもたちを大阪の実家に送り、母に見てもらうこ

とになった。

子どもが手から離れたので、単身、被災地へボランティアに行った。

震災直後、あの津波の映像を見て、「すぐに飛んでいって手伝いたい」と思っていた。しかし、「原発事故」のせいでそれもできなかった。子どもを守るためとはいえ、今、苦しんでいる東北の人たちのことを思うと、西へ逃げる自分が許せなく、もどかしく、罪悪感に苛まれた。夫の実家も、青森で被災し、家を取り壊すこととなった。偽善かもしれないが、とにかく何かしないといけないという気持ちで、寝袋と着替えを持って、石巻市に入った。

八月の日差しが強い中、黙々と災害瓦礫を撤去する作業を行なった。

津波で押し寄せられた瓦礫を一つ一つ手で集めていく作業。気の遠くなるような莫大な量であった。瓦礫といっても、もともとは大切な人の営みの財産だ。テーブル、タンス、鏡、アルバム、人形、タイヤ……。あの時から時間が止まったように、物たちが横たわっていた。

お盆前だったので、お盆に間に合うように墓地の瓦礫撤去を担当した。墓石が流されてグチャグチャになっている。瓦礫の山となっている墓地をみると、お盆なのに帰る場所すらない魂が、気の毒で仕方なかった。「早く魂がお墓に入れますように」と、一心に、瓦礫を集めた。

そして一週間。瓦礫を一日中集めていると、鼻腔に違和感を感じ始めた。膿が鼻の奥や喉に溜まっているのだ。肌もボロボロになっていった。

津波で押し上げられた瓦礫の中には、ヘドロ、ダイオキシンやアスベスト、重油、重金属、いろいろなものが含まれていた。国は、これをどう処理するのだろうか。瓦礫の山を見上げて、

ふと、そう思った。

行政への行動開始

十月、東京都が災害廃棄物を受け入れる表明をしたことに、驚きと怒りを感じた。災害廃棄物の焼却は、「さらなる汚染」を意味するのではないだろうか。

東京でも確実に放射能汚染がされ、子どもたちには低線量被曝の症状さえ出てきている。

「これ以上の二次汚染は、もうさせたくない！ なんとしても考えなおして貰いたい！」

議員の中で「瓦礫受入れ反対」という人は実際に瓦礫を見たことなどない人だ、あの瓦礫の山を見たら、「受入れ反対」なんて言えるわけがない」そういう人がいる。

そして、私はこう考える。

議員は、ただ瓦礫を視察しただけで、手に触れていない。私は、実際に手に触れ、匂いを嗅いで撤去してきた。その時に瓦礫の中の様々な汚染を、五感で感じたのだ。あれを感じたら、「人口過密地帯で焼却しよう」なんて思えないはずなのだ。アスベストやダイオキシンや放射能を、いかに目で選別し、見分けられるというのだろうか。

十月二一日。東京都庁の環境局廃棄物対策部、一般廃棄物対策課長の今井正美氏と面談をして、災害廃棄物処理のスキームを伺った。

「現地で焼却実験をし、基準値以下の安全なものしか東京で焼却しないので、基本的に安全と考える」というのが、今井課長の答えだ。しかし日本政府は、瓦礫の再処理可能な範囲を、「8000ベクレル以下/kg」と、事故前の80倍に設定した。しかも根拠は明かされていない。食品にしても、水にしても、瓦礫にしても、政府は事故後、いとも簡単に、暫定基準として「核戦時下」の甘い基準値を設けた。世界の基準値から見れば、どれもかけ離れている数字だ。「これで安全」と言われても、信じることができるわけがない。

命に〈暫定〉などあるものか!! 暫定、暫定、の中で、安心して子育てなどできるものか。世界の常識である「放射能の危険性に、閾値など無し」の論理を、日本政府は、どう考えているのか。

微量と言っても、1ベクレルだって子どもの口には入れたくない。——こう思わない親が、何処にいるというのだ。

最初の原因事故は防げなかったとしても、災害廃棄物広域処理による二次汚染は、明らかに人災だ。「もし何かの影響があった場合、誰が責任を持つのか?」と、環境局に聞いた。

答えは、「受け入れる、受け入れないは、自治体の判断なので、自治体に責任がある」だったのだ。「ならば自治体に聞いてみよう」と、次は町田市に面談を申し入れた。

十月二二日、町田市環境資源部と面談。

環境資源部宗田部長の回答は、以下のとおりだった。

「東京都からの申し入れに対し、町田市としても困惑しているが、受け入れる方向で動いている。しかし、住民の多数の反対意見があれば、受け入れを見直すことも検討している。」

まだ、具体的な説明を、国からも東京都からも受けてはいないのに、瓦礫を受け入れようとしていた。しかも責任の所在は、自治体ではなく、国だと言う。まるで責任のなすりつけ合いだった。

「見切り発車での受け入れありきの状態だ」と感じたが、「多数の反対があれば、受け入れ見直し検討」の言葉を信じ、民意を表すための署名活動を始めようと決断した。初めての署名活動。手探りの中で進むしかなかった。

災害廃棄物受け入れ見直しの署名活動開始

署名活動開始。

たった十名程度のメンバーが街頭に立ち、一人一人に現状を説明し、署名を集め始めた。

署名を集めながら、放射能の危険性を訴え、「瓦礫の受け入れが安全では無い」ということを話し続けた。

ある日、駅前で街頭署名を行なっていると、生後間もない赤ちゃんを抱いた若いお母さんが近づいて来て、小さな声で、

「放射能気にしてらっしゃいますか？」

と、私に聞いてきた。私は、

「もちろん気にしてますよ。放射能を防御するように気をつけています」

と答えた。すると彼女は突然泣き出し、

「私も放射能が怖いんです。私の母乳は大丈夫なんでしょうか？子どもに、セシウムを飲ませてないでしょうか？周りの人は、誰も気にしてなくて、誰にも相談できないんです。私おかしいのでしょうか？」

一番子どもが可愛い時期に、母乳を飲ませて幸せを感じるはずの時期に、母乳を飲ませながら悩むお母さんに、胸が痛くなった。

政府がきちんと隠さずに放射能の危険性を認め、対策を練っていたならば、こんなに苦しい思いをしなくて済んだのではないだろうか。風評被害は、政府自身が作ったものだ。生産者も、消費者も、被害者ではないだろうか。

さらに瓦礫広域処理が始まったら、関東のお母さんだけでなく、広域に汚染された日本中のお母さんたちが母乳の心配をし、「子どもに何を食べさせたら良いか」悩むことだろう。

署名開始から二か月、年末には8686筆の署名が集まった。

小さな子どもを背負いながら、たくさんの母親たちが協力して集めてくれた署名の重さを、行政の役人たちはどう受け止めるだろうか。

（参考資料1 請願・陳情文書表・7号請願）

平成 24 年 (2012 年) 第 1 回 町 田 市 議 会 定 例 会

請願・陳情文書表

○ 請 願

番号	件 名	受理月日	付託委員会	頁
1	相原駅西口駅前広場への自家用車送迎場所設置の請願	3月2日	建 設	1
2	町田市議会議員の定数削減を求める請願	3月5日	議会改革調査	3
3	町田市議会本会議場、市長室、議長室に国旗の掲揚を求める請願	"	総務	5
4	旧緑ヶ丘小学校の施設開放継続を求める請願	"	文教社会	7
5	都市再生機構賃貸住宅を公共住宅として存続させることを求める意見書提出に関する請願	"	———	9
6	町田市における放射能対策の強化を求める請願	"	健康福祉	13
7	災害廃棄物の広域処理に関して住民の健康不安を解消するための対策を求める請願	"	建 設	15
8	町田市男女平等推進センター活動室・多目的実習室の有料化中止を求める請願	"	文教社会	19

請願第 7 号

有害廃棄物の広域処理に関し住民の健康不安を
解消するための対策を求め

青原 晋

<請願者>

住所



氏名

紹介議員

外 13 人



3月15日、町田市議会建設常任委員会

市議会に、請願を提出

十二月議会に「放射能汚染の疑われる災害廃棄物受け入れに対し 慎重な対応を求める」請願を、提出。

この請願は、全会派一致で可決された。

「ようやく私たちの主張が認められた」と喜んだ。

しかし、喜びもつかの間、議会では、全会一致で可決であっても、行政サイドの対応は違った。

再度、町田市行政との面談の際に要望書を提出したが、回答は満足を得られるものではなく、「国や都が安全と認めたものは、町田市も安全と認識し、受け入れる」というものだった。

情報公開も、安全性の根拠も明らかにされないまま、住民合意をいかに取るというのか。

住民が納得できるように、議論を重ねる住民説明会の開催を求めても、なお、「説明会は単なる説明の場。議論の場でない」と突っぱねる行政。〈市民協働の市政〉とうたいながら、どこに〈協働〉があるというのか疑問だ。

ますます行政への不信感と失望は募っていく。

(参考資料 2 12月請願)

（参考資料2 12月請願）

災害廃棄物受け入れに関して慎重な対応を求める請願

私たちは3.11以後、新しい世界に突入してしまいました。日本では未だかつて体験したことのない事が起こり、母親として子どもを守る為に放射能について懸命に勉強をし努力して来ましたが、内部被曝させない為に、毎日の食事や水に気を使い、食材を選び、精神的にも肉体的にも経済的にもギリギリのところまで頑張っています。そして、なお放射能は大気に海に放出し続けています。子育て中の母親にとっては、我が子が成長する喜びを噛み締めるよりも、子どもが病気になるか不安でならない状態です。

東日本を復興させる為には災害廃棄物の処理が不可欠な事は承知しています。誰もが復興を願い支援しています。しかし、放射性物質はいったん拡散すると回収、除染が非常に困難なので、拡散させない事が重要です。焼却処理により放射能が再拡散され、子ども達が内部被曝する事が何より心配です。

環境省は放射性セシウム8000ベクレル/kg以下の廃棄物の焼却とその焼却灰の埋立処分、その灰の放射能が10万ベクレル/kg以下の場合は一時的保管、または固化して埋め立てるなどの方針を示しましたが、10万ベクレル/kgという数値は従来の放射性廃棄物の基準値（放射性セシウム合計100ベクレル/kg）の千倍にあたり、原発事故前であれば放射性廃棄物として厳重に管理処分されていたレベルのものです。またこれらの放射能を含む廃棄物を処理する事は厳重な管理が法令で定められる（放射能業務）にあたる可能性があり、とても市町村で出来る事ではありません。町田市の清掃工場は築29年と老朽化しており、処理能力も心配です。住民、特に子ども達の健康や避難中の被災者の方々が安心して暮らせるように、町田市には子どもの健康を第一に考えて頂き、第三者委員会などで公正に判断し、リスクマネジメントして頂きたい下記の請願を致します。

請願要旨

町田市は災害廃棄物を受け入れる場合は、子ども達に健康被害がでないように考慮し、処理の過程で放射性物質が再拡散しないように、安全性を確保できる策を講じて下さい。

2011年12月1日

3月議会。母親グループ〈子どもと未来をつなぐ会〉だけではなく、町田市のありとあらゆる世代も加わった〈放射能拡散防止ネットワーク〉を結成し、請願を提出した。子どもを抱えてなかなか身動きを取れない私たちにとって、幅広い層のネットワークの力がありがたく、大きなものとなった。

この請願は、十二月の請願よりも内容に踏み込み、より具体的な要望を柱として書いた。

なかでも、『復興支援は「人」を支援すること』という請願を新しく加えた。福島から東京へ避難して来られた母子との出会いが、この請願の源であった。

彼女は福島県三春町、自主避難区域から旦那さんを福島に残し、母子で東村山市に疎開していた。しかし、三月一杯で借り住まいの大家から「出て行って欲しい」と突然言われ、行く先を探しているところだった。

彼女は涙ながらに「福島の事故は終わっていないのに、仮設の住まいには期限があり、やつと落ち着いたと思ったら、また引越ししなくてはならないの」と語った。

私は、小学校一年生の娘さんが何度も転校することが気の毒で、何とかしばらく安住できる地はないものかと、町田市役所に電話し、町田で自主避難の方に斡旋してくれる住宅があるかどうか尋ねた。

しかし役所の対応は冷たく、「町田市ではやっていません。東京都に聞いて下さい」と言う。

東京都に電話をすると「去年の十二月一杯で都営住宅の斡旋は終わりました。今後はご自分で探して下さい。」という。

私はビックリした。

あれだけ被災者支援といい、瓦礫を受け入れる事を声高々に言っていた東京都が、被災者を受け入れてなかったとは……。『信じられない、なんとしたことか！』福島に彼女に、何と報告したら良いのか。彼女に申し訳ない気持ちで一杯になった。

本当の支援とは一体なんなのか、国の嘘が、また見えた気がした。

この三月の請願は、「継続審議」という形で終わった。より具体的な内容となると、全会一致とはいかなくなる。骨抜き案で通すか、具体的に攻めるか。会の中でも割れたが、「最後の請願」という位置づけで攻めた結果だった。

国が情報を閉ざし、放射能の影響について甘く評価し、丁寧な説明もなく推し進めている、広域処理を自治体を受け入れるのなら、自治体は自治体として市民の安全を守るために、最後の砦として〈安全性の確保〉をして欲しかった。いったい「誰が子どもの命に、すべての生き物の命に、責任を持つ」というのか。

(参考資料 3 3月請願)

(参考資料 4 意見陳述)

(参考資料3 3月請願)

災害廃棄物の広域処理に関して住民の健康不安を解消するための対策を求める請願

【請願要旨】

東日本大震災で被災した地域の復興は、私たち町田市民にとっても切なる願いですが、復興支援の名のもとに、災害廃棄物の広域処理を安易かつ拙速に行う事は、放射能汚染を日本全土に拡大させ、国民、都民、町田市民を逃れようのない被ばくの連鎖にさらしてしまう、復興とは正反対の行為になってしまうことが懸念されます。真の復興支援とは、自主避難者も含め、被災地から避難してきた人たちを支援し、福島そのものとも言える、「人」を守ることでないでしょうか？ 間違った形での復興支援が不幸な事態を生まないために、町田市は以下の点について、真摯かつ真剣に取り組んでください。

【請願項目】

1 責任の所在について：

町田市内で行われる災害廃棄物の焼却により、線量の上昇、環境、健康への影響があった場合、国、東京都、町田市のいずれが責任を負うことになるのかを、国と東京都に問い、文書で回答を得てください。

2 住民説明会について：

- ・開催の案内は様々な媒体を駆使し、十分な時間をとって、開催に関する周知を徹底してください。
- ・質疑応答の時間を十分に取り、住民からさらなる説明会の開催要求がある場合は、住民との合意を形成することに最大限の努力を払い、十分な議論ができる場にしてください。

3 焼却実験について：

- ・排ガスから放射性物質が拡散する可能性について、捕捉量及び検出限界値の精度、フィルターの性能、各種の気象条件の影響などに関する焼却実験を行い、その段階で詳細かつ科学的な検証を行ってください。
- ・焼却実験は、町田市民および専門家に公開して行ってください。

4 安全対策について：

- ・放射線測定については宮古市からの先行事業分の水準を確保し、各処理の工程ごとに、詳細な放射性物質の測定と厳重な監視体制をとってください。
- ・捕捉量及び検出限界値の精度、フィルターの性能、各種気象条件の影響などにより、排ガスから放射性物質が拡散する可能性を考慮して、排出口、町田市内の浮遊塵、降下物などについての詳細な測定、評価、公表を行ってください。

5 焼却灰について：

焼却灰の安全な処理方法を検討してください。

6 復興支援は「人」を支援することで：

自主避難者も含め、福島から町田市に避難してきた人たち、これから町田市に避難してくる人たちを支援してください。

(市営住宅居住、就職活動のサポートなど、町田市独自の支援体制をつくってください)

（参考資料 4 意見陳述）

本請願に対する意見陳述の場をいただきありがとうございます。

3・11から1年。目に見えない放射能に振り回された一年。放射能に関して様々な情報が飛びかい、専門家でも意見が分かれ、何が正しくて何が間違っているのか、自分で考え選択をするほかなかった一年でした。本当のことは未来にならないとわからないのです。私はわが子を今しっかりと守ることができているのでしょうか？3月15日に東京に放射能ブルームがやってきた時、何の情報もなく、娘は幼稚園の園庭で無防備に遊び、次の日は風の強い中、卒園式に出席しました。今思えばあの時急いで逃げていたらと悔やんでなりません。その後周りの子ども達に今まで無かった鼻血や発熱、下痢、嘔吐などの症状が出てきて大変不安に思いました。被曝医師の肥田舜太郎先生に相談したところ「広島原爆の後の低線量被曝の症状と似ているね」と言われ、これ以上の被曝はさせたくないと強く思いました。

昨年受入の話聞き、二次汚染による健康被害を心配し、どうやって受入は決まるのか、安全がどのように守られるのか、再拡散によって健康に被害が出た時には誰がどのように責任を取ってくれるのかなど、不安に思うことを電話や面談などで市に問い合わせをしましたが、市は東京都に聞いてくださいといい、都は「受入は自治体の判断ですよ」と言います。都にも市にも何度も足を運びましたがたらいまわしのまま、納得できる回答はありませんでした。いったい子供たちの健康や環境はどちらが責任をもってくれるのでしょうか？

私たちは国や都、市の災害廃棄物の処理の判断の議論のプロセスを知りません。知らない間に国の非公開の会議で根拠もわからないまま基準値が決まり、焼却処分は安全とされました。

都からはどのように自治体に展開され、そして町田市はどのような経緯で決定されたのですか？

ここで徳島県環境整備課のホームページから引用させていただきます。

放射性物質については、封じ込め、拡散させないことが原則であり、その観点から、東日本大震災前は、IAEAの国際的な基準に基づき、放射性セシウム濃度が1kgあたり100ベクレルを超える場合は、特別な管理下に置かれ、低レベル放射性廃棄物処分場に封じ込めてきました。ところが、

国においては、東日本大震災後、当初、福島県内限定の基準として出された8,000ベクレルを、その十分な説明も根拠の明示もないまま、広域処理の基準にも転用いたしました。（したがって、現在、原子力発電所の事業所内から出た廃棄物は、100ベクレルを超えれば、低レベル放射性廃棄物処分場で厳格に管理されているのに、事業所の外では、8000ベクレルまで、東京都をはじめとする東日本では埋立処分されております。）

ひとつ、お考えいただきたいのは、この8000ベクレルという水準は国際的には低レベル放射性廃棄物として、厳格に管理されているということです。

例えばフランスやドイツでは、低レベル放射性廃棄物処分場は、国内に1か所だけであり、しかも鉱山の跡地など、放射性セシウム等が水に溶出して外部にでないように、地下水と接触しないように、注意深く保管されています。ここまですが引用です。

福島原発事故では大量の放射性物質が広範囲に拡散しここ町田にも女川にも降り注いでいることは明らかです。

放射性物質の移動と焼却は世界でも初めてだと思います。本来なら、民主的に民意を問うためのパブリックコメントや環境アセス等があるべきものだと思います。

基本的な情報公開がなければ住民説明会の意味もありません

どうか住民説明会においては説明会の目的が「形式的な儀式」で終わらず、十分な説明と根拠の明示をしていただき、コンセンサスを得られるまで行ってください。私達リスクを追う側としては、命健康に関わる問題なのです。

市はバグフィルターが、放射性物質が99.99%除去できる検証を小山田の焼却施設で行い、排水や焼却灰に濃縮された放射性物質の将来にわたる再拡散防止も徹底検討をお願いします。

そして再被ばくをしない綺麗な環境で被災者支援として避難者の受け入れ態勢を独自に整えてほしいと思います。

かけがえのないきれいな水、空気、安全な食べ物を子供たち、未来の世代に引き継ぐのは大人の責任だと思います。

以上です。ありがとうございました。

そして三月議会ではもうひとつ、母親たちのネットワークと町田市の市民グループハグルー
プの共同請願として、「町田市における放射能対策の強化を求める請願」を提出した。

中心となった母たちは、メーリングリストで繋がった母たちだった。私と同じく、今まで市
民活動などしたことなかった、議会傍聴へも行ったこともなかった母たちが、事故後、子ど
もを守るために声をあげたのだ。給食測定の徹底や、空間線量測定の継続と除染、食品測定器
の導入のお願いなど、悲痛な生の母親の意見陳述に涙を流す議員もいた。そして全会一致で可
決となった。

請願を通して感じたことは、初めての国難で、議員も行政も誰も正解など分らないなか、
市民一人ひとりが声を上げて訴え続け、考えていくことの大切さを感じた。「非力」だと感じ
ていた主婦たちが大きな力を生んだのだ。

災害廃棄物広域処理は、本当に被災地の為なのか？

今年に入り、広域処理問題はマスコミでも大きく取り上げられ始めた。政府の広域処理推進
キャンペーンも、巨額の費用をかけて行われている。

新聞投稿などでも、「広域処理で被災地を助けよう」「東北の痛みを分かち合おう」「受け
入れ拒否する自治体は身勝手だ」「受け入れ反対は住民エゴだ」との声を多く見かける。

私は、この人たちの善意ある言葉を否定はしない。ただ、やはり放射能の拡散で日本の国土

全域を汚すことと、原発に無関係だった子どもたち、次の世代の者たちへの計り知れない影響を考えた場合、広域処理に反対せざるを負えない。そもそも、東京電力が撒き散らした放射能であるのに、当事者は高見の見物で、広域処理問題は、〈市民対市民〉、〈被災者対その他の地域〉の対立となってしまうている。焼却灰も、汚れたバグフィルターも、全部、東電の敷地内へ返却するのが筋というもの。東電は、放射能の半減期がなくなるまで、責任を持って放射能の後始末をしなくてはならない。責められるべきは東電と国ではないか！

しかも、被災地の陸前高田市長や岩泉市長は、被災地での処理を求めているではないか。

陸前高田市長は、「本当は市内に瓦礫処理専門のプラントを作りたい。そうすれば自分たちの判断で、何倍ものスピードで処理できる。しかし、このことを県に相談したら、門前払いの形で断られました。」という話もあった。プラント建設には、種々の手続が必要で、例え許可されても、数年かかるというのだ。千年に一度の未曾有の緊急事態にもかかわらず、国は現行法に縛られるばかりで、法律や条例が妨げになっている。食品基準は、いとも簡単に暫定的に変更できるのに、おかしい話だ。

広域処理の真の目的は、何なのだろうか。本当は「国土全部を均一に汚染するのが目的なのだろうか」とさえ、思ってしまう。日本の国土と未来の子どもを守るための手段とは、とうてい思えない。国土を均一に汚染し、福島事故の影響を過小評価し、さらには、原発再稼働というシナリオさえ透けて見えるのは、考えすぎだろうか。

事故の反省もないまま、福島での数々の問題もおざなりのまま、「原発再稼働の為の安全基準の制定」が拙速に行われている。日本は何処へ向かうのだろうか。

それでも春はくる　　これから進むべき方向

3・11以後、世界は、すっかり変わってしまった。しかし、うつすらと放射能にまみれた世界になっても、今年もまた、美しい桜の季節はやってき、希望に胸をふくらませて、息子は、新一年生になる。

そんな息子を見ながら、「こんな世の中を作ってしまったて、本当に申し訳ないね。でも、君は強く生きてね」と、心の中で詫げる。

この子どもたちの無邪気な笑顔を見ながら、心に誓う。「できる限りの手を尽くそう、事態を好転させる唯一の鍵は、名もない庶民の連帯行動だ。子どもの命を守るために、あきらめずに行動をしていこう」と。

今こそ、核に頼らず、環境を破壊しないエネルギーを考え、どういう暮らしをすればいいのか、本質的に大切なものは何なのかを一人一人が考えて繋げれば、私たちは、「私たちの文明の進むべきもう一つの方向」を選択することができるのではないだろうか。

（東京都町田市在住　二児の母）

「危険なものは、もう絶対に造らないで」

成瀬の自然を守る会会長 塚本 誠子

昨年の三月十一日に起こった東日本大震災は、国会の予算審議をテレビで見ている最中に起こった。長く大きな地震に驚いたが、議員は総立ちとなり、議会は解散。各地の地震の情報とともに津波発生ニュースが入り、テレビに釘付けになった。

次つぎに襲うあの恐ろしい大津波の映像。大きな船も、車も、家も、人も、轟音とともに流されて行つた。こんなことが、今、起きている……。身も心も震え、いても立ってもいられない思いに呆然としていた。今までも、日本や、多くの他の国で大地震や津波があったのに、こんな大きな衝撃は受けなかった。やはり、生々しい映像と大音響と、被災された多くの人の心のうちを思つたからか……。

一九四五年三月の東京大空襲の時、十二歳の私は千葉県に縁故疎開をしていて、幸い爆弾が近くに落ちたり、火に追われて逃げ惑つたり、人の遺体を見ることもなかった。

広島や長崎の原爆投下も、だいぶ日がたつてから写真や話で知り、東京へ帰って焼け跡の凄さを見たというだけで、辛く悲しい戦争体験といえるようなものではなかった。

しかし、父がレイテ島で戦死をして、「母や私たち姉妹の人生を変えた」という、戦争への

口惜しい思いを忘れることができない。今では、少なくとも日本での戦争死はなくなったが、事故死や自殺などの痛ましい死が多くなったことはとても残念だ。

昨年の大地震と大津波はきわめて広い範囲で起こったため、亡くなった方や行方不明の方は大変な数にのぼった。家や職場を失い、やっと入れた仮設住宅も一年後には出なければならぬという不安な日々を送っている方も多いと聞く。戦争の被害の規模からいえば比べようもないが、大きな自然災害の前に、人間は手も足も出ないということを改めて知らされた。

最大の地震国といわれる日本の中に、いつの間にか原子力発電所が五四基も造られていたとは知らなかった。知ろうとしていなかった自分が恥ずかしく、とても悔しい。

「CO₂を発生しない」「安全な原子力発電」と、毎日のように新聞に広告されていた。半信半疑ながら、そうかもしれないと思ったこともある。しかし、原爆の恐ろしさ、放射能の怖さは、頭から放れなかった。そして、発電後に出る廃棄物は、青森県の六ヶ所村にドラムカンに詰められて、大量に保管されていることは知っていた。それほど危険なものを受け入れ、まだまだふえ続ける危険物と知りながら、受け入れざるを得ない背景を考えると、とても悲しい気がしていた。

十三年ほど前、当時、町田市のごみ問題にかかわるグループに入っていた関係で、ドイツの環境都市「フライブルグ」に一週間ほど滞在し、環境に取り組む講義を受け、市内のあちこちを案内していただいた。

原子力発電所の建設に反対し、太陽光発電や地熱の利用、バイオマスで発生するエネルギー

の活用などを見学。「黒い森」と呼ばれる酸性雨で、大きな被害を請けたモミの木の森にも入った。エネルギー政策についていろいろと学んだ。原発から脱却するための努力、気候保護のための「CO₂」の発生抑制だった。

一九八九年に創立した「成瀬の自然を守る会」は、自分たちの住む環境が区画整理などの開発により、どんどん緑が失われていく状況に向き合い、次世代の子どもたちや、森に生きる動物のために、森の環境を守り育てていく活動を続けている。

私たちは、近くの農家の方たちの新鮮な作物を買い食べているが、今度の原子力発電所の爆発事故による放射能の影響が東京まで及ぶとは思っていなかった。四年前から会員が育て、楽しみにして食べていた「椎茸」の線量を、念のため計ってみようということになった。

数字が出ないことを半分期待をして結果を聞いた。基準100ベクレルを僅かに超え、126ベクレルだった。3キログラムの椎茸を、十人ほどで分け持ち帰った。私は大きな椎茸を半分に分けててんぶらにして食べてしまったが、夫はどうとう食べなかった。

放射能の影響でお米や農作物を作っている農家や酪農をされている方、漁業の方がたの悲しみや辛さはいかばかりか。子どもを育てているお母さんたちの心配などを思うと、原子力発電所に対して、「安全だ」と言って推進してきた企業や政治家に対して、悔しい思いはぬぐえない。「人工の危険なものもう絶対に造らないでー二度と起こさないでー」と大きな声で叫びたい。

(東京都町田市成瀬台在住)

〈成瀬の自然を守る会 ホームページ <http://members3.jcom.home.ne.jp/naruse-one/>〉

東日本大震災・福島原発事故から一年を迎えて

六ヶ所みらい映画プロジェクト 矢部 慶喜

東日本大震災から一年。私が制作スタッフとして関わっている映画「福島六ヶ所未来への伝言」及び同映画の監督である島田恵について書こうと思う。

なお、以下の様ざまな見解については、あくまで個人的なものであり、島田恵及び映画「福島六ヶ所未来への伝言」に関わる方がたの意見を代表するものではない。

「3・11」以後の反原発・脱原発運動

素人の乱——新しい運動の出現

東日本大震災・福島原発事故以後の反原発・脱原発運動というのは、今までの市民運動とはまったく様相が異なっていた。それは、四月十日に一万五千人が集まった「素人の乱」主催の高円寺での集会が象徴している。私自身もその場にいたが、参加者はパンクロックの若者、ベビーカーに子どもを乗せた母親、女子大生風の集団が中心であった。中でも驚いたのは、片手に缶ビール、もう一方の手には「原発反対」のプラカードを持っている若者が何人もいたことだ。

デモ隊も、参加者が規則正しく並んでいるわけではなく、各梯団は「サウンドカー」と呼ばれる車両を先頭に人が群がり、大音量の音楽の中で、「原発いらねー」を叫び続けていた。

「サウンドカー」のまわりは、まさにライブハウスさながらといった状態。その姿を見て、「あいつらは本当に真剣に原発問題を考えているのか」と言っていた人がいたほどだ。解散地点においても警察からの解散命令などおかないしに「原発止めるー」を叫び続ける。そして周辺のいたるところでは、主催者側から、その後の交流会の案内チラシが配られていた。この状況を見て、「社会問題に一見興味がないように見える若者が多いこの世の中」を憂えていた私は、ある意味で安堵の気持ちを感じた。

高円寺に端を発した若者たちは、特定のイデオロギーを持っていないわけではなく、「原発は怖いからやめろ」という意識があるだけなのだ。それは、「素人の乱」の関係者やデモ参加者などがよく口にする、「二つの主義主張にこだわる必要はない。原発を止めたいという気持ちがあればいい。それぞれの団体、個人がやりたいことをやればいいだけ」という言葉でも、はっきりとわかる。

二〇一二年三月十一日の福島・東京での運動

東日本大震災・原発事故から一年の二〇一二年三月十一日を迎えた。福島の実地では、郡山市の開成山球場で「原発いらねー！ 3・11福島県民大集会」が、東京では「3・11東京大行進」及び「3・11原発ゼロへ！国会囲もうヒューマンチェーン」が開催された。

「原発いらない！ 福島県民大集会」は、予想どおりの大集会となったが、天候には恵まれたとは言えなかった。陽が隠れていることが多く、とても冷え込んでいた。寒さに慣れているはずの青森のスタッフが我慢できず、コンビニに手袋を買に行ったほど。スタンドに立つと、冷たい風が吹き付けるたびに寒さに震え、薄着で着てしまったことを後悔した。

開場時刻は十二時であったが、私たち撮影スタッフが十時に会場前に到着し、撮影準備を行なっているころには、すでに多くの人が集まり始めており、早くも大集会を予感させる状況であった。開場するとひっきりなしにスタンドに人が流れ込み、集会の途中で当初は放射線量の影響で参加者を入れない予定であった外野席を解放しなければならぬくらいの人となったのだ。

会場が野球場であったことも成功の大きな要因であったと思う。福島県内参加者スペースと県外



2012年3月11日 「原発いらない！ 福島県民大集会」

参加者スペースに分かれてスタンドに入った人たちが、グラウンド内に設置したメインステージを囲み、一点に集中しているという、野球場でしかできないスタイルを作り上げたからだ。

参加者数は、九月十九日に行なった明治公園での集会の方が多かったが、会場の一体感という意味では、今回の集会の方が上回っていた。

一方、このような成功の裏には紆余曲折もあった。主催側などには、「放射線量が高い郡山で集会をやるなんて、被ばくをしに来いということか」「三月十一日という鎮魂の日に、デモなんてやるのは不謹慎だ」などという否定的なメッセージも届いていたのだ。このような批判があつたにもかかわらず、素晴らしい集会にすることができたのは、ある福島県民の声が象徴しているように。

「集会に対しては批判的な意見もあり、批判する人たちの言っていることも理解できる。しかし、私たちは黙って三月十一日を迎えるわけにはいかない」。

集会では、メインステージで多くの人がスピーチを行なったが、参加者に最も強烈な印象を与えたのは、大きな被害を受けている福島現地の人たちのスピーチであつた。会場内の静けさ、一体感は、表現しがたいものであつた。

「被災者ということ、様々なイベントにも招待されましたが、このような配慮や優しさは、自分が被災者であることを突きつけられるようで、辛いことでした。『がんばれ』という言葉も嫌いでした。時が経つにつれて、原発事故の人災とも言える側面が明らかになってきています。

原発がなければ、津波の被害に遭っていた人たちを助けに行くこともできたのです。それを見ると、怒りと悲しみで一杯です。人の命も守れないのに、電力とか経済とか言っている場合ではないはずです」という高校生のスピーチに、私は胸を打たれた。

集会後も、その高校生の姿を何度も思い返していた。

また、「3・11東京大行進」及び「3・11原発ゼロへー国会囲もうヒューマンチェーン」も、一万人を超える人びとが集まり、アクションを成功させることができた。

開催後によく耳にすることでもあるが、組織動員がなかった上に、郡山の集会に、首都圏からも多くの人が行ってしまった中で、これだけの人が集まったことはとても画期的なことである。

福島、東京、双方の状況を見ても分かるように、反原発・脱原発運動のうねりは、まだまだ続いており、勢いを持ったままだ。このようにアクションが成功したのは、福島では「オールフクシマ」という形で、今までの垣根を越えた実行委員会が中心となって開催できたこと、東京ではベテランの方がたが中心の、「3・11再稼働反対！全国アクション」(<http://nonukes.jp>)と、若者が中心の「首都圏反原発連合」(<http://coalitionagainstnukes.jp/>)が、協力体制をとって開催できたことが大きなポイントであったと思う。この「首都圏反原発連合」は、「素人の乱」の動きが以前ほど活発ではなくなった今、「素人の乱」のデモに参加していた若者たちの受け皿となっており、注目すべき動きの一つだ。デモのときの「サウンドカー」にしてもそうだが、四月六日の夕方に開催した首相官邸前における再稼働反対行動には、直前の案内だったのにもかかわらず、一、〇〇〇人も人が集まっている。ツイッターでの情報拡散が要因であろう。

もちろん、参加者の中心は二〇歳代から三〇歳代だ。

運動の拡大、脱原発社会に向けて

この盛り上がりは、現在の世論をはっきりと表している。大手新聞各社の調査では、再稼働反対の声が明らかに多いのだ。普段は保守的な意見が多い、某ウェブサイトの閲覧者のコメントにおいても、原発関連のニュースに対しては、「今の状況で再稼働なんて理解できない」というものが多い状況なのだ。

しかし、世論が盛り上がっているからといって、安心してはいけない。野田政権は、国民の意思を無視し、再稼働に向けた手続きを本格化させるなど、緊迫した状況が続いているのだ。

さらに、反対運動の盛り上がり比べて、運動に関する新聞報道がとても少ないことも、強調したい。政・財・官が一体となって原発再稼働を狙っている中にマスコミも組み込まれ、単なる御用新聞に近い存在に堕してしまっている。国民の知る権利に寄与し、国政を正しい方向へ導くという本来の役割とは、逆方向に進んでいるのだ。

ある運動家も言っていることだが、「今までの反原発運動は負け続けてきたが、今回は、負けるわけにはいかない。絶対に、勝たなければいけない」のである。

そのためには、さらに運動を拡大させ、政府の目の前に国民の意思を突きつけなければならぬ。そこで、今後必要になってくるのは、「オールフクシマ」や「3・11再稼働反対！全国アクション」と「首都圏反原発連合」のような連携体制を充実させることだと思う。しかし、

三月十一日のアクションは、全体的には成功したものの、それぞれの団体が反原発・脱原発という大きな目的のために、今後でも連帯して動き続ける必要がある。

また、現在、政府の再稼働の動きに対して、「再稼働反対！全国アクション」や、「首都圏反原発連合」などが主体となつて、それぞれ、首相官邸前や経産省前において、その都度抗議行動を行なっているが、同時に注目すべき行動は、福井県の中島哲演さんの断食に連帯して、三月三十一日から始まった、「原発いらない福島の人たち」によるリレーハンストだ (<http://onna10nin.sesana.net/>)。このリレーハンストは、一か所でハンストを行うのではなく、福島を中心に各地でハンストを行い、その動きを全国に波及させることで、全国から、再稼働反対の強い意思を表明するというものである。

「原発いらない福島の人たち」は、今までも経産省前の座り込みから始まり、様々なところで精力的に動いてきたが、今回も、再稼働に向けた動きにストップをかけるために立ち上がったのである。私たちは、経産省前や首相官邸前での抗議行動に参加し、運動を盛り上げるとともに、「原発いらない福島の人たち」のハンストを、リレーしていきたい。

「映画・「福島 六ヶ所 未来への伝言」」

「福島 六ヶ所 未来への伝言」という映画は、希望ある未来へのかけはしと成りうるのだ。監督は、島田 恵だ。

映画制作チーム・「六ヶ所みらい映画プロジェクト」について

島田 恵が監督を務める「福島 六ヶ所 未来への伝言」の制作は、「六ヶ所みらい映画プロジェクト」として、東京と青森の二つのチームに分かれて進めている。それぞれのスタッフは、島田が六ヶ所村で生活しているときに絆を深めたメンバーが中心に集まっているが、その他では、映画制作開始後にイベントなどで島田と知り合ってスタッフになった人もいる。私自身も反原発集会で島田と出会ってスタッフになった一人である。

「六ヶ所みらい映画プロジェクト」は、月に一度のペースで青森と東京においてそれぞれ制作会議を開催し、撮影の進捗状況の報告や今後の制作方針を協議しており、スタッフからは活発に熱のこもった意見が出るなど、とても有意義なものとなっている。制作会議以外でも、不定期に交流会(飲み会?)を開催し、交流会ならでは、とても斬新なアイデアが出ることも多いが、交流会開催の一番の効用は、島田が制作における自身の悩みを打ち明ける場になっていることではないかと思う。このように、スタッフ同士が、忌憚らない意見をおつけ合いながら制作を進めているのである。

スタッフは、主婦や自分の仕事を持っている人の集まりであり、ほぼボランティアという形で携わっている。そのため、会議の日程を調整するだけでもひと苦勞で、「その日は会社の会議があるから行けないかもしれない」とスタッフ全員が集まることはなかなか難しいが、その中でもホームページ作成など、自分の得意分野をそれぞれが発揮し、素晴らしいチームを作

り上げている。だからこそ、日頃のメーリングリストでの情報共有は、とても重要となっている。リアルタイムで青森と東京を繋ぎ、監督とスタッフを繋いでいるのだ。

制作費については、支援者からの寄付や基金からの助成金などでまかなっているが、やはりチラシを見た支援者からの協力金は、多大なる力となっている。その支援なくしては私たちの活動が成り立たないことは、スタッフ全員が常々実感していることだ。協力金に添えられてくる、「映画に期待しています」、「脱原発社会への一助となればと思います、年金の一部から出させていただきます。頑張ってください」などというメッセージは、本当に私たちの力の源となっている。

島田恵との出会い

恥ずかしながら、私は、今回の原発事故が発生するまで、「国内に原子力関連施設はいくつあるのか」「どのようなシステムで動いているのか」「どの役所のどの部門が管理をしているのか」など、知識がほとんどなかった。もちろん、原発運動が行われていたことは知っていたが、あくまで市民運動の一つという認識しかなかったのだ。しかし、原発事故の映像を見たことで、「これはとんでもないことになっている」との衝撃を受け、自分がこの問題にどのようにアプローチすべきか思い悩むに至った。まずは、書籍などで知識を得ようと試みたが、ある程度の知識は入ってくるものの、何かの物足りなさや限界を感じるようになった。そこで、「やはり外に出て自分の目で真実を見なければならぬ」との思いを強くし、時間のある限り

反原発集会や勉強会に足を運ぶようになったのである。

そのような手探り状態で動いている中で、ある反原発集会に参加した際に出会ったのが、島田恵なのだ。交流会の場において、「原発問題について勉強中である」と正直に言ったところ、島田が「若い人の話が聞きたい」と近づいてきてくれ、自分が写真家として六ヶ所村で生活していたことや、映画制作に乗り出したことの説明をしつつ、六ヶ所村の核燃問題の深刻さを、なまなましく話してくれた。その話は反対運動を行なっている人びとの話に終始するのではなく、どうして自治体が施設を受け入れなければならなかったのか、なぜ、反対運動から離脱して、賛成派になってしまった住民がいるのか、ということを下寧に説明してくれたのだ。

このように、経験を基に広い視野を持って、核燃問題、原発問題を捉えていることを知り、「自分がこれから原子力施設問題に向き合って行くときに必要なスタンスではないか」「過去に戻ることはできないが、この人を通して六ヶ所村の歴史を見たい」との思いで、島田と行動を共にすることに決めたのである。

私のように、原子力施設についての問題や現地の苦悩をまったく知らず、当たり前のように電気を使い、電力会社に料金を支払ってきた若者がほとんどだと思う。また、六ヶ所村にある施設は原発ではなく、原発で発生した使用済み核燃料を取り出すための「再処理工場」であることすら知らない人も多いはずだ。

今回の原発事故で原子力施設に対する矛盾に気がつき、目覚めた若者たちも多いとは思いますが、まだまだその問題から目を背けている人、無関心な若者は多い。やはり問題に気がつくことの

できる環境が大事なのだ。だからこそ、自分の生活にある矛盾、家族内の苦悩などについて、混沌とした社会のシステムの中で必死に生きること強いられる私たちと同じ目線で伝えてくれる、『福島六ヶ所未来への伝言』という映画があるのだ。

上から目線でも、卑下しているわけでもなく、ただ生活者として同じ立ち位置にいてくれる、映画のつくり手島田恵。映画を見ている人の中に、自然と溶け込んでいくだろう。

監督・島田恵について

島田恵は、六ヶ所村に核のゴミが押し付けられることに、強い疑問を感じ、一九九〇年から二〇〇二年まで六ヶ所村に住み続け、写真家として核燃問題を伝え続けた。しかし、その後、映像でも問題を訴えたいとの一心で、映画の制作に着手したのだ。

「映画の撮影なんて、まったく経験がない。ただ映像でもこの現実を伝えたいだけ」と本人が言うように、本当に手探りの状態から始まった。

私が制作スタッフとして動き始めてから感じたことは、制作スタッフを始めとする島田の支援者たちは、本当に熱心な人たちが多いということである。他の映画監督や運動家たちと比べるわけではないが、これだけの人を集められるのはどうしてか、自分自身もこの人に惹かれるのは何か考えてみた。やはりそれは島田の一番の特徴である十二年もの間、現地で生活をしてきたという実績と「写真だけではなく映像でも伝えたい」という飽くなき向上心、またその気持ちの純粹さであろう。

月並みの言葉ではあるが、滲み出てくるとてつもない人間的魅力なのだ。

制作の過程では様々な意見があり、その中には批判的な意見もあるが、島田はそのすべてを受け入れて、自分の中で消化し、作品の中に活かそうという前向きな姿勢がはつきりと見える。島田が自分に向けられた厳しい意見に対して不満を言っているところを見たことがない。

この魅力については、島田が撮影した写真を見て感じたことがある人も多いのではないかな。

「私は風景写真を撮るのが好きなの」と本人は言っているが、私は島田の人物写真が好きだ。島田の写真を見るたびに、写真自体に見入ると同時に、被写体を撮影するためにカメラを構えている島田の姿を無意識に想像してしまう。

「静かに怒りを燃やす東北の鬼」

そんな魅力ある島田が監督を務める映画の特徴について、本人の発言から、その特徴点を見てみたい。

第一点は、

「集会やデモなどで声をあげ、怒りを表現することはもちろん大事。でも、私の映画ではそういう場で怒りを表現することができない人たちの思いを伝えたい。それは、類ちゃん（武藤類子さん）が九月十九日の集会で言っていた『私たちは静かに怒りを燃やす東北の鬼です』という言葉が象徴している」

大きな反対運動では気持ちを表現できない、ひとりひとりの人間にスポットをあてようとし

ていること。

第二点は、

「これからの時代を背負っていくのは、若い世代だ」

次の世代へのメッセージを表現しようとしていること。

第三点は、

「青森県民だって、黙って核燃施設を受け入れたわけではない。しっかりと反対運動はある」
今まで潰され続けた反対運動を、リアルに伝えようとしていること。

この三つが、映画の特徴であると思う。

プロモーション映像放映会の様子

三月十日に、十一日の大集会の前段イベントとして行われた「原発いらない！地球いのちの集い」において、映画「福島 六ヶ所 未来への伝言」のプロモーション映像を流すことができた。

本腰を入れて作ったプロモーション映像を放映するのは初めてであったため、スタッフとしては、放映自体がうまくできるのか、参加者がいるのか、と心配しつつ、会場の準備をしていた。

しかし、そんな心配をよそに、会場には席を増設しなければならぬくらいの人が集まってきたのだ。

島田からの、「まずは映像を見てください」との言葉で放映を開始。

実はこのプロモーション映像は、直前まで作っていたため、私たちスタッフも見ることがなく、「いったいどんなものになっているのか」といった状態だったのだ。プロモーション映像は約三〇分。福島第一原発事故後にゴーストタウン状態となった町の様子、中でも残されたままの三月十一日付けの新聞、行き場をなくした動物たちの映像が、ガイガーカウンターのアラーム音とともに映し出されているのは、印象的であった。

その後は、前述した映画の特徴である、ひとりひとりの人間に、スポットが移る。郡山の農家の方の、「私の米を、安全と言ってしまっているのか」との葛藤、自主避難をしている家族の、「自分たちだけ避難していいのか」との苦悩を、とてもリアルに描いている。何年もの間、継続して行なっている弘前の母親たちによるデモと、その母親たちの座談会の様子も、印象的であった。

そして、「未来への伝言」を象徴するように、赤ちゃんのカットで、放映時間の三〇分はあっという間に経過し、プロモーション映像の放映が終了すると、会場内は歓声とも言えない表現しがたい、ある種異様な雰囲気に含まれていた。

参加者の表情から察するに、感動とともに、「もつと見せてくれ」という気持ちが強かったのではないかと思う。私を含めたスタッフも、完全に、映像に見入ってしまった。

最も印象に残ったのは、その後の質疑応答であった。

参加者からは、「BGMの音をもっと小さくした方がもったいい」「島田さんの写真は、とても素晴らしいので映画の中でもっと写真を使ったカットを入れるといいのではないか」などと何人もの人から積極的な意見が出たのだ。

私自身、「よかったです」「感動しました」などと、一般的な意見があるくらいだろう、と考えていたため、こんなにも積極的な意見が出たことで、参加者の方たちが、本当に真剣に映画のことを考えてくれていることを、肌で感じる事ができた。

多くの厳しい意見を聞くことができたことで、「スタッフだけが勝手に感動しているだけではだめなのだ。まだまだ満足してはいけない」との思いを強くできたことが、今回の企画の一番の収穫であったかもしれない。

このような作品を作り上げることができるのは、島田が、今回の原発事故を機に動き始めたのではなく、何年も前から問題意識を持ち、十年以上も六ヶ所村で核燃問題に向き合った経験から、無力感や未来への希望を強く感じ続けてきたからだと思う。

『福島六ヶ所未来への伝言』は、現在、総力をあげて制作中であり、今秋に公開予定である。多くの人に作品を見ていただき、島田恵という人間の魅力を、より多くの人に感じてほしい。また、嬉しいことに、島田は、「今回の映画だけでは伝えきれない。まだまだ伝えたいことがたくさんある」と、意欲を燃やし続けている。

島田恵には、クランクアップは存在しない。

「公開に向けて」

五月十九日に相模原市において、島田 恵の講演会とプロモーション映像の上映会を行うことが決まっています。

今後は、様々な団体において、このようなプロモーション活動を行なっていきたいと考えているため、勝手なお願いではありますが、「集会などでプロモーション映像を流すことができる」という方がいらっしゃれば、左記まで連絡をしていただきたいと思います。

なお、「福島六ヶ所未来への伝言」のタイトルは、現時点では「仮題」となっています。映画完成後の上映方法についても調整中のため、正式決定後は、映画のタイトルも含め、ホームページなどでお知らせする予定です。
ご了承下さい。

【連絡先】

「福島六ヶ所未来への伝言」

<http://www.rokashomirai.com/>

070・6523・8559 (担当：宮城)

NEWS IN FOCUS

ARSENIC Scientists seek the source of contaminated groundwater p.437

GLOBAL HEALTH Researchers raise questions over malaria vaccine p.439

STEM CELLS The bright side of Europe's lamented patent ruling p.441

NEUROSCIENCE The shortage of children's brains in research p.442



The Fukushima accident led to mass evacuations from nearby towns such as Minamisoma.

NUCLEAR DISASTER

Fallout forensics hike radiation toll

Global data on Fukushima challenge Japanese estimates.

BY GEOFF BRUMFIELD

The disaster at the Fukushima Daiichi nuclear plant in March released far more radiation than the Japanese government has claimed. So concludes a study¹ that combines radioactivity data from across the globe to estimate the scale and fate of emissions from the shattered plant.

The study also suggests that, contrary to government claims, pools used to store spent nuclear fuel played a significant part in the release of the long-lived environmental contaminant caesium-137, which could have been prevented by prompt action. The analysis has been posted online for open peer review by the journal *Atmospheric Chemistry and Physics*.

Andreas Stohl, an atmospheric scientist with the Norwegian Institute for Air Research in Kjeller, who led the research, believes that

the analysis is the most comprehensive effort yet to understand how much radiation was released from Fukushima Daiichi. "It's a very valuable contribution," says Lars-Erik De Geer, an atmospheric modeller with the Swedish Defense Research Agency in Stockholm, who was not involved with the study.

The reconstruction relies on data from dozens of radiation monitoring stations in Japan and around the world. Many are part of a global network to watch for tests of nuclear weapons that is run by the Comprehensive Nuclear-Test-Ban Treaty Organization in Vienna. The scientists added data from independent stations in Canada, Japan and Europe, and then combined those with large European and American caches of global meteorological data.

Stohl cautions that the resulting model is far from perfect. Measurements were scarce in the immediate aftermath of the Fukushima

accident, and some monitoring posts were too contaminated by radioactivity to provide reliable data. More importantly, exactly what happened inside the reactors — a crucial part of understanding what they emitted — remains a mystery that may never be solved. "If you look at the estimates for Chernobyl, you still have a large uncertainty 25 years later," says Stohl.

Nevertheless, the study provides a sweeping view of the accident. "They really took a global view and used all the data available," says De Geer.

CHALLENGING NUMBERS

Japanese investigators had already developed a detailed timeline of events following the 11 March earthquake that precipitated the disaster. Hours after the quake rocked the six reactors at Fukushima Daiichi, the tsunami arrived, knocking out crucial diesel back-up generators designed to cool the reactors in an emergency. Within days, the three reactors operating at the time of the accident overheated and released hydrogen gas, leading to massive explosions. Radioactive fuel recently removed from a fourth reactor was being held in a storage pool at the time of the quake, and on 14 March the pool overheated, possibly sparking fires in the building over the next few days.

But accounting for the radiation that came from the plants has proved much harder than reconstructing this chain of events. The latest report from the Japanese government, published in June, says that the plant released 1.5×10^{16} becquerels of caesium-137, an isotope with a 30-year half-life that is responsible for most of the long-term contamination from the plant². A far larger amount of xenon-133, 1.1×10^{19} Bq, was released, according to official government estimates.

The new study challenges those numbers. On the basis of its reconstructions, the team claims that the accident released around 1.7×10^{19} Bq of xenon-133, greater than the estimated total radioactive release of 1.4×10^{19} Bq from Chernobyl. The fact that three reactors exploded in the Fukushima accident accounts for the huge xenon tally, says De Geer.

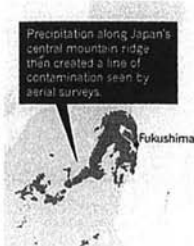
Xenon-133 does not pose serious health risks because it is not absorbed by the body ▶



WWW.NATURE.COM/JAPANQUAKE

RADIOISOTOPE RECONSTRUCTION

After a massive earthquake and tsunami hit Japan on 11 March, three reactors at Fukushima Daiichi blew up and a fourth caught fire. A reconstruction now shows how radioisotopes streamed from the plant and swept across the country.



SOURCE: IAEA, JAEA

► or the environment. Caesium-137 fallout, however, is a much greater concern because it will linger in the environment for decades. The new model shows that Fukushima released 3.5×10^{16} Bq caesium-137, roughly twice the release from Chernobyl. The higher number is obviously worrying, says De Geer, although ongoing ground surveys are the only way to truly establish the public-health risk.

Stohl believes that the discrepancy between the team's results and those of the Japanese government can be partly explained by the larger data set used. Japanese estimates rely primarily on data from monitoring posts inside Japan, which never recorded the large quantities of radioactivity that blew out over the Pacific Ocean, and eventually reached North America and Europe. "Taking account of the radiation that has drifted out to the Pacific is essential for getting a real picture of the size and character of the accident," says Tomoya Yamauchi, a radiation physicist at Kobe University who has been measuring radioisotope contamination in soil around Fukushima.

Stohl adds that he is sympathetic to the Japanese teams responsible for the official estimate. "They wanted to get something out quickly," he says. The differences between the two studies may seem large, notes Yukio Hayakawa, a volcanologist at Gunma University who has also modelled the accident, but uncertainties in the models mean that the estimates are actually quite similar.

The new analysis also claims that the spent fuel being stored in the unit 4 pool emitted copious quantities of caesium-137. Japanese officials have maintained that virtually no radioactivity

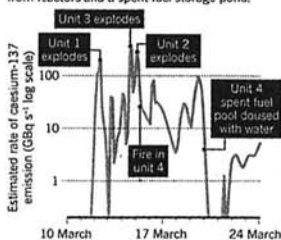
leaked from the pool. Yet Stohl's model clearly shows that dousing the pool with water caused the plant's caesium-137 emissions to drop markedly (see 'Radiation crisis'). The finding implies that much of the fallout could have been prevented by flooding the pool earlier.

The Japanese authorities continue to maintain that the spent fuel was not a significant source of contamination, because the pool itself did not seem to suffer major damage. "I think the release from unit 4 is not important," says Masamichi Chino, a scientist with the Japanese Atomic Energy Agency in Ibaraki, who helped to develop the Japanese official estimate. But De Geer says the new analysis implicating the fuel pool "looks convincing".

The latest analysis also presents evidence that xenon-133 began to vent from Fukushima Daiichi immediately after the quake, and before the tsunami swamped the area.

RADIATION CRISIS

Modelling the first week of the Fukushima disaster reveals that huge bursts of radioisotopes poured from reactors and a spent-fuel storage pond.



This implies that even without the devastating flood, the earthquake alone was sufficient to cause damage at the plant.

The Japanese government's report has already acknowledged that the shaking at Fukushima Daiichi exceeded the plant's design specifications. Anti-nuclear activists have long been concerned that the government has failed to adequately address geological hazards when licensing nuclear plants (see *Nature* 448, 392–393; 2007), and the whiff of xenon could prompt a major rethink of reactor safety assessments, says Yamauchi.

The model also shows that the accident could easily have had a much more devastating impact on the people of Tokyo. In the first days after the accident the wind was blowing out to sea, but on the afternoon of 14 March it turned back towards shore, bringing clouds of radioactive caesium-137 over a huge swathe of the country (see 'Radioisotope reconstruction'). Where precipitation fell, along the country's central mountain ranges and to the north-west of the plant, higher levels of radioactivity were later recorded in the soil; thankfully, the capital and other densely populated areas had dry weather. "There was a period when quite a high concentration went over Tokyo, but it didn't rain," says Stohl. "It could have been much worse."

Additional reporting by David Cyranoski and Rina Nozawa.

1. Stohl, A. et al. *Atmos. Chem. Phys. Discuss.* **11**, 28319–28394 (2011).
2. www.kantei.go.jp/foreign/kan/topics/201106/taea_houkokusho_e.html
3. Chino, M. et al. *J. Nucl. Sci. Technol.* **48**, 1129–1134 (2011).

SOURCE: IAEA

MORE ONLINE

M. CASAL/AGÊNCIA BRASIL

TOP STORY



Brazilian scientists fight for cut of oil royalties
go.nature.com/r5h9ya

OTHER NEWS

- Finding puts brakes on faster-than-light neutrinos
go.nature.com/sid6x
- Mastodon fossil throws up questions over 'rapid' extinction
go.nature.com/ta711e
- California finalizes climate regulations
go.nature.com/7b6b6b

Q&A



A leading dancer and a Cambridge scientist discuss their collaboration
go.nature.com/scpht

H. GLENINGHAM

放射性物質はどのくらい放出された？

グローバルなデータは日本の推定に挑戦する。

Geoff Brumfiel

三月の福島第一原子力プラントの災害は日本政府が主張するより遥かに多くの放射能を放出した。世界中の放射能のデータを集めて付け合わせる研究(1)は粉碎されたプラントからの放射能の規模と今後の運命を結論する。

その研究は日本政府の主張と違い、使用済み燃料棒を貯蔵するプールからの長寿命の環境汚染の¹³⁷Csの放出に重要な役割を演じた。その放出は迅速な行動により防げたはずである。その論文はオンラインで公開されている(1)。

Andreas Stohl, ノルウエイのシラーの大気研究所の環境科学者の解析は最も包括的な努力で“如何に多くの放射能が福島第一から放出されたかを理解するためになされた。

再現するために数十箇所の日本と世界にある放射能モニタポストを利用した。多くはウイーンの核実験禁止機構によって運用される核実験監視ネットワークである。

科学者はそれ以外にカナダ、日本、ヨーロッパのデータを加えた。そしてそれらをアメリカ、ヨーロッパの膨大な蓄積の気象データと結びつけた。

Stohlはそのモデルは完全とはほど遠いと注意する。福島第一に事故直後の測定が希薄であるからである。それは幾つかのモニタリングポストは強く汚染されて信頼できるデータを供給出来なかった。もっと重要な原子炉自体に何が起きたのかは、放射能放出の重要なポイントであるが、は謎に満ちていて永久に解けないだろう。何故ならチェルノブイリ事故から25年経つが推定には多くの不確実性が残っているである。

それにもかかわらず、この解析は事故の概略を示し、“全体的な視点と得られる全てのデータを使用した”と de Geer（スウェーデン）は言う。挑戦する数値

日本政府の解析では、

1. 3月11日の地震—そして、数時間後の原子炉の停止—津波の到着—そしてディーゼル発電機の冠水
2. 2-3日中に稼動していた3箇所の原子炉が加熱して水素を発生して水素爆発が起きる。

3. 第四原子炉から移送された核燃料プールに貯蔵された燃料は、3月14日に加熱して、次の2、3日は建屋内でスパーク発火して延焼していた。

しかしこの再構築された解析では、もっと厳しい指摘がされている。日本政府は、 $^{137}\text{-Cs}$ は 1.5×10^{16} Bqと気体の $^{133}\text{-Xe}$ は 1.1×10^{19} Bqの放出である。

この論文では $^{133}\text{-Xe}$ は 1.7×10^{19} Bqでチェルノブイリでの推定 1.4×10^{19} Bqを超える。 $^{133}\text{-Xe}$ は健康には、また環境には影響ないが何十年も影響のある $^{137}\text{-Cs}$ は 1.7×10^{19} Bqで政府発表の約2倍でありチェルノブイリの半分である。

この値は土地の汚染調査でもっと増加する可能性がある。このデータの違いは日本政府は日本に設置されたモニターポストを利用したのに対して太平洋を越えてアメリカ、ヨーロッパに達した放射能を考慮しているからである。同じ見解は神戸大学や群馬大学でも同一見解の学者がいる。

この解析では4号炉の使用済み燃料プールが多量の $^{137}\text{-Cs}$ を放出した。日本政府は放射能の放出はないと実質、言明しているがStohlのモデルでは冷却水を注入することによりプラントの $^{137}\text{-Cs}$ は急激に減少した。日本政府の見解はプールは見た目では大きい損傷がないから燃料プールからの放射能汚染はないとの立場を続けている。日本の原研のある科学者は政府見解を支持する。

最近の解析では $^{133}\text{-Xe}$ が地震直後に津波の到着前に福島第一から放出されている。この事は荒廃させた氾濫の前に地震そのものがプラントを破壊した事を示す。日本政府の解析では地震の揺れはプラントの基準値を越えていると認めている。

このモデルでは高い人口密度の東京に破壊的な影響を与えたかもしれない。最初の日には風向きは海の方であったが、3月14日午後には岸に向かった。 $^{137}\text{-Cs}$ の雲はある一帯の地域を包んだ。そして雨での沈下で中央山地と北西地域に高い放射能が観測された。幸運にも首都と人口密度の高い地域は乾燥した気候で“高い濃度の放射能が東京を流れたが雨が降らなかった”もし、降ればもっと悪い効果があっただろう(2)！

(1)Stohl等、Atmos. Chem. Phys. Discuss. 11, 28319-28394(2011)

(2)翻訳 三枝 三枝子 www.natureasia.com/japan/nature/specials/
抄訳 田澤 修一

横浜の学校施設から 高濃度放射性廃棄物

横浜市議 井上 さくら

横浜市立学校の施設から見つかった高濃度放射性廃棄物について、国の処理基準を超え、処理不能として、学校の地下で、現状のまま「保管」する、という報道発表がありました。

【概要】

横浜市立学校の雨水利用施設（屋上からの雨を貯めてトイレ洗浄水に使用）の「沈でん槽の沈砂から」最高16,800Bq/kgの放射性セシウムを検出（鶴見区の末吉小学校）。測定結果が分かったのは、昨年12月26日だったが、公表せず、3か月以上この沈でん槽を使った水を、児童らの使うトイレに流していました。

国が処理可能とする8,000Bqを超えるセシウムを検出したのは、同施設を使用する横浜市立学校44校のうちの18校。

処理不能のため「処理方法が国から出されるまで、学校の地下で現状のまま保管する」としています。

国の、大幅に緩い基準ですら処理できないほどの高濃度廃棄物が、子どもたちの日常生活の、すぐそばにあるということ、そして、それがわかってから3か月も事実を隠蔽したまま施設を使っていたという、横浜市教育委員会の感覚に唖然とします。

ご参考に、

記者発表資料(略)と、同施設使用の全校の測定データを添付します。

学校の雨水利用施設における雨水利用暫定停止について

雨水利用施設のある市立学校のうち 18 校において、沈砂から 8,000Bq/kg を超える放射能濃度が検出されたため、児童生徒への直接的な影響を調べるため、トイレの洗浄水や空間線量を測定したところ、洗浄水については不検出。空間線量については基準値以下でした。

ただし、沈砂を処分することができないため、水質保持等の観点から、当分の間、トイレの洗浄水については、雨水を利用せず、上水道で対応してまいります。

1 趣旨

(1) 経緯

本市の44校の市立学校では、雨水利用施設（建物の屋上から雨水を集水し、トイレの洗浄水として再利用する設備）があります。

これらの施設については、学校保健安全法に基づく学校環境衛生基準（文部科学省告示）により、年2回の水質検査を行うこととされており、水質維持のため、年1回の清掃を行っています。

清掃で出る沈砂は、汚泥として廃棄処分を行っています。廃棄物処分業者から、沈砂等の放射能濃度測定を求められたこともあり、測定を行いました。

(2) 沈砂の放射能濃度測定について

測定結果について、昨年12月26日（月）に報告書の提出があり、18校においてセシウム134及びセシウム137に係る濃度の合計値で8,000Bq/kgを超える値が検出されました。（最高値は、16,800Bq/kg）

(3) 児童生徒への直接的な影響について

児童生徒への直接的な影響を調べるため、新年の始業前までに（冬季休業中）洗浄水自体の放射能濃度及びトイレの便器付近（トイレ内洗浄水から1cm及び1m）の空間線量について、測定を実施しました。

1月5日に測定値が判明。44校すべてにおいて、洗浄水で放射性セシウム不検出。空間線量は周囲と同様の問題のない値でした。

水洗水自体の放射能濃度	不検出
トイレ内水洗水から1cmの空間線量	最大値 0.12 μ Sv/h
トイレ内水洗水から1mの空間線量	最大値 0.09 μ Sv/h

μ Sv（マイクロシーベルト）：放射線による人体への影響度合いを表す単位

Bq（ベクレル）：放射性物質が放射線を出す能力を表す単位

2 今後の対応

(1) 雨水利用から上水利用への切り替え

沈砂を廃棄物として処分できないことから、雨水利用施設の清掃が困難であり、大腸菌等一般的な衛生状態の維持に支障をきたす恐れがあるため、水質保持の観点から、当面の間雨水利用を中止し上水の利用に切り替えます。

(2) 放射性物質を含む沈砂の取扱い

8,000Bq/kgを超えている沈砂については、国の処理方法等（*）が示されるか、他に適切な処理方法が判明するまで、現状のまま沈砂槽で保管してまいります。（現在地下にあり、かつコンクリートと水で遮蔽されています）

8,000Bq/kgを超えていない沈砂についても、同様に、現状のまま、沈砂槽で保管してまいります。

【裏面参考】

【参 考】

*「平成23年3月11日に発生した東北地方太平洋沖地震に伴う原子力発電所の事故により放出された放射性物質による環境の汚染への対処に関する特別措置法」（以下、法という。）（平成23年法律第110号）及び同法施行規則

東京電力福島第一原子力発電所事故由来の放射性物質が8,000Bq/kgを超える廃棄物については、国（環境省）の責任において処理を行うとされ、その処理方針等が示され国に引き渡すまでの間は、同法及び同法施行規則の「指定廃棄物の保管基準」により、廃棄物の飛散防止、放射線障害防止、保管場所への関係者以外の立入り防止などを施すことになっている。

お問い合わせ先		
教育委員会事務局	教育施設課長 井上 秀	Tel 045-671-3230

～堆肥の放射能はどうなるのか～

公園における放射線対応について

東日本大震災から1年が経過しました。この間、公園においても、放射線測定をはじめとする取組みを行ってきました。

市民の皆様が御利用になる全ての公園について、子供がよく遊ぶ遊具周辺や、いわゆるマイクロスポットとなる可能性のある地点を中心に進めてきた放射線量（ガンマ線）の測定は、3月末で終了しました。

測定結果は市ホームページ

<http://www.city.yokohama.lg.jp/kankyo/park/sokutei.html>

で公表しています。

また、公園内の堆肥置き場の堆肥については、引き続き、公園内の花壇や植込み等で使用することとし、公園外では使用しないようにお願いします。

今後も、国・県の動向や状況の推移を注視しながら、皆様へ情報をお伝えしてまいります。

問合せ先：横浜市環境創造局 公園緑地維持課 活動推進担当

TEL：045-671-2650 FAX：045-633-9171

公園愛護会通信バックナンバー

<<http://www.city.yokohama.lg.jp/kankyo/park/aigokai/aigotsushin.html>>

番号	学校名	住所	汚泥(単位: Bq/kg)				水(単位: Bq/kg)				トイロ空間線量(単位: μSv/h)			備考
			Cs134	Cs137	Cs137	Cs134+Cs137	Cs134	Cs137	Cs137	Cs134+Cs137	100cm	1cm		
1	新鶴見小学校	鶴見区江ヶ崎町2-1	4600	6100	10700	ND(1.5)	ND(1.3)	ND	0.07	0.09				
2	末吉小学校	鶴見区上末吉一丁目9-1	7500	9300	16800	ND(1.4)	ND(1.4)	ND	0.07	0.08				
3	下野谷小学校	鶴見区下野谷町2-49	ND(1.7)	ND(1.7)	ND	ND(2.0)	ND(1.6)	ND	0.06	0.07				
4	青木小学校	神奈川区鶴巻町17	4100	5400	9500	ND(1.7)	ND(1.6)	ND	0.08	0.09				
5	西幸屋第二小学校	神奈川区西寺尾二丁目15-1	4300	5500	9800	ND(1.7)	ND(1.8)	ND	0.04	0.07				
6	立野小学校	中区立野76	3700	4800	8500	ND(1.9)	ND(1.6)	ND	0.05	0.07				
7	保土ヶ谷小学校	保土ヶ谷区神戸町129-4	5800	7800	13600	ND(1.7)	ND(2.3)	ND	0.05	0.08				
8	富士見台小学校	保土ヶ谷区岩井町307	ND(1.4)	ND(2.3)	ND	ND(1.7)	ND(1.6)	ND	0.05	0.07				
9	杉田小学校	磯子区杉田一丁目8-1	2000	2500	4500	ND(2.3)	ND(2.1)	ND	0.05	0.08				
10	能見台南小学校	金沢区能見台六丁目3-1	1000	1300	2300	ND(1.8)	ND(1.4)	ND	0.05	0.08				
11	北上小学校	港北区日吉三丁目23-1	5400	7100	12500	ND(1.7)	ND(1.4)	ND	0.06	0.08				
12	いぶき野小学校	緑区いぶき野14-1	3400	4300	7700	ND(1.9)	ND(2.3)	ND	0.07	0.09				
13	森の台小学校	緑区森の台13-1	3000	3800	6800	ND(1.5)	ND(2.1)	ND	0.07	0.10				
14	十日市場小学校	緑区十日市場町1392-1	2300	3100	5400	ND(1.4)	ND(1.6)	ND	0.08	0.09				
15	山下みどり台小学校	緑区北八朗町2031-3	4300	5200	9500	ND(2.0)	ND(1.5)	ND	0.06	0.08				
16	北山田小学校	都筑区北山田五丁目14-1	3500	4400	7900	ND(1.7)	ND(1.6)	ND	0.06	0.08				
17	茅ヶ崎台小学校	都筑区長坂13-1	2200	2900	5100	ND(1.8)	ND(1.8)	ND	0.07	0.07				
18	都筑小学校	都筑区中川六丁目2-1	4000	5200	9200	ND(1.8)	ND(1.8)	ND	0.08	0.10				
19	南山田小学校	都筑区南山田二丁目27-1	3600	4700	8300	ND(2.1)	ND(1.4)	ND	0.05	0.08				
20	つぎの丘小学校	都筑区荏田東一丁目22-1	3300	4500	7800	ND(1.8)	ND(1.8)	ND	0.09	0.10				
21	東山田小学校	都筑区東山田一丁目4-1	2500	3300	5800	ND(1.8)	ND(1.8)	ND	0.06	0.08				
22	茅ヶ崎東小学校	都筑区茅ヶ崎東二丁目11-1	3800	5100	8900	ND(1.6)	ND(1.4)	ND	0.07	0.09				
23	牛久保小学校	都筑区牛久保一丁目23-1	4000	5400	9400	ND(1.8)	ND(2.2)	ND	0.06	0.09				
24	川和東小学校	都筑区富士見が丘21-2	620	810	1430	ND(1.4)	ND(1.6)	ND	0.07	0.09				
25	住田西小学校	青葉区住田西四丁目5-1	3300	4300	7600	ND(2.4)	ND(1.8)	ND	0.07	0.11				
26	桂小学校	青葉区桂台一丁目4	3900	5200	9100	ND(2.2)	ND(1.4)	ND	0.08	0.09				
27	奈良の丘小学校	青葉区奈良二丁目29-1	ND(1.8)	ND(1.5)	ND	ND(1.6)	ND(1.3)	ND	0.09	0.11				
28	黒須田小学校	青葉区黒須田34番地1	1000	1300	2300	ND(1.7)	ND(1.8)	ND	0.07	0.08				
29	下郷小学校	戸塚区戸塚町2447-2	4100	5400	9500	ND(1.5)	ND(1.6)	ND	0.04	0.08				
30	緑園西小学校	泉区緑園三丁目39	2600	3400	6000	ND(1.3)	ND(1.8)	ND	0.08	0.12				
31	西が岡小学校	泉区西が岡三丁目12-11	2700	3400	6100	ND(1.5)	ND(2.1)	ND	0.06	0.08				
32	寛政中学校	鶴見区寛政町23-1	2100	2700	4800	ND(1.7)	ND(1.6)	ND	0.03	0.07				
33	緑井沢中学校	西区北緑井沢24	5200	6700	11900	ND(1.8)	ND(1.4)	ND	0.07	0.10				
34	神奈川中学校	神奈川区西大町141	2200	2900	5100	ND(2.0)	ND(1.8)	ND	0.04	0.07				
35	本牧中学校	中区本牧和台32-1	4600	5900	10500	ND(1.7)	ND(1.8)	ND	0.03	0.07				
36	岩井原中学校	保土ヶ谷区岩井町308	ND(2.4)	3.3	3.3	ND(2.0)	ND(2.1)	ND	0.06	0.07				
37	岩崎中学校	保土ヶ谷区桜ヶ丘二丁目6-1	3100	4100	7200	ND(1.7)	ND(2.0)	ND	0.05	0.07				
38	中山中学校	緑区寺山町653-21	ND(1.7)	1.7	1.7	ND(1.5)	ND(2.0)	ND	0.07	0.09				
39	十日市場中学校	緑区十日市場町1501-42	1600	2300	3900	ND(2.1)	ND(1.6)	ND	0.08	0.10				
40	東山田中学校	都筑区東山田2-9-1	5000	6400	11400	ND(1.9)	ND(1.6)	ND	0.06	0.08				
41	早瀬中学校	都筑区早瀬二丁目4-1	4300	5600	9900	ND(1.5)	ND(1.4)	ND	0.05	0.08				
42	あかね台中学校	青葉区あかね台二丁目8-2	1900	2400	4300	ND(1.7)	ND(1.6)	ND	0.09	0.11				
43	港南台ひの特別支援学校	港南区港南台五丁目3-2	ND(2.1)	ND(1.7)	ND	ND(1.7)	ND(1.4)	ND	0.05	0.09				
44	サイエンスフロンティア高校	鶴見区小野町6	ND(1.9)	ND(1.6)	ND	ND(1.3)	ND(1.4)	ND	0.04	0.07				

原発を引きずり走るリニア

リニア・市民ネット 懸樋 哲夫

福島原発の震災があつて、世の中は、ずいぶん変化したように見えるが、変わることの出来ないむきがある。リニア中央新幹線計画に国交省がGOサインを出し、昨春秋には沿線各地で説明会を開催して、建設を具体化し始めた。

リニアは高速ゆえに、巨大な電力の消費はどうしてもまぬがれないが、今後の日本列島の電力を消費することについて、可能なかどうか、検討もまったくないままだ。

推進するJR東海の会長は、「原子力損害賠償支援機構」の運営委員を務めており、「原発を再稼働させよ」と主張をしている人物だ。原子力村の中心では今はおとなしくしているかのようだが、JR東海経営者のような強力な出城によって固く守られている。

リニアの多くの課題は、電力浪費のほかにも、南アルプス、中央構造線に横穴を開けようとしていること、明らかにされない電磁波の測定数値、宮崎実験線の炎上事故のような技術的な課題、そしてJR東海の財政上の破綻も指摘されている。これらのリスクは、きちんと検証されたうえで推進されているだろうか？

国・省庁と深く結びつき、秘密主義で、利用者・住民無視、そして危険性を知って自らを省みることをしていないまま、「夢」を語って金をばら撒くという、これまでの原発推進と同じ図式になっている。

リニアの電力は 原発何基分？

「新幹線の40倍！ いや3倍」で論争

リニアが膨大な電力を消費することは、山梨実験線の建設前から指摘されていた。元国鉄技師の川端俊夫氏が朝日新聞論壇に「電力浪費の『リニア』再考を」「一人あたりでは新幹線の40倍」と書いた(1989年8月24日)。

これに対して推進側の鉄道総合技術研究所理事長だった尾関雅則氏により「リニアの電力浪費論は誤解―全消費量は新幹線の3倍で設計」と同じ朝日の論壇(同年9月4日)で反論した。

尾関氏は「川端氏のご批判は、すべて瞬間最大電力(kW)の数字から計算されており、全電力消費量について新幹線と比較しているものではありません。これは東海道新幹線の約3倍、航空機の約半分となります。」「現在、東京、中部、関西の三電力会社合わせて総発電能力9100万kWの発電所があります。その発電量は1日平均10億kWで、リニアモーターカーの全電力消費量は、その約0・6%に過ぎず、これがために発電所を新設することには、なりませ



ん。」と記している。

ピークか平均か

尾関氏の言い分を、今どき納得する人がいるだろうか。

発電所、電力設備の増設によって、電力需要をまかなうのはピーク電力であることは、特に福島原発事故以来常識となっている。

これについて山梨県立大学の伊藤洋学長は、以下のように語っている。

「ドイツでは失敗したとして撤退した、常伝導磁気浮上式リニアモーターカー『トランスラピッド』では、一両50人定員の車両で、最大電力容量は10 MWと発表されていました。これをJR東海リニアモーターカーに適用しますと、一列車32両連結（東海道新幹線定員1000人16両編成に合わせて）として、なんと320 MW＝32万kWとなります。仮に、朝のラッシ

ュアワーで全線に5列車、上下で10列車が走行しているようなケースを考え、これが同時に各駅を発車するような偶然が発生すると、320万kW、つまり原子力発電所3基分の容量の電力が必要になります。」

このような電力浪費について議論しようにも、

JR東海も、国交省の中央新幹線小委員会も、2011年に至るまで、リニアのピーク電力を公表していない。あくまで尾関氏以来の23年前から変わらぬ「全電力平均」で押し通そうとしている。

震災の2か月後、国交省中央新幹線小委員会が、最終的な報告書を公表した際にも、この電力問題は検証も議論もされていなかった。

原発再稼働の動きが止まらない中、その存在を前提とするしくみそのものを変える必要があるようだ。

ピーク電力は原発何基分か

——推論して原発2～5基分

JR東海が2011年5月に発表した、リニアの電力消費量は、

・約27万kW（東京―名古屋開業時、ピーク時…5本／時間、所要時間…40分）

・約74万kW（東京―大阪開業時、ピーク時…8本／時間、所要時間…67分）

・時速500km走行時の1列車（16両編成）の想定消費電力は、約3・5万kW

この数値は、「ピーク時」と書いていながら、本来の「スタート時のピーク」ではない。5本を平均してしまっているからである。

JR側の説明では、「停車している車両もあり」東京―名古屋間は40分なので、1時間あたりにするため、60分の40にしている」「3・5万kWとは平坦地走行中」とのこと。

つまり「5本を時間で均して表した数値」であることが明らかだ。最も電力の要する、発進時の瞬間最大電力は、隠されている。

不明のままのピーク電力の、本当の1編成のピーク電力を推論してみると、15万〜30万キロワットになる。1本が約30万kWとすると、往復10編成が同時に発進した場合は300万kW。これが東京―大阪で、たまたま16本同時に発進すると、 $(30 \times 16 = 480)$ 480万kWになる。「発進する本数が半分である」とすれば240万kWとなる。

（JRの計算は、平坦地走行中4、停車中2、発進2編成 $(3 \cdot 5 \times 4 + 30 \times 2 = 74)$ か？

偶然、同時に発進するのが何本になるのかの計画設計によって違いが出ることになる。しかし、原発2基分〜5基分に相当するということは間違いない。

〈新幹線の3倍〉とはピーク電力にあらず

「リニアの電力は新幹線の3倍」とJRなどが説明している。しかし、これも、走行中の電力のことを論じているもので、「瞬間最大電力」の話ではない。

「瞬間最大電力は30万kW」の推論が正しいとすれば、リニアの電力は、新幹線（0・9万kW、発進時と走行時は変わらないと見て）に対して33倍となる。「一人当たり」の計算を入れれば43倍だ。それは、輸送力が小さいということの意味するが「原発何基分が必要か」という議論とは、別の話になる」

1991年当事の資料では、1人あたりにすると、「リニアは、新幹線の28倍の電力が必要」との計算もある（JR総研元研究員菅波任氏）。

JR東海がピーク電力を示さないのは、あるいはピーク電力はもつと大きいからなのか、そもそもエネルギー浪費の議論をしたくないのか、どちらだろうか、わからない。

シールドを最大限に施したときの重量での場合はどうか、さらに発進を5本のうち1本のみとしているのも可能なのかも不明だ。いずれにせよ、「リニアは新幹線の3倍の電力」とは誤りであり、まやかしののである。3倍にしても大変な浪費だが、「節

電が叫ばれている時代になっても、何も変わらない」とは、このことだ。

JR東海葛西会長「原発継続しか活路はない」発言——原発とリニアの深い関係

リニアを推進するJR東海の葛西会長は、2011年5月24日、産経新聞に、「原発を推進すべき」とする主張を掲載している。その中に、「原子力を利用する以上、リスクを承知のうえで、それを克服・制御する国民的な覚悟が必要である。」さらに、「稼働できる原発を、すべて、政府の責任で速やかに稼働させるべきだ」とも書いている。

私たち「リニア・市民ネット」は、原発とリニアがセットで推進されているとして、「NOー浜岡NOーリニア」シンポジウム」を10月23日、東静岡のグランシップにて開催、約220名が参加した。この集会の最後に、JR東海葛西会長の、「この発

JR東海 葛西会長の「原発継続しか活路はない」発言に抗議する声明

東海旅客鉄道株式会社 代表取締役会長 葛西 敬之殿

あなたは、今年5月24日、産経新聞に原発について推進すべきとする主張を掲載しています。その中に「原子力を利用する以上、リスクを承知のうえで、それを克服・制御する国民的な覚悟が必要である。」とあります。さらに「稼働できる原発をすべて、政府の責任で速やかに稼働させるべきだ」とも書いています。

福島第一原子力発電所は、3月11日の大震災の事故の後、今なお危険な状態が続き、膨大な放射性物質を福島県内はもとより、日本中、世界中に排出し続け、多くの避難民を作り出して不安を惹き起こしています。農業、漁業に大打撃を与え、家族を引き裂き、何も責任のない子どもたちにまで大きなリスクを背負わせてしまいました。故郷へ二度と帰ることのできない人々もいるのです。日本の将来にも暗い影を落とし、会社経営をする方にとって最も重要な関心事のはずの日本経済にも不安を与えているではありませんか。

政府は真実を伝えず、被災者を棄て去るかのごとき対応に終始しています。そしてこの災難は人の命の時間からすれば、永遠とも言える年数続いていくことになるのです。

これらの人々たちに向かって「リスクを覚悟しろ」と今言えますか？

この原子力災害の解決のない状態で「すべての原発を稼働させよ」とは、誰に向かって言っているのですか？

鉄道事業で乗客の命を預かる総責任者の方が、このような人命軽視の理念で経営をしているのであれば、安心してJR東海の電車に乗ることはできない、と言わざるをえません。

ましてリニアのような超高速鉄道に「リスクを承知して」乗ることはできません。リニア中央新幹線計画が膨大な電力を要し、原発の電気を使うという目的のもとに「原発推進」を唱えるのであれば、今こそリニア計画を白紙に戻すことが求められなければなりません。

このままでいけばあなたは人の命を軽視する経営者として鉄道史にその名を残すことになるでしょう。また、未来の子どもたちの命に対してまったく責任を感じない人間として汚点を残すことになるでしょう。もしこれを望まないのであれば、

- 1、ただちに「原発推進」の自説を撤回すること
- 2、「リスクを覚悟せよ」発言について福島県民を初めとする被災者に向け真摯に謝罪すること
- 3、リニア計画を白紙撤回すること

以上決断されることを求め発言に強く抗議します。

「10.23シンポジウムin静岡 NO!浜岡NO!リニア 参加者一同」

代表：川村 晃生

言に抗議するべき」という意見が出され、急きょ「抗議声明」を作成。満場一致で採択し、シンポジウム参加者一同の名前で、会長宛に送った。

原発とリニアとの深い関係は、JR東海会長による「原発推進」ばかりではない。「夢の……」などというフレーズ、そして情報の出し方、柏崎原発から大月まで100万ボルト送電線は、すでに完成している。人間には制御が不能になる巨大な技術、スビード、無駄な公共事業に国費投入など、すべてが共通している。そして人命軽視という点でも、同様なことに、電磁波問題がある。

人命軽視の電磁波問題

鉄の磁界シールド 厚さ、重量、効果も不明。
あくまで隠す理由は？

リニアは磁気力により走行するため、乗客のい

る車内空間にも、強い磁界が生じる乗り物。以前の報告によれば、実験線の場合、床上で6000〜4000マイクロテスラ（※）（国立環境研究所、平成17年）にもなる。

高圧線など電力設備の電磁界については、「0・4マイクロテスラの居住環境で小児白血病が2倍とする報告」が日本でも出されており、海外でも、繰り返し同様のリスクを示す報告がされている。リニアの磁界はその1万倍にもなる強さだということになる。

しかし、リニアの強い磁場について、JR東海は山梨実験線の計測値をまったく明らかにしていない。そして当然ながら、そのリスクについても検証しようとした形跡もない。

2011年9月『環境影響評価方法書』の中にある「磁界の発生」の説明は、「磁気シールドにより磁界の影響を低減する」という、中身の無いもの。磁界シールドについては、その材料の厚み、重量、そして

国立環境研究所の平成17年の報告では実験線の床上で600~4000 μ T

車内床上（モータ直上）	……max600 μ T
車内床上（リアクトル直上）	……max4,000 μ T
リニアモータ直下5cm	……max70,000 μ T
リニアモータ直下15cm	……max20,000 μ T

この時点から5年も経過しているのでこの数値が「技術開発」でどこまで低減されたのだろうか。

肝心の、どれだけ遮蔽効果があつたのかの数値もいっさい書かれていない。国土交通省中央新幹線小委員会が2011年5月にまとめた報告に、「これまでの技術開発の結果、車体への磁気シールドの設置など、磁界の低減方策を取ることににより、磁界の影響を国際的なガイドライン^(*)を下回る水準に抑制することは可能……」と書き、意味不明の折れ線グラフだけが載せられている。

ICNIRPとは、

ICRPから生まれた組織だ。原発などの放射線の基準値も、原子力の業界のために設定されていることは、今は周知のこととなっている。ICNIRPも、つまり電力業界などのために基準を作る組織である。

※1mG=0.1 μ T（マイクロテスラ）

1mT（ミリテスラ）=100G（ガウス）=10000ミリガウス
1G=1000mG（ミリガウス）
国際的なガイドラインとは、ICNIRP国際非電離放射線防護委員会のガイドラインのこと。

電磁波対策すると、電力消費が増加

10月にJR東海に質問し、ようやく答えを得たのは、シールド材が「鉄である」ということ。そして「基準値の達成が可能な技術が確立している」ということ。つまり、「しっかりシールドして、とりあえず基準値をクリアできたときの車体の重さは、発進時の電力の消費量を引き上げてしまうので、軽いシールドにして、電力を低く設定することも可能だ」ということを意味している。基準値をクリアできた

というだけでも問題はあり、最低限数値で議論されるべきところだろう。

電力消費と磁界、この相容れない二つの課題があるから数値は公表されない。「公表したら大変な問題がばれてしまう。安全性の議論も避けて通りたい」ということだろう。このような交通事業者が我々の命を握っている。まるで原発問題そのものではないか。

遮蔽効果は、どのくらいか 実験線の『磁場測定結果』

山梨実験線の建設がまだ始まる前のこと、90年初めごろに山梨で記者発表された「車内磁場測定結果」の資料がある。宮崎実験線でのデータだと思われるが、遮蔽板を使用した場合と、しない場合とが記されている。

車両中央部の座席上で、遮蔽しない場合、 $0 \cdot 096 \text{ mT}$ ということは、 $96 \mu\text{T} \parallel 960 \text{ ミリガウス}$ となっている。これを遮蔽した場合、 $0 \cdot 064 \text{ mT}$

($64 \mu\text{T} \parallel 640 \text{ ミリガウス}$) に減っているが、桁は同じで3分の1を減らすのがせいぜいだとわかる。

車内で最大なのは、台車近くの座席では $2 \cdot 697 \text{ mT}$ ($\parallel 2697 \mu\text{T} \parallel 2 \cdot 897 \text{ ガウス}$) で、これを遮蔽すると $0 \cdot 382 \mu\text{T}$ ($\parallel 382 \mu\text{T} \parallel 3 \cdot 82 \text{ ガウス}$) に減少することだから、7分の1になったことになる。これらの数値が山梨実験線でどのように変化し、低減されたのか、あるいは同様なのか、変動磁界の値は？——その後の測定値は隠されたままなのだ。

電磁波のリスク $0 \cdot 4$ マイクロテスラで 小児白血病増

2001年、WHOの下部機関、国際がん研究機関 (IARC) は、「電力周波数 (50 Hz か 60 Hz) の居住地での超低周波磁場強度が $0 \cdot 4$ マイクロテスラを超えると小児白血病のリスクが倍増する」ということには、統計的に一貫した関連性が強く見出さ

れているとして「発ガンの可能性あり」と認めたことを発表した。それ以後も、いくつもの疫学研究がされており、それらから、IARCは高圧線などの電力設備による電磁波の健康リスクについて「発ガンの可能性がある」と認定したものである。

日本での文部科学省の予算で実施された国立環境研究所の研究報告は、 $0.4\mu\text{T}$ 以上の被曝で小児急性リンパ性白血病が2.73倍、小児脳腫瘍が10.6倍にもなっていた、というものだった。この報告は、2006年8月に、国際的な専門誌「インターナショナル・ジャーナル・オブ・キャンサー」に掲載された。07年6月には、WHOの環境保健基準でもその内容が詳しく報告されている。

しかしその結果について、文部科学省は葬り去ることをしてきた。この経緯については、松本健造著「告発・電磁波公害」に詳しい。また、読売新聞（2006年11月19日）にも、「葬られた疫学からの警鐘」として解説されている。

経済産業省・原子力安全保安院は、2011年3月31日に「電気設備に関する技術基準を定める省令」を改正。高圧線、変電所など、電気設備から生じる超低周波磁界の規制値を、200マイクロテスラ(μT)以下と定めた（2011年10月施行）。当初の予定を2倍に緩めたもので、これが、磁界の人体への安全性についての日本で初の安全基準となるものだ。電力業界の広報組織「電磁界情報センター」が保安院のお墨付きをもらって隠蔽を引き継いでいる。

『脱原発世界会議』で、 発送電分離の方法を提案

「リニア問題は原発問題だ」との認識から、1月14日、15日、横浜で開催された『脱原発世界会議』に、「リニア・市民ネット」も参加した。『発送電分離プロジェクト』と共同で、イベント企画とブース展示を行ない、リニアの電力浪費問題、そして発送電分

離の方法について提案を行なった。

世界会議の準備の過程で「発送電分離プロジェクト」

ト」内で議論の末にまとめた提案は、次の通りで、送電線の電磁波問題にも言及している。

発送電分離の形態と方法に関する提案と議論

- (1) 電力事業者は原発稼働を中止し、第三者機関が電力事業の管理運営を監査すべきである。第三者機関は、従来の電力事業の権益から離れた立場にある担い手に委ねられるべきである。
- (2) 「原発に依らない」電力を供給する新規事業者の参入を拡大させるためには、発送電を分離させ、送電網への接続コストの適正化をはかるべきである。
- (3) 電力網の広域化ではなく「電力の地産地消」を可能にさせる仕組みづくりをすべきである。送電網の広域化と不可分の高圧線・変電所が生じる電磁界のリスクを無視しないこと。また、より小さい規模（エリア）での電力の自律的需給ネットワークの構築を模索すべきである。
- (4) 独立した第三者機関は地域の送配電網の適正な管理・運営を実施し、また監視すること、さらに、自ら電力を作り、地域に供給することなど、その内容を地域住民主体で協議をすべきである。

発送電分離プロジェクト

「送電線設備のすべてを売却し、賠償に」 東電株主総会で『脱原発・発送電分離』

発送電分離を実現し、東電の独占体制を終わらせ、電力の自由化を行なって、原発を再稼働させないために、どうすべきなのか。

経済産業省の「電力システム改革専門委員会」で討議されているが、ここにまかせていて大丈夫なのか、という心配もある。私たち、消費者、市民として、できることは最大限行動して行きたいところだ。そのひとつに、東電の株主総会での提案がある。

『脱原発東電株主運動』は、20年におよび、株主総会で脱原発の提案をしてきた。昨年は400名を越える株主の共同提案で議案を出している。

今年は、特に、発送電分離を求めた提案が先陣を切るようになった。

「東電の所有するすべての高圧送電線、変電所、配電設備を売却し、福島原発事故の賠償支払いに充

てる」というもので、以下の内容を予定している。

第1号議案（福島原発事故の賠償支払いのための損失処理）

○議案内容

福島原発事故の賠償支払いにより、膨大な損失が発生したため、その損失処理として、次の固定資産を売却、および積立金を取り崩して損失補填に充てる。

- ・送電設備 2,092,329
- ・変電設備 828,786
- ・配電設備 2,153,975
- ・その他の電気事業設備 112,487
- ・使用済燃料再処理等積立金 982,696

合計… 6,170,273

※数字は平成22年度報告書記載の貸借対照表による。（単位…百万円）

○提案の理由

福島原発事故による膨大な額の賠償は、支払いが不可能であり、我が社は政府の支援を受ける状態にある。しかし、この損失を電気の利用者や納税者に負担を強いることで埋め合わせる立場にはない。

支援を受けることが独占企業体の存続のため、というのは許されない。事故を起こした隠蔽体質、コスト意識に欠ける独善的な体質などが変わらぬまま、損失処理を国民に依存すれば、その姿勢を問われ、国営化などをされかねず、株主の既存の権利さえなくなる懸念がある。

我が社が事業を継続するためには、徹底的に資産を売却し、早急に損害賠償の支払いを自力で行なうしかない。

売却資産は、送電、変電、配電の各設備すべて。また、使用済み燃料再処理など、積立金を取り崩す。合計約6兆円。これにより自ら送配電を分離して

独占状態を解消し、再処理をやめる。

我が社は国民に誠実に奉仕する一発電会社として、発電所の設備だけは所有することの許しを得て生まれ変わり、その存続を図る。

〈スマートグリッド〉は、本当に〈賢い〉選択か？ 米国のスマートグリッド事情

送電分離を進める過程で、「スマートグリッド」なるものが提唱されている。「スマートメーターを使って電力使用量を自動的に電力会社へ遠隔報告し、電力需給を双方向で調整する機能を持つ新しい電力網を構築しよう」というものだ。

送電分離の方法について検討している経済産業省の「電力システム改革専門委員会」でも、その中身はスマートグリッド、スマートメーターの推進で埋め尽くされている。

この「スマートグリッド」は、欧米でも進みつつ

ある。米国では、2007年に「スマートグリッド」の試験プロジェクトが始まり、オバマ大統領就任直後の2009年2月には、景気刺激策である「米国再生・資金再投資法」により、「スマートグリッド」に110億ドルを拠出する法案が通った。大規模な送電網の整備には、効率的な配送電による省エネ、再生可能なエネルギーの導入、関連事業の成長、それに伴う経済の活性化などが期待されている。

一方では、無線周波数電磁波を使うスマートメーターに対する健康影響への市民の心配は、高まっている。四六時中続く高周波暴露の累積を「安全である」と言い切ることができるのか？ 携帯タワーからの電磁波による健康被害も報告されているが、それはスマートメーターにおいても同じだ。

リアルタイムで家庭のエネルギーが公共事業会社に記録され、中枢にデータが集まると、プライバシーの侵害にもつながる。遠隔操作で動くシステムの信頼性の問題など、スマートグリッドは電気的不法

侵入の機会を生むことになりかねない。

カリフォルニアのある消費者は、スマートメーターを導入したら、一か月200ドルが600ドルと3倍になり、請求額の間違いを理由に、電力会社を相手に訴訟をおこした。「スマートメーターを取りつけてから電気器具に異常が頻発する」と訴える人たちもいる。メーターの爆発や火事の発生も報告されている。ニュージーランドでは、スマートメーターによる火災が2010年に422件も起きている。しかし、グリーン・ニューディール政策の一環で進められているスマートグリッドは、一見エコの顔をしているため、米国政府中枢部の期待は大きい。

米国政府は、スマートグリッドに巨額の投資をし、それは、公共事業会社、投資信託、メーター販売業、パテントオーナーなどを潤すことはできたが、納税者は、税金で設備負担を負うことになった。

米国では、すでに、バージニア州、フロリダ州、テキサス州、ニューメキシコ州の一部で、スマート

グリッドが稼働している。

カリフォルニアでは、PG&Gが、数百万のスマートメーターを家庭や職場に導入したが、2010年6月の時点で、カリフォルニア公共事業委員会には、2000件の健康被害と、1500件の健康以外の被害の訴えがあった。カリフォルニアの住民たちは反対運動を起こし、グループを作り、工事のトラックを阻止した。「電気を止める、と脅迫した」とされて逮捕された住民もいる。

多くのコミュニティが、行政の管理下から自治体の管理への移行を求め、PG&Eに旧式のメーターを残すように訴えている。30を超える地方自治体では、スマートメーターを禁止する決議や法律が可決された。その数は増える一方である。

日本でスマートグリッドは必要か？

2009年2月、当時の経済産業省の、望月晴文

事務次官は、記者会見で、「そもそも米国がスマートグリッドを進める最大の理由は、脆弱な、送電網のせいで、よく大停電が起きるからであり、送電網が整備されている日本では米国に追従する必要はないのではないか」と述べた。

電気事業連合会によると、2006年度の日本の年間事故停電時間が、1件あたり19分であるのに対し、米国では97分。米国は送配電網の整備を迫られていたのである。

また、米国では、発電会社が売る電気の料金が、30分から1時間単位で変動するシステムがある。

2000年夏から2001年にかけて起きたカリフォルニア州の電力危機は、発電会社からの電気の卸値が高騰したにもかかわらず、電力会社が小売値を上げられず、電力の需給関係が崩壊してしまったことに原因がある。そこで米国では、電力の卸値をリアルタイムで把握し、小売値に反映させてゆく必要があり、それがスマートグリッドの重要な目的の

一つでもある。

しかし、日本では電気料金の変動は、ほとんどの
いので、その点でもスマートグリッドの必要性は少
ない。

経済産業省も検討している発送電分離は、それら
を実現させるためとして、スマートグリッドの導入
を主張する声がある。

しかし、米国の現状を見ると、エネルギー消費の
増加、環境リスク、健康被害、プライバシーの侵害、
失業など、社会問題は増し、エネルギー市場がより
投機的になることによって、経済も破綻を来してい
る。

スマートグリッドは、一見、「環境にやさしい」
という顔を持ちながら、それは私たちの生活に多く
の「押しつけ」をすることになりかねない。

「送電線も広域化して電力の融通を図る」という
案も、うなずけない。

新たな技術や設備投資に依存しなければ生き残れ
ない原発を進めた、巨大な経済体質の延長のようだ。
その構造がリニアを求めるようなことにもつがる
のではないか。

新しいインフラにコストをかけずに、省エネと、
持続可能なエネルギー供給を、既存の電力網を活用
して実現する道はあるのではないか。

発送電分離は、スマートグリッドなしでも実現で
きるはずであり、そのほうが実は効率がいいのでは
ないかとも思われる。

脱原発の過程も、その先の電力設備も、命の基本
に帰り、本当にスマートなものにしていくように、
選択したいものだ。

参考…「夢から覚めたリニア」（リニア・市民ネット編）、
『がうす通信』



またしてもの放射能禍

堀場 清子

わたしは悲しむ

日本の国土と海との この広大な この深刻な
放射能汚染を

最初の悲劇は

米軍による広島・長崎への原爆投下だった

二万人余が被爆死したと伝えられ

いまでも多くの人が放射能障害に苦しむ

その後の半世紀に

列強により

五〇二回の大気圏内核実験が強行された
日本にも死の灰がつもった

チェルノブイリの原発事故により

約一〇〇ベクレルのセシウム137が降ったとき
核実験からきた約三〇〇ベクレルが
すでに 日本の土に残存していたという

そして今回の人災

福島第一原発過酷事故の 甚大さ
セシウム137の放出量は

広島原爆の一六八・五個分と報じられた
最高土壌汚染のセシウム合計値を
約三千万ベクレルと聞き驚く

「わたしは、ふつうの子供を産めますか？」
福島市の小学五年生の少女が



政府への手紙に書いた

原発政策を推進してきた責任者らは
どう答えるか

津波で壊滅した東北の漁村で

カキやホタテの養殖を再起すべく

苦闘する人びとの映像を見た

胸の奥で なにかの裂ける感覚があつた

辛苦の貝が育つたとして

その貝は汚染されてはいないか

汚染水の処理に窮した福島第一原発は

「低濃度」の汚染水一万一五〇〇トンを海に放流した

高濃度の汚染水も漏出した

地下水からも絶えず流れ出ていよう

海水で希釈されると東京電力は弁明するが

海流の動きは極めて複雑だと聞く

北上する黒潮に逆流し

海岸ぞいに銚子沖まで南下した汚染水の図表も見た
海へ放出された放射能の総量が

一・五京ベクレルとの発表に凍りつく

幾世代消えない毒物を生産し 放出して
あらゆる生命の母なる海を穢した

その罪の深さ――

放射性物質のどれほどかは

いつの日か 異国の岸に流れ着かないか

食物連鎖しつつ大洋を回遊する魚群は

他国の人々の健康にまで被害を与えはしないか

ひるがえって元の岸に打ち寄せ

深い痛手とならないか

まいにち おののく想いで生きている

沖繩という海は、今日も荒れています 浦島悦子

前回、本欄に書かせて頂いてからまだ二か月余しか経っていないのに、その間に、あまりにもめまぐるしくいろんなことが起こったために、まるで、遠い昔のことがようだ。沖繩という海は、ずっと荒れに荒れ続け、私たちは、その大波に揉まれ続けている。

前稿以来、辺野古アセス評価書に関する沖繩県環境影響評価審査会の集中開催と知事意見（飛行場建設事業部分について）の提出、住民らが原告となった辺野古違法アセス確認訴訟の集中審理、「アメリカへ米軍基地に苦しむ沖繩の声を届ける会」訪米団（沖繩選出

国会議員、沖繩県議、市町村議、市民団体など二四人）や稲嶺進・名護市長の訪米、宜野湾市長選における伊波洋一候補の敗北、国家権力による住民運動つぶしを狙った高江スラップ訴訟の不当判決、沖繩戦時の旧日本軍沖繩守備隊・第32軍司令部壕（首里城公園近く）の入口に説明板を設置するに当り、

有識者による検討委員会のまとめた説明文から「慰安婦」という文言や日本軍による住民虐殺に関する記述を（英訳部分については、沖繩戦の本質を表す「本土防衛のための」捨て石」という言葉も）沖繩県が一方的に削除した（検討

委員会の度重なる削除撤回・復活要求や県民の抗議をも顧みず）こと、朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）の「衛星打ち上げ」に備えるとして宮古・八重山へのPAC3（地对空誘導弾パトリオット）配備に向けた急ピッチの動き、辺野古アセス評価書の埋立事業部分につい

ての知事意見提出（三月二七日）、普天間基地周辺住民三、一二九人による第二次普天間爆音訴訟の提訴（三月三〇日。第一次訴訟の約八倍の原告）等々、並べるだけでも、ため息の出るのが沖繩の現状だ。加えて、日本政府が強引に進めようとしている震災がれきの広域

処理が、沖縄をも揺るがしている。

国民新党幹事長の衆議院議員、下地幹郎氏が環境省と一緒に県内各市町村を回って「受け入れ」を要請する裏には、廃棄物をめぐる莫大な利権がすけて見えるが、痛みを分かち合うのが沖縄の「ユイマール」精神だと、地元マスコミを含めた「受け入れ」圧力が強まる中で、原発被害を逃れて沖縄に避難・疎開してきた、幼い子どもを抱える母親たちは、危機感を募らせ、県民の中にも、疑問や反対の声が起こりつつある。

これらの全てに詳しく触れることは不可能だが、いくつかをピックアップして報告したい。

辺野古アセスで「環境保全は不可能」

昨年末、「夜盗の襲撃」にも似たやり方で、沖縄防衛局が沖縄県に提出した、辺野古アセス評価書について、沖縄県環境影響評価審査会は、一月十九、二七、三十一の三回にわたる審査を経て、二月八日、「環境保全は不可能」という、極めて厳しい答申を県に提出した。

評価書に住民意見を聞くことは法的に義務づけられていないが、評価書段階になって初めて「MV22オスプレイ」の配備が明記されたこと、滑走路の長さや飛行経路など、環境に著しい影響を与える変更が行われたことから、沖縄県は、県として独自に県民意見を受け、また審査会でも、住民代表十人が直接意見を述べる場を設ける、という異例の措置をとった。

私も、地元住民の立場から意見を述べさせてもらった。各回とも、県が一〇〇席用意した傍聴席は常に満席で、県民の関心の高さを示した。

一〇〇億円近い費用（国民の血税）をかけて、七〇〇〇頁に及ぶ評価書を作成しながら、その結論が、すべて「影響はない」か、あつても「最大限の回避・低減が図られている」と評価されていることに、審査会委員や住民から「結論ありきのアワ、ス、メント」「出来レース」「方法書・準備書・評価書と進むにつれて環境影響が軽減されるはずのアセス手続に逆行している」と、「ゼロオプシオンを含め、方法書手続からやり直すべきだ」という強い批判が続出した。「環境の保全上、重大な問題が

あると考えられ、……生活環境及び自然環境の保全を図ることは、不可能と考える」と、事実上の「レッドカード」を突きつけた答申は、傍聴席からの意見にも真摯に耳を傾け、住民の意見を最大限採り入れた審査会と、それに積極的に働きかけた住民・県民との共同作業の成果と言える。

審査会答申と同日、日米両政府は、在日米軍再編の見直しを共同発表した。これまで「パッケージ」とされていた普天間基地の辺野古移設と、在沖海兵隊のグアム移転及び沖縄島南部の米軍施設の返還を、辺野古移設の目処が立たないため、切り離して進めるというものだが、一方で、「辺野古移設の現行案を堅持する」とした。

仲井眞弘多知事が、二月二〇日、沖縄防衛局に提出した知事意見は、「地元の理解が得られない移設案を実現することは事実上不可能であり」、普天間飛行場の「県外移設及び早期返還」を求めてきた、とした上で、沖縄県環境影響評価審査会の答申に沿った形で、「環境の保全上重大な問題」があり、「生活環境及び自然環境の保全を図ることは不可能」と述べ、MV22オスプレイの配備に伴う影響、サンゴやジュゴンをはじめ自然生態系への影響など一七五件にわたって、問題点を指摘した。

(三月二七日には「埋立事業部分」についての知事意見が提出され、同様の結論を述べた上で、膨大な埋立土砂の調達先や運搬計画を示

さない政府に明示を求めるなど、四〇四件の問題点を指摘した。)

宜野湾市長選の思わぬ結果

翌二一日の『琉球新報』は、この知事意見によって「辺野古行き詰まる」「埋め立て承認不可能」という見出しを掲げたが、しかし、私たち地元住民の気持ちは、「安心」とはほど遠いのが現状だ。

その不安材料の最大のものは、二月十二日に投開票された宜野湾市長選の結果(自公推薦の佐喜眞淳氏が九〇〇票の僅差で伊波洋一氏に競り勝った)である。

私たち名護市民にとって、宜野湾市長選は、他人事ではなかった。予想もしていなかった安里猛前市長の病氣辞職による緊急の市長選

に、これまで次の県知事選をめざして活動していた伊波洋一元市長が、意を決して立候補してくださったことに敬意と安堵を感じると同時に、なんとしても勝利して欲しいと祈るような気持ちだった。宜野湾市長選の結果は、名護の基地問題に直接響いてくるからだ。

当初、地元マスコミは、「伊波氏先行」という見方だった。対する相手方は、並々ならぬ危機感を持って、必死の追い上げを図った。

佐喜眞候補自身が自転車で町を走るなどの、イメージ作戦を繰り広げると同時に、伊波氏に対する「出戻り」「市長になったら、次の知事選で、また辞職する」「普天間の危険性を放置し、売名と政治活動に利用している」「できもしない

公約を掲げ、市民を騙している」などのネガティブ・キャンペーンを張った。真部朗・沖縄防衛局長の選挙介入が問題になると、逆に、伊波氏を支持している宜野湾市職労を攻撃のターゲットにした。

選挙期間を通じて何より目立つたのは、仲井眞知事の佐喜眞候補に対する「入れあげ方」だった。批判も顧みず、知事が出席すべき公式行事を欠席してまで佐喜眞氏の応援に駆けつける熱意は、尋常ではなかった。六月の県議選を視野に入れ、宜野湾市長選を一つのステップにして、県議選における与野党逆転(与党多数)を実現しようと呼んでいることが、ひしひしと感じられた。

そして、彼の意中の人が市長に

当選した。

県議選で万が一、知事の思惑通り与党(自公勢力)が過半数を制するようにならなければ、彼が「県外移設」の姿勢を変え、埋め立て承認申請を受け入れる可能性もあるのではないかという懸念を多くの県民が抱いている。

既成政治に対する不信が、橋下徹・大阪市長(大阪維新の会代表)に代表される新自由主義・独裁への期待に流れつつあるが、日本会議に所属する佐喜眞淳 新市長も、その流れの人物である(選挙期間中、「沖縄維新の会」名で伊波氏に対する誹謗中傷のビラが出されていた)ことに、危惧を感じざるをえない。

辺野古アセス違法確認裁判が大詰め

地元住民や県内外の原告六二〇人が、辺野古アセスは違法法であるとして、やり直し（違法確認）と損害賠償を求めた裁判の集中審理が、一月十一、十二、十三日と二月一、二日及び三月五日の六日間、那覇地方裁判所で行われた。二〇〇九年八月の提訴から二年半が過ぎ、裁判は、いよいよ大詰めに来ている。被告の政府・防衛省は、訴えの却下Ⅱ「門前払い」を求めているが、酒井良介裁判長は、それを退け、現場調査も含む、積極的に丁寧な実質審理を行ってきた。原告側の証人申請に応えた今回の集中審理において、一月、二月にはアセスや法律の専門家、ジュゴンやサングの専門家、原告など、合計十三人が法廷に立ち、それぞれ

れ三〇分～一時間の持ち時間で証言。裁判長や裁判官は、パワーポイントを使った説明に、熱心に聞き入り、各証人や原告に対する質問にも熱意が感じられた。提訴時は、準備書までの手続きについての裁判だったため、評価書は対象になっていないが、酒井裁判長は新しく出された評価書に対する証言も求めた。三月五日には、防衛省防衛研究所長・高見澤将林^{のぶしげ}氏を証人喚問し、日本政府が隠し続けてきた垂直離着陸機MV22オスブレイの配備（アセスの最終段階の評価書において初めて明らかにした）について、原告代理人が尋問した。

高見澤氏は、昨年八月まで、事務方のナンバー2と言われる防衛省防衛政策局長を務めたエリート官僚。米軍普天間飛行場移設などについて協議した日米特別行動委員会（SACO）当時は防衛庁運用課長として交渉の実務担当者だった。SACO最終報告発表（九六年十二月）直前、オスブレイ配備を沖縄に明言しないよう求める「想定問答集」（「タカミザワ文書」とも言われる）を、在日米軍司令部に届けた張本人で、日本政府のオスブレイ隠しの実態を明らかにするため、原告側が証人喚問を求めていた。

防衛省の抵抗を押して市民運動が防衛官僚を法廷に引きずり出した画期的な法廷とあって、過去最多の傍聴希望者が、何重もの列をなし、抽選に漏れた人びとは裁判所の廊下で報告を待った。

公務員の「守秘義務」という壁が

立ちはだかり、いわば「手を縛られた形」での尋問だったが、原告代理人の加藤 裕弁護士は、国会答弁やマスコミ報道など公表された事実を元に、「守秘義務」に逃げ込もうとする高見澤氏を一時間以上にわたって鋭く追及。「米側から正式な通報がない」として方法書・準備書にオスプレイ配備を載せなかったにもかかわらず、正式な通報はないが（沖縄への「配慮」で）評価書には記載したという矛盾。国会答弁の際も、「そのまま答ええない（はぐらかす）」という言葉を引き出し、防衛省の嘘とごまかし、隠蔽体質をあぶり出したという意味で、大きな成果を得たと言える。裁判は、次回七月十八日で結審し、秋にも判決が出る見通しだ。

稲嶺名護市長の訪米報告

稲嶺進・名護市長は二月六～八日、「辺野古基地建設反対」を訴えるために米国・ワシントンを訪問。名護市は、その訪米報告会を、二七日夜、名護市民会館大ホールで開催した。

稲嶺市長は、訪米の目的について「一昨年の市長選から二年、市民に約束した『海にも陸にも基地を造らせない』意思を貫き通してきたが、その傍らで日米両政府は改めて辺野古へのV字案を確認。たくさんのお客が『理解を得る』ためとして沖縄入りしたが、名護まで来た人は一人もいない。どうやら嘉手納あたりに大きなバリアがあるらしい」と笑いを誘い、「日本

政府の頑なで強引な姿勢が変わらないので、軍転協（沖縄県軍用地転用促進・基地問題協議会。沖縄県及び三市町村で組織）として初めて『県内移設反対』を決議した。訪米も軍転協としてやろう、と提案したが、かなわないまま押しつけられてくる危機感を感じたので、単独でも行かなければならないと思った」と述べた。

七、八、九日の三日間にわたって国務省・国防総省、米国連邦議会（上・下院）議員や、関係者（軍事委員会、歳出委員会、財務委員会、外務委員会）、シンクタンク等、計二〇人と会談し、講演会や記者会見を行ったことを報告。「地元の名長が来たということで関心はとても高かった。これは日本国内

の問題ではないか、要請先が違うのではないか、という反応もあったが、それに対しては、一六〇九年の薩摩侵攻以来、武力による廃藩置県、沖縄を切り離した日本の独立、沖縄の日本復帰をめぐる裏取引など、沖縄を犠牲にすることで繁栄を享受してきた日本による構造的差別が今もずっと続いており、基本的人權、民主主義の問題として捉えて欲しいと訴えた」

「米国側は、基地が沖縄に集中しすぎていることに理解を示した。米国では普天間基地の問題を日本国内とは別次元で問題にしている。海兵隊の抑止力とか沖縄の地理的優位性とか、野田政権が根拠として呪文のように繰り返していることは、全く問題にしておらず、財

政問題が大きな比重を占めていることがわかった。抑止力論も、パッケージ論も、根拠を失っていることを実感した」

会場から「日本とアメリカの認識の違いは、どこから来るのか」と質問した県内大学生に、市長は、「米国で、『日本には軍事専門家がいない』と言われた。『日本とは、まともに話ができない』ということではないか。五年の間に首相が六〇七人、防衛大臣が九〇十人も替わるような国と、まともに話ができるわけがない。日本は、米国に対して情報提供していない。米国に対して本土に対しても、正確な情報を提供していくことが必要だ」と答えた。

ヘリ基地いらない二見以北十区

の会の渡具知智佳子さんは、「なぜ日本政府は辺野古にこだわri、ストーリー行為を続けるのか」と質問。市長は、「これまでの沖縄県知事や名護市長が『苦渋の選択』をやってきたことが、誤ったメッセージを送り、政府に期待を抱かせた」と述べた。

高江スラップ訴訟で不当判決

三月十四日午後、米軍ヘリパッド建設に反対して座り込みを続ける高江住民を、国(沖縄防衛局)が「通行妨害で訴えた裁判で、酒井良介裁判長は、住民一人に対し、通行妨害禁止を求める判決を言い渡した。『ヘリパッドいらない弁護団』が「不当判決」の文字を掲げ、那覇地裁前に怒りの声が渦巻いた。

八歳の少女を含む高江住民十五人に対する仮処分申し立て（〇八年十一月）から三年余。うち「妨害行為」をしたと認定された二人の住民を対象とする本裁判から二年余。現地進行協議（現場視察）や集中証拠調べなど、（辺野古アクセス訴訟の裁判長も務める）酒井裁判長の熱心な姿勢への期待もあり、全面勝訴を信じていた住民や、支援者から、「まさか！」「司法は何のためにあるのか」の声が上がった。

圧倒的権力を持つ国が税金を投じて、「国策」に反対する非力な住民を弾圧し、住民運動を潰そうとする「スラップ訴訟（市民参加に対する戦略的訴訟の略語。嫌がらせ訴訟とも言われる）」の典型として、「訴権の乱用」だと訴えて

きた住民側の主張は退けられた。被告とされた二人のうち、安次嶺現達さんに対する国の請求は、棄却。もう一人の伊佐真次さんについて、「第三者をして妨害させる恐れ」や、インターネットなどを通じて抗議行動への参加を呼びかけたことも「通行妨害」だとする国の主張は退けたものの、「国の通路使用を物理的方法で妨害してはいけない」と命じた。

憲法に保障された「平和的生存権」や「表現の自由」を守ろうと三〇人余の弁護士が結集する弁護団の池宮城紀夫団長は、「不当判決だが、国家権力による住民運動抹殺という国の意図は一部棄却された。運動は、これまで通りできる」と激励。伊佐さんは、「たたかいはこれか

ら始まる。現場で建設を止めると同時に、裁判も続けていく」、安次嶺さんも、「伊佐さんは私と同じことしかやっておらず、きわめて不当だ。これまで同様、たたかっていく」と決意を述べた。

その後、那覇市内で開かれた報告集会で、弁護団は、スラップ訴訟という本質を見過ごしていることが最大の問題だと指摘。座り込み自体を違法とはいえないが、「表現行為の範囲を越える」とされた伊佐さんの行為は事実誤認で、二人とも棄却されるべきだと、控訴する意思を示した（三月二七日付で控訴）。

沖縄ができる復興支援とは？

最後にどうしても触れておきた

いのが、震災がれきの受け入れ問題である。「被災地の復興を妨げている最大のものが災害がれきだ」と、政府はその広域処理を全国的に推進しようとしており、沖縄でも、恩納村議会が受け入れ決議を行なったのはじめ、那覇市、南風原町などで、がれき受け入れの動きが始まっている。しかし、それがほんとうに被災地復興への支援なのか、遠い沖縄まで運ぶ莫大な輸送費に国民の血税を使うべきなのか、それで儲かるのは誰なのか、たくさん疑問が湧いてくる。

朝日新聞が今年二月に行なったアンケート調査によれば、被災地域住民が優先すべきと考えている最大の課題は、雇用、原発事故の収束・放射性物質の除染、心のケ

アなどであり、がれきの処理ではない。地元はむしろ「十年、二十年かけて地元で片づければ雇用も発生する」(岩手県石巻町の伊達町長)と広域処理には否定的だと聞く。

福島原発事故による放射性物質を含んだ震災がれきを、政府は「1kg当り8000ベクレルまで全国で処理できる」としているが、国際基準は100ベクレルであり、それ以上のものは処分場に閉じこめ、厳重な管理下に置かれている。原発事故後、何の根拠も示さないまま基準を80倍にも引き上げた政府に、がれき受け入れを打診された全国各地の自治体が、「人体への被害がわからないものを検討はできない」と拒否するのは当然だ。「放射性物質は発生源からでき

るだけ近い場所に封じ込め、拡散させない」という原則に則って、東京電力と政府は全力を注ぐべきであり、莫大な血税を使って全国に放射性物質をばらまき、安全な場所をなくしてしまうなど、もつてのほかだ。そもその責任者である彼らが自らの責任に類被りし、マスメディアを動員して、国民みんなに責任があるかのようなキャンペーンを張り、反対する者は「人でなし」「非国民だ」とお互いを反目させることを許してはいけな

いと強く思う。

沖縄はいま、米軍基地由来の化学物質等の汚染はありながらも、放射性物質で言えば、国内で最も汚染の少ない安全な場所だ。放射性物質の影響をいちばん受けるの

は細胞分裂のさかんな子どもたちだが、チエルノブイリの経験から汚染のない場所に一か月滞在すれば、子どもたちの体内のセシウムが激減し、健康状態がよくなることが立証されている。夏休みや春休みなどに、福島の子どもたちを沖縄へ受け入れる試みが既に行われており、今後、保養地としての大きな役割が期待されている。また、汚染された食物による内部被曝が問題になる中で、亜熱帯の自然の恵みと汚染のない土で育てた安全な食材を、被災地をはじめ全国の子どもたちに届けることこそが、沖縄ができる最大の復興支援ではないかと、私は考えている。

(ヘリ基地に二見以北十区の会
共同代表・いーなぐ会事務局長)

状況に「返し風」を

第74号

2012年3月31日 発行



けし風



新沖縄フォーラム

【特集】

八重山から「国境」を見る

◆ハイテクビュー八重山の近代とともに考える
石垣の動き (大田 静男)

◆山根 頼子 ◆安里 英子
石垣の動き (大田 静男)

◆ハイテクビュー町議として自衛隊誘致に反対する
(崎元 俊男)

◆一坪反戦地主関東ブロック・与那国行動班
(崎元 俊男)

◆特別インタビュー
沖縄の民間港を軍事利用させないために (大城 盛雄)

◆シマだより (山原/関東) ◆表紙の言葉

◆沖縄・いま ◆北の風・南の風 ◆城岳から

◆沖縄環境ネットワークだより ◆佐喜眞美術館だより

◆強口・冷口 ◆沖縄この三カ月

◆読者の集い (関西/関東) ◆編集後記

■定期購読の申込みは、はがきかFAXをお願いします。こちらから郵便振替用紙をお送りしますので、ご希望の方は、年間4号分(2000円)または2年間8号分(4000円)をご送金下さい。*バック・ナンバーあり。
発行所 〒900-1115 那覇市久茂地3-29-41 401号 ☎&FAX (098) 861-1101 E-mail: keshikaji@mbr.nifty.com

今年は大雪だった

押見操子

ふきのとうまだ雪の下

例年なら、職場の駐車場とか、調整池の辺とか、ふきのとうが出ていて、摘んでポケットに入れるのだが、まだまだ。春が遅い、というより、まだ雪の下である。

さすがに、海岸沿いの自宅には雪はないが、職場はまだ、雪が残る。『柏崎日報』の「雪情報」を見てみよう。

「二六日午前9時現在の市内観測地点の積雪（二四時間降雪＝単位センチ）は次の通り。

県柏崎地域振興局 0（0）
柏崎総合高 0（0）

旧北条北小	112（8）
旧鵜川小	255（23）
西山町事務所	5（6）
高柳町事務所	178（9）
高柳町門出	225（20）
同石黒	258（30）

（『柏崎日報』平成二四年三月二六日記事より）

こう抜書きしてみても、それだけでいろいろなことがわかる。柏崎には、新潟県の総合庁舎がある。市内に高校は五校ある。ひとつは私立高校だ。二つの旧〇〇小学校。小学校が廃校し、そこが地域の象徴であったのがよくわかる。実は今年度で廃校する小学校が五校も

ある。〇〇町事務所は、平成の大合併で柏崎市に入った地域の役場だった場所だ。鵜川地区、門出地区、石黒地区は豪雪地帯である。カッコの中は、それまで二四時間で降った雪の量である。鵜川地区、門出地区、石黒地区ではまだ雪が降っていったということだ。

全国ネットのテレビニュースでは、もう桜の便りが聞こえそうな時に。梅は咲き誇っている時に。当然、幹線道路の除雪は万全だ。三月二五日、「治三郎の水」を汲みに鵜川に行ったが、道路に雪はない。が、除雪のためにのけられた雪が道路の右左に溜まっていて

二メートル弱の壁状になっている。

両側の木々は、木々のそばから雪が解けていくので、木のあるところがへこんでいる。折れている枝も目立つ。すごいね、などと、

他人ごとのように言っていて、自宅に帰ってきたら、家の裏手のモッコクは、太い枝が、みごとに折れていた。屋根の雪下ろしをしたときに、その重さで折れたのだろう。

平成十八年にも豪雪があつて、柏崎市は、たくさんのお金を除雪に当てた。中越地震の傷が癒えないうちに……。

そして、中越沖地震が来た。

災害のたびに、市長は「お金が無いから」と言つて、市民サービスを削ろうとするように感じる。除雪のお金は大きい。平成二三年

度の当初予算は四億三千三百七十一万円。一月末には、その上、三億円追加した。

「ゆきほげ」という重労働

東京出身なので、雪がそこはかとなくうれしい。「雪見酒」なんと言つと、しかられる。

柏崎は風が強いので、「雪は吹き飛ばされて、山の方に積もるのだ」と言われていた。事実、その通りだ。そして、このごろは温暖化で、雪囲いや雪つりをしないでいた。

年末のクリスマス寒波以来、普通は降つて積もつては消え、降つて積もつては消え、たまに除雪車が出て、たいへんなのは二週間ぐらいかな、といった柏崎の町場暮らしをしていたのだが、今年は違

つた。

一月の初旬中旬あたりから積もった雪が、解けない。気温も低いのであろう。家の前の道路は消雪パイプがあるので、ちよろちよろと水が出るようになっていく。道路の両側の家が「消雪組合」を作つて、毎年お金を集めて、運営している。組合長は輪番制で回つてきて、今年度、来年度と、夫がその任を受けている。今年は消雪パイプが大活躍である。それでも、地下水がパイプを通して水を出して消す雪の量より、降り積もる量が多ければ、当然、雪が積もる。

道路はまだ、ましであるにしても、雪は、庭、家の屋根、駐車場に降り積もる。夫は柏崎出身なので六十代でも、毎日せつせと雪を

「ほげる」。雪かきをするのだ。

毎朝雪かきをして、そのあと、風呂に入って、朝食を食べる。

小さい家なので、門から家まではそんなにない。問題なのは駐車場である。家はまだいい。私が車を持たないから、一台分でよいのだ。二世帯同居だと、車が四台のところも珍しくはない。駐車スペースの確保は大問題である。

駐車場の雪の置き場があるところはいいが、「ほげた」雪の行き場がない家もある。屋根の雪下ろしは死活問題になる。水道水で溶かしたりもするが、大量だどうしようもなく、トラックで市が指定している雪捨て場を持っていくことになるのだ。だから、一斉雪下ろしを町内や地域で行うとこ

ろもある。そういう町内ではないのでよく知らないが、調整がいろいろたいへんなことは、容易に想像がつく。

バス通勤事情

一月の二六、二七、二八日と、夫が東京に研修に行くことになった。夫は、私が慣れない「ゆきほげ」をして、植木鉢とか、車とか、傷つけたり、壊したりするのを恐れてか、「何にもしないで良いから」と言っ出て出かけた。

ちよつとするなら、「ゆきほげ」も楽しい作業だ。でも、雪で下が隠れていたり、何があるか忘れていたりすると、「がちゃん」だったり「ぎぎぎ」だったりする。「駐車場は、そのままにしてい

ていいから。」とくれぐれも言っ出て出かけて行った。

木曜日、金曜日、職場は試験である。雪がたくさん降っていて、バスで行くとなると、朝は早く出なければならぬ。長靴、道路が雪で凍ってつるつるの場合は、滑り止めをつけていく人もいる。登山のアイゼンのようなものである。転ばないようにそろそろと歩く。転んで怪我をしたという話を友達に聞いた。「腰を折る、足を折る以前に、ついた手の指を折る」と話してくれた。それを聴いて以来、十分早く家を出て、そろそろと歩くことにしている。

職場行きのバスは、柏崎駅南口から出る。八時のバスに乗るために、私は七時に家を出た。

駅で顔見知りの学生に会う。

彼はカラオケ店でアルバイトをしていて、バイト明けだという。

先輩に拾ってもらった約束をしていたのだが、来なかったのも、バスで帰るといふ。「この雪だから、

直接学校に言った方がいい」と言つて、昼の弁当を分けてやつた。

バスは、ちゃんと八時に来た。

バスは、主要幹線道路を走る。

しかし、他の道の雪の状況がわからないし、雪道で、どうにもならなくなつてしまふ危険を考えて、車は主要幹線道路に集中する。

渋滞するのだ。

バスは、普通、二一分で職場に着くことになっている。この日、五五分かつた。私は遅刻した。

その上、試験も中止になった。

試験中止は携帯電話でもわかつたはずだが、充電していなかつた

彼は、「良い経験になった」と言つていた。

「試験が雪などで中止になるのは、教務課長の行いのせい」と、職場では言われている。

帰りもバス。

バスが、予定の時間より遅れる。

「遅れるんだろうなあ」と思つて

行くと、ちゃんと来ていた。普段、調整の時間が取られているのだから。昔は、バスが、坂道が登れな

くて、「除雪がなされていないと、山の上に有る学校に、雪を掻き分

けて通勤した」という話を聞いたことがあつた。それに比べれば、今は格段に便利だ。

バスに乗る。バスは、いつもよ

り乗客が多い。駐車場の雪が大変なので、車で来ることを回避したという話をしていた。そういう人も乗っている。

雪で道路が混んでいる上に、普段は停まらない停留場で停まる。降りる人も、普段バスに乗り付けないから、小銭の用意がない。ごろごろ着込んでいて、すぐに財布が出せない。

車窓から外を見る。雪が降る。風を伴う。ごうごう言っている。冬は日暮れが早い。

見通しが利かなければ、通いながれたところでも、ゆっくり走るのが当たり前だ。主要幹線道路は、自治体の意地で、きれいに除雪されている。除雪された雪は、普通道路わきに積み上げられる。その

雪が邪魔でないところは良いが、除雪された雪で、門の前が毎日塞がる人もいる。駐車場から出られない人もいる。

毎日毎日、除雪車が除雪をする、と、だんだん道が狭くなる。バスは、サイズが大きい。バス同士のすれ違いは大変だ。

あと少しで駅に着くというところで、何だか知らないが止まってしまった。バス同士がすれ違いなくなった。バスの後には車の列が続く。運転手同士、にらみ合いだ。「ここで降りしてもらってもかまわない」とも思ったが、自分勝手すぎる。

向こうのバスの前のドアが開いた。向こうの運転手がダツと立ち上がった。たつたとバスから降

りた。その音が聞こえるような気がした。

向こうのバスの運転手の手にはスコップが握られている。そして、やおら路肩の雪を崩し始めた。

私たちの乗っているバスは、といえ、そろそろと動き始めた。向こうのバスとの隙間は、いくらもない。携帯電話で様子を写真に取っている人もいる。

こんなところで、手に汗握る展開になっているなんて、誰も知らないであろう。

すれ違った。

バス同士、擦りもしなかった。

柏崎駅南口で降りる。毎回、「ありがとうございました」と言って降りるのだが、感動が声に出た。

雪国出身でない同僚と、「すご

かったですね、プロですね」「そうですね」と言い合った。

あとで、地元出身の人に聞くと、よくあることで、すぐもなんともないのだそう。しかし、乗客の安全を守り、公共交通機関としての責任を全うする雪国のバスの運転手さんを侮るべきではない、と私は思う。

JR信越線運転見合わせ

どうして試験が中止になったかという、いろいろな事情もあるが、JR信越線の運転見合わせが大きく関わっている。

国鉄だったころのイメージは、「線路を死守する。交通を確保する。どうしても列車を通す、我われは国家公務員だ」といった感じだろ

うか。

雪が降り続いているところでの線路の確保は、ものすごく大変に違いない。人力が必要だ。経験も必要だ。雪が降らなければ、このような人件費はいらないのだ。いつもいつも大雪というわけではない。人件費が経営を圧迫すると思えば、人を減らす。いきおい、いざという時の人が足りない。それで、安全が確保されなければ、列車を通さない。運転見合わせが多くなる。

列車が無ければ、陸の孤島になるわけでもない。今や、幹線道路は除雪され、高速バスが通っている。

列車の運転見合わせで、柏崎から帰れなくなって、次の仕事にそ

なえて、「JRの運転手を乗せて高速道路で新潟に行った」というタクシীর運転手さんもいる。私は運転免許が無いから、鉄道に好んで乗るが、もう感覚が違っているのだろうか。

「民営化し、経営状態が悪ければ、廃線にすればいい」と思っているのではないか。腹立たしいというのは、懐古趣味なのだろうか。

雪は降り摘む

土曜日は、「ゆきほげ」の音で目を覚ます。お隣が「ゆきほげ」をしている。みんな「ゆきほげ」をしている。

私もしないと、近所で何か言われる。とは思っていないが、隣の駐車場に置いてある車は、「かま

くら」状態になっている。

車の屋根は大丈夫だろうか。へこんだりして。

雪は断続的に降っている。

夫が疲れて帰ってきて、まず、「ゆきほげ」では申し訳ない、という殊勝な心がけではないが、ちょっとはやろうかという気になる。

遊び程度なら、「ゆきほげ」も適度な運動だと思えば面白い。ダイエットだと思って、やればいいんだ。

アルミニウムの軽いスコップを持って外へ出た。

「ゆきほげ」グッズはいろいろある。スノーダンブは非力な人でも、大量にほげることができるのだが、私には、いまひとつ、上手に使えない。スコップに雪を載せ

て、もう一メートルぐらいになっている雪の上に投げける。猿臂投げの要領である。すぐに息が荒くなる。

急に、

「道具貸しましょうか。」

と声がした。

フード付きの完全装備で活動しているの、気がつかなかった。

お向かいの二十代のご主人だ。

見かねて声をかけてくれたらしい。

「上手に使えないから」と丁重

にお断りすると、

「あんまり根をつめると、腰、

痛めますから」

と言ってくれた。

「ありがとうございます。」

雪国の人は、なんて優しいんだ！

あまりの「ゆきほげ」の下手さに、

見るに見かねたらしい。

「どこからどこまでやらなければならぬ」というわけでないの、疲れたら休み、やりたくなったらやる。でも、雪がやまないで、降り積もると、際限が無くて、めげてくる。

雪が三メートルも積もる地域では、毎年、一階は冬中暗いそうだと

「暗い中にいると気がめいる」と

聞いた。冬、天候が悪くて、晴れ

ないと気がめいるのを経験してい

るので、どんなにいやか、想像が

つく。

「ゆきほげ」をすると、おなか

が減る。寒いし、食べなきゃね。

と思う。ダイエットには全然なら

ない。

あつぱれ、よく「ゆきほげ」し

たね、と言われないわけではないが、欲が出る。「ゆきほげ」をしていると、通る人が、声をかけてくれる。

でも、重労働だ。

一人暮らしのお年寄り、どん

なに大変だろう。

お金を払って除雪してもらっているのだろうか。

〈除雪ボランティア〉もいると

いうが、きつとフル回転であろう。

「福祉協議会の高齢者事業団は、

安価だ」とうわさで聞くが、誰も

彼も「ゆきほげ」をしている。建

設会社が「ゆきほげ」を専門的に

するという。命綱とかヘルメット

とか、しっかり完備して実施するし、

雪も運んで行ってくれるそうだ。

でも、金額が張る。

アパートに住んでいる同僚は、「一番最初に駐車場を出る人がほげるために、いつも自分ばかりがほげる羽目になる」と嘆いていた。ある同僚は「ゆきほげ費用」を後でまとめて請求されるので、三月が怖いと言っていた（後で聞くと、夫婦、車二台分で五万六千円だそうである）。

土曜日の夜、夫が帰ってきた。信越線のダイヤが乱れていて、そのことをぶつぶつ言っていた。新幹線と比べてしまったためだろう。

「あ、ゆきほげしてくれただんだ。」
「うん。大変さが良く分かった。」

「災害」となる、

平均二メートル四センチ

柏崎市は、一月十五日から豪雪警戒体制をしき、二七日に豪雪対策本部を設置した。

二八日には、市内の九箇所以降雪観測地点の平均積雪量が、204・2センチとなり、災害救助法の適用基準204センチを上回った。

市はすぐに災害救助法の適用を申請した。

これで、要援護者の除雪費用を国と県に出してもらえる。

雪との戦いは、その後一か月も続いた。

（柏崎日報平成二四年一月二七日から三二日までの記事を参考に）

今年の冬は、もう一度ある。

市民生活の利便性を追求するた

めには、このような除雪の予算が必要だ。

除雪によって、確かに雇用が生み出されている。適切な降雪なら良いが、ここまで降られると、つらい。だからこそ、春が来る喜びは一段と大きい。春を待つ心は、一段と大きい。

今日のトップ記事は

前述の「雪情報」が載っている柏崎日報の、今日のトップ記事は、「柏崎原発が全基停止」である。

ひとつだけ動き続けていた六号機が、定期点検に入った。東電の原子力発電所は、すべて停まったことになる。

（平成24年3月26日）

意思を通すには、お金が要る (2)

押見 操子

東京から夫が帰ってきた。といっても、出稼ぎに行っていたわけではない。東京に行ったのは、この年の三月十日に亡くなった私の母の遺産分割の相談に行ったのだ。相続人は私、妹、養子の弟(妹の長男)である。平日の昼間なので仕事もあり、私は行かないことにした。夫に行ってもらう。相手側も、当事者ではなく、妹にとつては夫、弟にとつては父親にあたる者が話し合いを行う。どのみち、その場では決まらないであろうし、内々の相談ということだ、と私たちは思っていたのだ。夫は、私たちが相談してこのようであろうかという分割協議の案を二つもっていった。ところが、公平をもととするので口を出さないと言っていた親類の税理士が、相手に非常に有利な税理事務所相続分割案を出してきたのだ。自宅の土地の評価を、小規模宅地の課税額(路線価の八〇パーセント減)で評価したことが、相手方に有利になった原因である。私たちは、「相続の土地の価格は、時価であるが、路線価で評価される」ということを知っていた。しかし、税理士事務所では、税理士の同僚が、事務所案に近い形で同意するよう説得にあたる。

夫は困って、私に電話し、結局、弁護士に頼むことにしたのである。

帰り着いた夫は、なんども、なんども、行きつ戻りつ、状況を語ってくれた。

——どんなに困ったか、どんなに悩んだか、そして、どんなに友達が良くしてくれたか。

胸が熱くなった。この日、相手側に、私が委任した弁護士の名前をファックスで送っている。その文字は、筆ペンで大きく、怒っているように見えた。平成二年十二月十八日のことである。

年末十二月二四日、分割案の提示

相手側から弁護士に電話がかかってきたらしい。その話の内容は、よく覚えていない。

二一日には税理士が弁護士事務所に行ったが、弁護士は不在。しかし、どのような弁護士事務所であるかがわかったはずだ。

弁護士と電話で話し合って、私たちが考えた二つの案のうち、弁護士も支持した案に沿って、遺産分割協議基本方針案を作ってもらった。そして、この日、弁護士は、税理士（相手側の代理人のようである）に、提示した。「母の銀行の入出金の記録も見せるように」としている。クリスマスであるが、それどころではない。

そして、その二日後、十二月二六日付で、返事がきた。

あて先は、「押見操子代理人弁護士と税理士」である。それは、十二月二四日の遺産分割協議案に合意しますというものだった。そして、「同じ税理士に再計算してもらい、申告・相続税の納付を申告期限までにする」というものだった。判は実印であった。

ああ、よかった。

まずは、「法定相続のきちんと三分の一ずつにすることは、合意された」と思った。

あとは、こまごましたものの、やり取りである。

しかし、弁護士威力というのは、すごいものだ。数日で展開してしまうなんて。たくさんの人が弁護士になりたがるのも不思議ではない。勉強も、経験も、並大抵ではないのだろうが……などと思っていた。

年始 一月五日土曜日「分割協議書」

年賀欠礼。しかし、子供たちが帰ってきて、良いお正月だった。子供たちに、この間の経緯を話して聞かせた。箱根駅伝も見た。母校が出るだけでもいいと思ったが、結構頑張っていたよかった。

そして、一月五日、いよいよ弁護士に会う。

エレベーターの入り口で、弁護士と会った。鍵を開けてくれながら、「土曜日は、本来事務所自体が休みなのだが、会議や仕事に、だいたい出てきているのだ」と言う。眺めのいいオフィスの会議室に通された。

弁護士は五十代の男性であった。母方のいとこ（実は幾人もいるのだけれど）と感じが似て

いて、語り口が夫の親しい親類のTさんと似ている。堅苦しさを感ぜさせない方であった。話しやすい。省略しがちな私の話と、くどくどしい夫の話を、よく聴いてくれた。

わかったことは、このようなことはよくあることらしい。「そんなものか」と、「まあ、もらったものだし」と……税理士案を呑んでしまうこともある。「おかしい」「おかしい」と思いながらも、いざこざが嫌で、我慢してしまふ人もいる。また、相続税の申告日がまぢかなので、よく考える余裕がなく、判を押してしまふ人もいる。弁護士費用もばかにならない。そう考えてあきらめてしまふ人もいることは、容易に想像がつく。

弁護士は、「妹のこともが養子になったあたりからも調べることができるが。」と言われたが、そこは、母の意志を尊重することにした。そこを争う気持ちはない。

もちろん、弁護士にただ会いに来たわけではない。分割協議書を作るために会いに行つたのだ。分割協議書の案は、すでに弁護士が作ってくれていた。その案をもとに、分割協議書を作りこんでいった。そして、「すぐ清書して相手側に出す」と言ってくれた。何しろ申告日は一月十日、その日は休日なので、一月十一日には出さなければならぬ。未分割申告の可能性もあるが、やってやれないことは、ないはずだ。

二日後、弁護士から「相手側からの合意」の連絡があった。一月七日付印鑑証明付きで実印捺印の分割協議書が弁護士のもとに送られてきたのだ。私には弁護士事務所からファックスで、送られてきて、すぐに確認した。よかった。順調に進んでいる。

一月十日 驚愕の申告内容

驚愕という言葉は強すぎるのかもしれない。しかし、私たちには、そう思えたのだ。

確かに分割協議書の中には、分割協議書を作ってから何か出てこないとも限らない。——借金を取り立てに來た人が現れたとか……。

「その時点でわかっている財産以外のものが現れたら、協議して決める」と、一条入れてあった。そこに母が入っていた、施設の預り金二十八万円とか、未収電気料金千三百九十二円とか、電話加入権二千円とか、増えていた。しかし、五百万円を超す外貨建て積立個人年金が消えており、「母の預金から払った」と、実態として知っている葬儀費が、「弟ひとりで払ったもの」と書かれていた。いったいどうしたことであろう。

どうしてこれがわかるか、と言えば、以前に、税理士事務所から相続財産の確認表が送られてきていたからである。

財産洩れを、こちらで指摘した部分もあった。その当時は、税理士を信頼していた。また、あの十二月十六日の税理士案の提示にも、葬儀費用は、三人が等分になっていたし、外貨建て積立個人年金保険は、私の取り分に割り振られていた（後日わかったことだが、これは、あの事務所案の提示より前に解約されていて、実際はとても目減りしていたのがわかっていたから

であろう。保険金は、指定してあれば、その人のものになる。だから、「保険金は指定されていた弟が全額とつてもいい」と考えて、異議を挟まれないと思つたのかもしれない。ところが夫は、保険の代理業をしていたのだ。詳しいのである。わからないわけがないではないか。

また、私の職業が「無職」とされていたのには驚いた。女は「無職」に決まっている、と思つてゐるらしい。弟のところには「会社員」と書いてあつた。実態と違うが、文句は言わなかつた。

相手側がちょっとでも多く遺産がほしいというのは、わかる。「このようにしてくれ」と言つたのかもしれない。このようにすれば、弟は、取り分がずいぶん増える。

しかし、せっかく公正を旨とする税理士を入れているのだ。「弁護士が出てきて手ごわい」となつたら、実印捺印の分割協議書のとおり、公正に分割すればいいのではないか。どうしてこんなことをするのだろう。悲しくなつた。この事実をファックスで知つたのは一月十日祝日の午後五時十一分。明日は、もう申告の日である。実際の提出は、一月十一日である。まだ、直せるかもしれない。

——でも、直せないかもしれない。

弁護士には、「外貨建て積立年金保険部分が相続採算から削除されており、葬儀費用が第一人のみの債務になつてゐるような、このような相続税の申告書は認められない。すぐ書き直して、計算しなおして、申告するように。」と伝えてもらう。「未分割申告も辞せず」そう思つた。

どうしても期限までに提出したい税理士

提出日は火曜日であった。職場に出る。

午後になった。携帯電話が鳴った。私は携帯電話に出るために、教室を出た。

そうすると、弁護士は、言った。

「計算が間に合わず、どうしてもこのまま出したい」と税理士がいうので、念書を書かせ、提出させた。相続税は税理士の不手際であるので、その分は税理士が立て替えた。」

私は、びっくりした。「そんな。税理士には、すぐ振り込んで叩き返してやります。」といううと、「そんなややこしいことをしないでください。あと、ゆっくり、説明します。」といつて、電話を切った。

念書。念書？

仕事が終わって帰ってくる。弁護士は、電話で夫に説明していた。私は夫から説明を聞いた。よくわからない。

念書は「確認書」という名前だった。手書きで大きな字であった。弁護士の字である。あて先は弁護士。日付は一月十一日。弁護士が書かせたと言っていたが、本当は弁護士が書いて、税理士が署名をしたのだ。「相続税の申告書に的確に記載等されていなかった」という言う点が指摘されていて、私（ここでは税理士）の責任において、相続人各自（とりわけ押見操子氏）

が各自三分の一になるように遺産を分割できるように再計算のうえ、分割するものと約します」と書いてあった。外貨建て積立年金保険のことと、葬儀費用のことと、私の職業のことである。しかし、「いつまでに」とは書いていなかった。弁護士は、自信满满で、「遺産分割協議書の内容に合わせるように振込みをさせる」ということだ。私たちは、不安になった。

私は修正申告がなされるのだと思った。それは、いつなのであろう。遅くなったら税率が多くなるのではないのか。いったい、どうなるのだ。

数日、数週間……経つ。二月は税務申告の時になる。三月中旬まで税理士は忙しい。そのあとになってしまう。

いつまで待てばいいのか。修正申告は、ちゃんとやってくれるのか。

一月末には、父母が写っている写真や、私の学校のアルバムなどが送られてきた。遺産分割協議書には、「二月末までに、いろいろな手続きを終わらせよう」と書いてあった。しかし、お金の件は、まるっきり、なしのつぶてである。

とりあえず、二月には、アパートなどの登記を行なった。

三月。やはり、一周忌の連絡は、こなかった。一周忌を、やったのだろうか。母の命日は、東京大空襲の日である。

三月十一日 東日本大震災

亡くなられた方のご冥福をお祈りします。

いまだ、苦しんでいる多くの方の、ご回復をお祈りします。

避難生活を強いられている方がたに一刻も早い復興をお祈り申し上げます。

私の住んでいる、新潟県柏崎。新潟地震でも揺れたところ。近くは、中越地震、中越沖地震を、私も経験した。この地震でも、新潟県も揺れが大きかったし、翌日には大きな余震もあった。

海の近くに住んでいる。「日本海側の津波はたいしたことがない」と言うが、他人ごとではなく、怖い。

それより大きいのは、原発から七キロのところに住んでいるという事実。

中途半端に重い気持ちのまま。

しかし、今日は、相統の話の続きを書く。

疑心暗鬼、疑惑

「大人の判断」というわけか、税理士の繁忙期を避けて、申告の終わった後、弁護士は、話し合いの場を持った。

三月二十四日には、税理士から依頼を受けて、私の銀行口座を記載して送った。追記で、「早く清算してほしい」と連絡した。でも、返事は来なかった。

かねて要求していた、母の二つの銀行の通帳のコピーが、ようやく手に入った。なぜ「通帳のコピーを見せてくれ」と言ったかというと、弁護士の話では、「財産を管理していた方が、そうでない方に、『このように適切に管理していましたよ』と明かして、遺産相続の時に見せるものであるはずだ」ということを聞いたからであった。相手側は、「通帳のコピーをくれ」と言われるとは、思わなかったであろう。何もなければ、それはそれで喜ばしいことである。ずつと疑ったままで過ごすのもいやである。

通帳のコピーを見た。危篤となったときごとに、お金を引き出している。嫌な気持ちになった。とんちんかんな疑いをもったこともあった。

弁護士にも迷惑をかけた。なんだか、自分が嫌な人になりつつあるように思えて、落ち込んだりもした。

弁護士は、相手方の代理人になっているような税理士を使って、相手側と交渉するつもりである。「そのほうが、解決までの時間が短い」と思っているらしい。当然、私たちには、このようなことは不慣れである。

こんなにかかるものなのだろうか。我慢比べ。

しかし、通帳は、いろいろなことを教えてくれる。勉強になった。これが、先に行つて役に立った。

請求書もないのに、引き出していいのか

七月になった。ある証券会社から、「有価証券の遺産分割分手続きが完了した」との連絡が来た。分割協議書のとおりに作業しているのだろうか。それならいいが。

ある銀行に、分割協議で私に全額割りあてられている定期預金があった。しかし、定期預金は六月に全額引き出されて、弟の口座に、税理士が振込みをしている。相続協議を行う以前に、税理士に言われて、弟を、遺産相続代表者に選任していたからだ。しかし、税理士が、すぐに弟の口座から、私の口座に送金してもいいはずではないか。

母は、ある銀行に定期預金等を持っていた。それが、分割協議で私に振り分けられていた。「その定期預金等は、税理士の手で解約されて、私の既につけていた口座に振り込まれている」と連絡があった。私は、新潟県柏崎市に住んでいる。その銀行の支店がなく、わざわざ、支店のある新潟市まで行つて、通帳記入して確認したのである。その金額を見て、驚いた。こんなに目減りするわけがない。どうしたことだろうか。

弁護士を通じて調べた。すると、その減っていた金額は、「相続申告時の私の分とされている相続税の金額と、税理士の相続申告手数料の私の分とされる金額の合算」だったのだ。

「私の相続税の金額」は、一月十日に「確認書」にも署名してある通り、正しくない筈ではないか。「税理士の相続申告手数料」は、請求が立っていないし、領収書も来ていない。

勝手に。

私の承諾なしに。

だいたい、「確認書」についての回答だって、いっさいもらっていない。

税理士には、「普通のこと」なんだろうか。顧客の口座から、請求書もなしに、引き落としの了解もなしに、引き落としを行うことは。

引き落とししたら領収書を発行しないのだろうか。引き落とし先に對して。

当然、弁護士を通じて、抗議した。納得していないのに、「確認書」を履行していないのに、仕事が終わったように勝手に報酬をとってよいのか。相続税額も納得していない。

弁護士は、かなり激しく迫ったようである。

相続税額と税理士報酬額は、結局、振り込まれてきた。税理士からではなく、相手側からである。推測するに、一月十一日に支払われた私の相続税額と称するもの(修正を要求している)は、弟が管理していた、亡くなった母の現金で支払われたのであろう。そうでなければ、税理士事務所からの払い込みになっていたはずだ。返却を望んでから二か月後の、十月のことであつた。

(つづく)

(2012年3月20日) (新潟県在住)

〔編集後記〕

◆3・11から、自分の言葉を探しあぐね、発言するのに、一年もかかった。

福島の現地の人たちと出会わなければ、それは、かなわなかった。

頭上を軽く飛び交う「日本語」に、
 錘をつけること、自らの位置を俯瞰
 すること、年齢・体力・気力のなさを
 言い訳にしないこと、そういう作業に
 お前は立ち向かえるのか、と、迷うばか
 りの時間だった。

雪降る札幌で、「根生いの地」という言葉を与えてくれた人がいる。大連：旅順の塹壕跡からは、「多国籍の兵士たちの囁く声」がした。「松川の闇夜の月も記憶せよ」と語った。

もし、希望という言葉を信じるなら

ば、「記憶の共有」を課題として、わたしは日々を生ききるしかない。たくさんの方に、励ましていただきました。

久びさの〈あごら横浜〉が担当しました。ありがとうございます。(みつ子)

◆四月十三日夜、首相官邸前にはツイッターの呼びかけで、たくさんの人びとの姿が。四閣僚会議で決めた「大飯原発再稼働」に抗議の声をあげる若者たち。その数、約一六〇〇人。しかし、マスコミは、これをすべてスルー。ペントフィルターの設置、免震棟の

建設など先送り。ふざけないで――

十六日、名古屋市での講演で、仙谷政調会長代行は「全原発停止は…集団自殺」などと発言。どこを向いての発言か。開いた口は、ふさがらぬまま。

「脱原発」を国策にすれば、代替エネ

ルギーの開発は、急速に進むだろう。原発の行く末は、言うまでもない。(綿)

◆祝！当選。十五日、鹿児島市議会議員選挙で、〈あごら会員〉小川みさ子さんが、トップ当選。

近くに川内原発を有し、日本で一番、脱原発の活動と情報発信をしてきた「議員」と評されてきた小川さん。

議会では、さぞかしバツシング、数々の嫌がらせや圧力があつたに違いない。その小川さんのトップ当選は、「市民が本ものを求めた証し」では。(斎)

「あこら40年」の原稿募集！

一九七二年二月生まれの「あぐら」。
四〇歳になりました。

「あごら40年に想う」を考えてみませんか？ 皆様の想いを、どうぞお寄せください。

締め切り 五月末日 (あごら編集部)

〈あごろ〉は、人と人が出会うひろば――

思い悩んだとき、もっと豊かに生きたいとき、流れを変えたいとき……

心おきなく話し合える仲間がいる。――そんなひろばが、北海道から沖縄まで、いつのまにか広がりました。

雑誌「あごろ」を軸に、よりよい自分と社会を目指すゆるやかな連帯。

どの部門にも「長」は置かず、自分を変え、社会を変える――

「病床からでも参加できる運動」が、モットーです。

ハガキ・FAX・メール・電話でお申し込みください。（年会費八四〇〇円）

〈BOC〉の登録もどうぞ……

一九六〇年に生まれた〈BOCバンク・オブ・クリエイティビティ〉は、〈創造力の銀行〉。あなたの創造力や特技、希望の報酬をご登録ください。各国語翻訳・通訳・企画・調査・取材・編集・校正等の専門職のほか、どんな〈創造力〉でも歓迎！ ただし、半年以上〈あごろ〉会員の方に限ります。

連絡先

〒160-0022 東京都新宿区新宿一-九-4 中公ビル
電話 03-3354-3941（代表）FAX 03-3354-9014
Eメール XLV05467@nifty.com または boc@mb.infoweb.ne.jp
ホームページ <http://homepage2.nifty.com/agora1/>

あごろ 333号 全基 廃炉へ 一再稼働反対――

●編集 あごろ新宿 ●発行 2012年4月20日 ●印刷 藤田印刷㈱

●発行所 BOC出版部 〒160-0022 東京都新宿区新宿1-9-4 中公ビル10F

●TEL 03-3354-3941(代) ●FAX 03-3354-9014 ●E-mail XLV05467@nifty.com

●定価 本体1,500円＋税 ●振替 00100-0-5264 BOCあごろ編集部



9784893061904



1920036015009

ISBN978-4-89306-190-4
C0036 ¥1500E

〒160-0022 東京都新宿区新宿1-9-4
定価 本体1,500円+税

企画・編集・翻訳…
何でもご相談ください

創業1960年 —
女性専門職集団
BOC

◆◆◆◆◆
各種プランニング

各種調査

取材・撮影・編集

校正・デザイン・レイアウト

各国語翻訳その他

◆◆◆◆◆
男女共同参画の
BOCシニアも
スタートしました。

ベテランの知恵と経験を
お役立てください。

〒160-0022 東京都新宿区新宿1-9-4
☎03-3354・3941 FAX3354・9014
E-mail XLV05467@nifty.com

平和と平等を追求する 『あごら』近刊シリーズ

「女の年金」を考える

あごら40年に想う

活躍する女性たち

サイレントマイノリティのBOC出版